
そんな恋のカタチ

RioN

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

そんな恋のカタチ

【Nコード】

N0632E

【作者名】

Rion

【あらすじ】

遊び人を豪語する男。本命彼女がいたってカマワナイ、浮気なんて朝飯前。だって男の本能、100人きり1000人斬りの超男前。そんな彼と、狙った男に落とせない男はいない。男なんて単純。安定が欲しくて結婚したけど自分は夫以外にも愛されたい。だって女は恋をしてキレイになるのよ？もちろん大事なものは家族よ。だからオアソビ。そんな男ウケのいい主婦の駆け引きと恋愛テクニクと、徐々に【ホンモノ】に変わっていく心の変化を描く感動(?)ストーリー。

女 大好きですが何か？

『いらつしゃいませ』

低い、かつぜつの良い、世間的に言う【イイ声】が、静かな店内に響く。

冷たさが感じられる目、白いキメの細かい綺麗な肌、真っ黒な髪、クールな印象を与える男が店の奥から現れる。

『カウンター席とテーブル席、どちらがよろしいですか？』

そう言うと、クールな印象を解くかのように、彼は優しく唇をキュッと閉じて笑う。

『あ・・・じゃあ、カウンター席で・・・』

客であるカップルの彼女の方が答えた。

『それでは、こちらにどうぞ』

そう言うと彼は、次は先ほどと違い、目を細め、歯を見せ、母性本能をくすぐるような無邪気な笑顔でニッコリと笑う。

カップル客の彼女は、その笑顔に少し照れ、恥しそうに俯く。

彼氏、面目なし。

『ふん・・・ブスが・・・』

カップルがカウンター席に着いたのを確認して小さく呟く。

クールで少し冷たそうな印象で、突然無邪気な笑顔になる、この酷い男。

名前は 星野ほしの 智哉とみや

年齢は26歳、職業自営業。

市内の一等地にレストランバーを開業していた。

なぜ26歳という若さで開業できたかということ、答えは簡単、両親がお金持ちの筋金入りのお坊ちゃま。

坊ちゃんただけあり、幼稚園、小学校、中学校と私立に通うが、甘やかされて育ったが為、中学校に入る頃には立派にグレた。

お陰でエスカレーター式の学校であるにもかかわらず、高校には上がれず仕方なしに他校を受験。なんとか私立の高校に通うが1年で退学。

10代は荒れに荒れた生活をする。

中学1年の時から車の無免許運転。

飲酒に喫煙。

中学の間に補導された回数、数知れず。

喧嘩はしょっちゅう、26歳になる今、今のところ無敗。

窃盗、強盗、当時問題になった、オヤジ狩り。

クスリやシンナー以外の悪い事なら、殺人以外は大概経験済み。

これだけ聞くと【いかにも】といった感じの不良少年を想像するであろつ。

汚い金髪、何連にも繋がったピアス、だらしない服装など。

しかし、彼は違った。

確かに彼の周りの人間はこんな感じの人ばかりだが、彼は一見、中学生の時には小学生に間違えられ、高校生の時には中学生に間違えられる、イカツさとは程遠い顔つき。

黒髪で耳に被さるくらいのサラサラの、オシャレに流す程度であまりいじらず、自然な髪型。

綺麗な白い肌に、遠慮がちな小さいシルバーアクセ。

服装も不良少年によくあるダボダボB系ファッションではなく、どちらかといえばモノトーン中心、のキレイ系のファッション。

どこからどう見ても悪そうには見えない。そのお陰で、過去、居酒屋で大乱闘、彼は三人相手にかすり傷一つなく喧嘩に勝利。

駆けつけた警察は、転がる三人を見て、そこに立っていた彼に言う。

『やった奴は逃げたのか？』

やった奴は俺ですよ。

なんて言う訳が無い。

まず、彼の外見を見た警察でさえ、【彼ではない】と騙される始末。

そんな彼だが、仲間内では常にリーダー格。

やりすぎだろう？つてくらいの無茶苦茶な彼の行動や言動にも、なぜかみんながついてくる。

みんなが慕い、みんなに愛され、みんなに頼りにされる。

顎で人を使うような彼なのに、人を物のように扱う彼なのに。

それでもみんなが慕う、彼の魅力は当時から同性異性関係なく、計り知れないものだった。

そんな彼にも18歳の時に転機が訪れる。

先ほど書いた大乱闘で足が付き、逮捕されてしまう。

実は彼が高校に退学した理由は、16の時にも一度鑑別所に入っていたのが学校にばれてしまった為で、今回の逮捕で2度目になってしまう。

二度目の逮捕となった彼は少年院に行く事間違いない。

しかし、彼の両親は当時アメリカに住んでいた為、両親のおかげで海外に二年行き、地元の仲間と離れ両親の元で暮らすという条件で少年院を免れ、彼は渡米することになる。

2年と言う期間限定であったが、海外暮らしがよほど楽しかったのか、結局彼は4年という月日を海外で過ごす。

そして4年後。

更に男に磨きがかかり、英語もマスターし、4年と言うつきひですら関係無いかの様に、沢山の仲間達に出迎えられ、彼は日本に戻った。

さて、そんな彼が日本に戻り、さすがに22歳にもなり悪い事から足を洗い次に目覚めたのが

【女】

元々13歳の頃から常に彼女という存在があり、女というものに苦勞しなかった彼。

しかし、当時は女よりも仲間と悪さをするほうが楽しく、ただただ言い寄ってくる女の中で一番可愛い女を彼女としてポジションを与えていただけ。

今の彼女よりも可愛い女が現れれば彼女を換える。

渡米するまでの彼の女関係はこんな感じだった。

しかし、日本に戻り、真面目に働いて欲しいと願った彼の両親は、彼に一軒の店を任せた。

それが今彼が働くレストランバーだ。

彼の両親は、もう悪さをしないで欲しいと願い彼に任せた店。

しかし、彼にとって【女遊び】という悪さに移行した今、その店は彼と女が出会うきっかけを与える場所という恰好の場となった。

いつしか、男前の店長のいる店としてひそかに人気が出だした頃、彼はぐんぐん女をメロメロにする業を身に付けていった。

・・・そして現在。

26になった彼は、本命の彼女が一人、浮気相手、数知れず、そんな日々を送っていた。

が、しかし、今彼はちょっとした問題に直面していた。

『おはようございます。』

1人の可愛い女の子がカウンター内に入ってきた。

【・・・ああ、もうこんな時間か・・・】

カクテルを作りながら智哉は、彼女の方をチラッと見て、また目線をカクテルグラスに移す。

『あの、女の子の客、智哉の知り合い??』

彼女がカウンターの裏に置いてある伝票を見ながら、智哉に話しかける。

『違う』

智哉は無愛想に答える。

彼女の名前は、橋本 沙織

年齢は智哉の一つ下の25才。

今時風で、大きな目が印象的な可愛い系の彼女は、智哉の今の本命の彼女だ。

そう、智哉の悩みの種だった。

智哉との出会いは小学生の時。

その後アメリカから帰った智哉と偶然再会し、交際が始まった。

人一倍嫉妬心が強く、智哉が自分の生活の全てである彼女は、智哉を監視する為に智哉の店でアルバイトをしていた。

付き合いだして1年半。

付き合い始めの頃は嫉妬心が強い事も知らず、

『少しでも智哉の側にいたいな』

と、可愛い事を言う彼女に、週に三日だけアルバイトとして彼女を雇ったのが失敗だった。

彼女は接客で智也が客の女の子と楽しそうに話をするだけで機嫌が悪くなる。

最初のうちは可愛いものだと思っていた智哉も、執拗な程の嫉妬に疲れ始めていた。

しかし彼女の嫉妬が日に日に酷くなったのも、智哉が原因でもあった。

あれは付き合いだして3ヶ月目の事。

智哉には仕事が終わってからいつも飲みに行く店があった。

その日は彼女はバイトの日ではなかったので、仕事帰りにそのままいつもの店に向かった。

そしてその店にはいつものメンバーがいる。

その店の店長も智哉の中学の先輩にあたるひとだ。

その日は智哉以外にも、OL風の女の子二人組みも別客として店に居た。

智哉達の酒も進み、OL風の彼女達も交え楽しく飲んでいると、やはり男と女。

王様ゲームが始まる。

テキーラ等の強いお酒を智哉たちに飲まされ、ベロンベロンに酔っ払っていたOL風の彼女達は、智哉達の思惑通り裸に近い格好にさせられていた。

店はもう閉店。

店長も交えて乱交パーティーの始まりだ〜！

そして、智哉が可愛いほうの女の子にインサート……

の瞬間……

バタン！

店の入り口扉が開く。

『何やっとなんじゃ、テメ〜〜！！』

そこには怒りに狂いながら叫ぶ沙織が立っていた。

智哉の友達はやバイ事態に動けない。

しかし智哉もかなりのお酒が入っていたので、気が大きくなっている。

『お前……なんやあ！？何しにきた！？』

OL風の彼女達も一気に酔いが醒め、あわてて服を着る。

『仕事とつくに終わってんのに、電話はないわ、家には帰ってへんわ……この店に来てると思ってた見に来たら、お前この状況どういうことやねん！』

沙織は怒りで声が震えている。

しかし、智哉は店長を睨みつけ

『なんで鍵閉めとらんのや！？』

と、店長にキレル始末。

もう最悪の男だ。

その後、沙織につれて帰られた智哉は、やっと我に返り、沙織に謝り、智哉を好きでしかたなかった沙織も別れることまでは決断できずに許してしまう。

こういう事件があったから、沙織は一段と嫉妬が酷くなった。

そんな酷い彼だが、彼も人一倍独占欲が強く、自分の事を棚に上げて、彼女の浮気は絶対に許さない、束縛と嫉妬の激しい男だった。

というよりは、彼は自分の女と思っている女が自分以外の男に目移りする事が、自分のプライドが許さないという事だ。

なので、彼の場合は彼女が浮気をしたと解った瞬間に、すぐに別れを決断する。

しかし、こんな彼にも恋愛に対しての言い分がある。

『本気に好きになる？会いたくてたまらない？常に一緒にいたい？そんな感情にしてくれた女なんて、今まで一度もいなかった。』

しかし、彼には一度だけ過去にすごく愛した人がいると言う。

結婚を迫られ、まだ身を固めるつもりはなかった彼は別れを決断した。

だが、その後すぐに後悔をし、いまでも引きずっている。

その話をする時は決まって智哉はテンションが落ち、暗くなる。

しかし、その後いきなりまた、いつもの無邪気な笑顔になり

『ま、そんだけ好きやったけども、当ても浮気はしとったけどねえ』

と、笑う。

これは周りから見れば本気で好きだったと言えるのか？

いや、彼にとって恋愛は甘ったるいだけではないと悟っている。

一緒にいたくてたまらない、だからこそ、本気の恋愛だ・・・ってのは、何かが違うんだ。

なんか、こう、もっととんでもない感情や今までに感じたことのない感情にさせてくれるような女が今まで現れていないだけ。

本命も浮気相手も、俺の中では大して変わらない。

そんなことを彼はいつも言っていた。

『きっとすごく好きな女ができて、きっと俺は浮気はしちゃうね』
『！』

そう、彼は恋愛を知らない。

ピンとはった防御線を自ら張っている。

モテる男にはこういう人が多いのではないだろうか？

『いつかは俺をそんな気持ちにさせてくれる女、現れるかな？まあ、多分無理やね。楽しむのが恋愛、つまり、女遊びでしょ〜！？』

彼は少しの酒が入るといつも、決まってこう語っていた。

男大好きですが何か？

『あゝ主婦って退屈〜・・・』

横になりながらパラパラとファッション雑誌をめくる。

『結婚も楽しいかと思ったんだけどなあ・・・』

パターンと雑誌を閉じて天井を見つめる。

『面白い事ないかなあ。』

そう言いながら彼女は携帯を手に取り、メール画面を開く。

宛先 ヒロ

本文 退屈〜。次はいつ遊んでくれるの〜？

送信つと。

程なくしてメールを受信する。

【旦那は？来週なら有給休暇とれるから、飯でも食いに行く？】

『・・・こいつにも・・・飽きたな。』

そう言って携帯を閉じる。

そんな彼女の名前は

高橋 愛。 26歳の主婦。

大きな目やセクシーな唇、といったチャームポイントとなるような所もないが、少し茶色い肩までのストレートヘアに、位置や形が整った、顔のパーツ、作り。

女ウケしそうにはないが、男ウケのしそうな、可愛い系の顔。

あどけなさも少し残るが、不意に見せる表情には知的さが伺える。

そんな彼女は三年前の23歳の時に、会社員である今の夫と、2年の交際を経て恋愛結婚。

2年前には一人の子供を出産し、今は子育てに主婦に完璧にこなす普通の主婦。

2歳になる我が子を溺愛していた。

しかし、2歳になった我が子は、あまり手がかからなくなった事もあり、時間をもてあますようになっていた。

真面目だけが取り柄の夫。

結婚するには最適な男だと結婚に踏み切ったが、彼女は真面目すぎるが故、面白みの無い夫との平穩すぎる日々不満を抱いていた。

話は遡り、彼女は中学生の頃、同級生とは違っていました。

どことなく近寄りがたい大人な雰囲気醸し出していた彼女は学校には馴染めず、虐めなどはなかったものの、学校では一人のことが多かった。

違う学校の生徒や高校生と遊び、学校へは勉強をする為だけに行っていたものだ。

そして彼女は異性に大変モテた。

中学生らしさの無い大人びた彼女は、学校では浮いていたものの、他校の生徒からはアイドル的存在で、常に彼氏と言う存在があり、学校への送り迎え、食事を奢ってもらう、TPOにあった色々な異性が彼女の側にあつた。

当時は彼女は外見でモテていた為、男に媚びたりすることもなく、勝手に言い寄ってきた男を良い様に利用していただけであった。

そんな彼女も高校生になり、同じ中学の生徒があまり選ばない私立の女子高を選んだ。

勉強はそれなりにできた彼女は高校選びや受験を苦なくこなした。

しかし、高校に入ると、女子高と言えば、合コンにナンパ、数々の異性と出会えるきっかけが増えた。

容姿の良い彼女はそういう誘いを多く受け、参加する度に必ず一人は自分に行為を持つ男を捕まえてきた。

そしてだんだん異性を虜にする要領を身に付け、外見だけではなく

言葉やしぐさで異性を自分に向かせる事も得意となっていた。

当時の彼女は二股や三股は当たり前のようにこなし、それと同時に女友達が彼女から離れていく。

【大して美人でもないのに】

そんな言葉が飛び交い、次第に彼女は高校でも孤立していった。

そうなるに彼女は次第に学校に足を運ばなくなって行った。

中学とは違い、アルバイトもできる。

お金も手に入り、学校でお勉強よりも、バイトをしてお金を稼ぎ、自分にチャホヤしてくる男達と日替わりで遊ぶ、そういう日々が楽しくてしかたなかった。

【大して美人じゃないのに】

確かに絶世の美女というわけでもない彼女がどうしてそんなにモテたのか。

男ウケする、可愛い系の容姿であるに違いは無いが、色々な男と出会ったうちに、彼女は一つの特技を身につけていた。

【人を見抜く力】

そう、少し話をしただけで、大体の相手の性格や、好きなタイプを見抜けるようになっていた。

モテない男、モテる男、真面目な男、遊び人、ありとあらゆる男を分析し、好きなタイプの女になりきる。

言わば彼女にとってはゲーム。

『こいつ、落としてやる』

自分に落ちていく男、そのやり取り、駆け引きが楽しくて仕方ない。

出会う男、男前、ブ男、関係なくとりあえず自分に振り向かせる。

ブ男よりも男前の方が難しいので楽しみがある。

しかし、自分に落ちた「恋人同士になった瞬間、彼女にとってゲームは終わり。

イイ男は数人手元に置いておくが、興味の無い男はすぐさま「ポイツ」。

しかしこの時点で相手の男は、彼女に夢中な為相当なダメージを受けるが、彼女は温情すら与えず冷たく捨てる。

何人の男が彼女に縋り付き男泣きしたことであろう。

そんな彼女は高校2年に上がる頃、完全に学校では噂が噂を呼び孤立してしまい、結果、退学してしまった。

彼女の両親も、何故孤立してしまったか理由まではよく解らないが、いじめられているという事実を彼女から聞き、退学をやむを得ず承諾した。

その後、バイトや仕事を真面目にこなしながらも、男を虜にする業を磨き、決して男の存在を切らすことなく今の今まで生きてきた。

社会に出ればもっと沢山の人間に出会える。

元々性格はサバサバとしていて、実は友情に熱い彼女は、彼女の性格や考えに共感できる女友達や親友もでき、充実した日々を送っていた。

そんな彼女がどうして結婚したのか。

彼女が結婚した23歳の時点では、彼女は愛人生活をしていた。

もちろん夫とは違う人である。

相手は某大企業の社長、もちろん既婚者。

生活が難なくできるくらいの面倒を見てもらっていたが、彼女には本命の彼氏として今の夫と当時付き合っていた。

そんな時に夫からのプロポーズ。

愛人生活で、自分が働かなくても楽しく生活ができ、年齢的にもそろそろ周りが身を固め可愛い子供を抱いている。

そんな生活も悪くないのではないか。

幸い夫は優しく、仕事も真面目でなんでも自分のいう事をきいてくれる、結婚するならこういう人が良い。

彼女は沢山の人と出会った分、男を見る目だけは確かだった。

愛人ともそろそろ潮時。

いつまでも続けるときつと不倫は痛い目に合う。

そういう事で愛人とは手を切り、今の夫との結婚を踏み切った。

結婚してからの彼女は人が変わったかのように、とても真面目だった。

主婦業も完璧にこなし、暇つぶしに始めた自分の仕事も完璧にこなし、旦那一筋で毎日生き生き過ごしていた。

彼女は男関係以外でも要領がよく、頭の回転も速く、仕事もバリバリとこなし、職場でも一目置かれる存在だった。

夫はそんな嫁を誇りに思い、自慢の嫁であった。

彼女も結婚生活が新鮮だったのか、夫を慕い、夫の為に時間を使い、尽くし、幸せな生活をしていた。

時期に新しい命を授かり出産、次は我が子に沢山の愛情を注ぎ、手がかかるながらも可愛い我が子を溺愛し、どこからどう見ても幸せそうな家庭だった。

次第に子育てをしている自分に夫が自分を女としてではなく、子の母親として接している事に気付く。

その瞬間、ふと、彼女のなかで何かが動き出す。

【あたし、女だよね・・・？】

過去の自分が頭の中を巡る。

次の瞬間彼女は携帯を手に取り、ヒロにメールを打っていた。

【お元気ですか？お久しぶりです】

ヒロは、彼女が今の夫と付き合う前に少しだけ付き合っていた男だ。

遊び人風の彼は彼女と付き合うことにより、だんだん真面目になり、彼女一筋になっていく。

次第にそんな彼を重く感じてしまった彼女は別れを切り出した。

携帯に結婚した今でもまだ、彼のアドレスが残っていたのは、彼はその後自分の友達と付き合いだし、相談相手として友達付き合いをしていたからだ。

しかし、彼は友達とも別れ、今は一人だと聞いていた。

彼女は自分を試したかった。

まだ女として魅力があるのかを・・・

それから3ヶ月、彼女は【ヒロ】と、自分がまだ女として魅力があ

ると、自信を付ける為に月に一度だけ出かけていた。

ヒロは彼女にまだ未練があったらしく、だんだんまた重くなっている。

それを最近感じつつある彼女は、面倒臭さを覚えていたが、主婦である以上、新しい出会いなどなかなかなく、ダラダラと【ヒロ】との関係を続けていた。

『はあ・・・なんか面白い事ないかな・・・平穩すぎて退屈。ドキドキしたい。』

運命の出会い

クールな恋愛の知らない遊び人 星野 智哉

要領の良い知的な遊び人主婦 高橋 愛

この二人が偶然に偶然を重ね、ある日出会う事になる。

ここからは、二人の口に出す言葉と、二人のやり取り、そして、二人の心の中の企みや、戦略。

駆け引き等を楽しんで読んで欲しい。

バチバチと繰り広げられる、【恋愛ごっこ】

退屈な二人のお遊び。

引いては押す、押しては引くの、同等の戦いだ。

実はこの二人、昔少しだけ会った事があった。

智哉、愛、二人が16歳の時に話は遡る。

女子高のいつもの合コン、そこで出会った【ヒデ】という男に手を出していた愛。

その日は春先の少し肌寒い夜。

ヒデの単車の後ろに乗り、愛はとある公園に向かっていた。

愛を徐々に本気で愛し始めていたヒデは、自分の仲間には彼女である愛を紹介したかった。

愛を駅で拾った後、ヒデが仲間の一人に電話すると、いつもの公園にいつもの仲間が集まっていると聞き、急遽愛を連れて行くことにした。

しかし、愛の頭の中は違った。

【イイ男、いるかな】

公園に着くと、数台の単車に数十人の男達がゲラゲラ大きな声で笑いながら話していた。

『よう、ヒデ！お疲れ〜』

その中の一人が声をかけてきた。

『おつかれさん、コイツ、俺の女、愛』

ヒデが愛の肩を抱き、紹介する。

みんながこっちを向き

『よろしくね、愛ちゃん』

と、軽いノリで手を振る。

愛は少しニコツと笑い、お辞儀する。

しかし愛には、そんな連中の中に、どうしても気になる人がいた。

みんなが手を振る中、こちらをチラッと振り向かず、単車をなにやらいじってる彼。

その隣には寄り添うようにしゃがみこむ女の子。

この女の子の事を、【絶世の美女】と呼ぶに相応しい。

パツチリとした二重の目に、整った鼻、口角がキュツと上がった可愛い唇に、肩までの髪はとても綺麗な黒髪、白くモチモチした肌、まるでお人形さんのようだ。

こんなに可愛い女の子を見たことが無い。

愛がそんな事を考えながらじーっと見ていると、お人形のような女の子が、愛の視線に気付き目が合う。

愛はハツとして、目を反らそうとした。

するとお人形さんのような彼女が笑顔でこちらに手を振る。

愛はとりあえず小さくお辞儀した。

そうすると、お人形のような彼女は、隣でひたすら単車をいじり続ける彼の方を向き、こちらを指差し何かを言っている。

次の瞬間、なんとも無愛想な表情で単車から手を離し、彼がこちら

をみた。

周りにいる、いかにも不良っぽい人とは明らかに人種が違う彼。

じっとこちらを見て何かを口ずさみ、また単車に目を向ける。

『……感じ悪い……』

愛がボソツと口に出すと、今まで隣で友人と話をしていたヒデが、愛の目線に気付きこちらを向く。

『あ、あそこにいるやつ？』

あいつ、智哉って言うんよ。

みんなとなんか雰囲気とか違うやろ？

あはは、イヤツなんやけどなあ。

いっつもあんなやねん。

隣にいるのはあいつの彼女。

めっちゃ可愛いやろ？美男美女でお似合いやでなあ！』

そう、これが、愛と智哉の最初の出会いだった。

『智哉！単車ばっかいじってやんと、こっち来いよ』

ヒデが大きな声で智哉を呼ぶ。

面倒くさそうに立ち上がり、智哉はゆっくりこちらに向かって歩き出す。

しかし、愛のほうには見向きもしない。

後ろからお人形のような彼女が小走りについてくる。

『……単車……イカれたし……』

無愛想に智哉は仲間と言う。

『まあまあ。そうイライラすんなって。

それよりさ、この子、ヒデの新しい女やってさ。』

仲間の一人が愛を指差し言う。

智哉は愛のほうを向きもせずに

『……どうも……』

と、一言だけ言う。

愛は今まで自分に対して、こんな態度をとる男とは出会ったことがなかった。

完全に気分が害される。

『あはは！お前、ダッセーなあ』

おおきな笑い声がある。

智哉は仲間や彼女と大きな声で笑いながら話をしている。

『……なんだコイツ……』

愛はヒデの他の仲間達にも話しかけられるが、智哉の態度や行動に目が釘付けで、耳に入らない。

『とりあえず、どっか移動する？俺、腹減ったわ〜』

仲間の一人が言う。

『吉野家でも行こうぜ』

ヒデがそう答えると、それぞれみんなが自分の単車に乗り込む。

『おおい、愛、行くよ?』

ヒデに声をかけられ、智哉を見ていた愛は我に返り、ヒデの方を見て軽く微笑む。

そして、もう一度智哉をチラッと見た時・・・

単車に跨り、お人形のような彼女を後部座席に寄せ、エンジンをかけた智哉が次の瞬間、

愛のほうを見て、口を閉じたまま、横目で何かを訴えるかのように、ニコッと笑った。

初めての智哉の印象は、愛にとって衝撃的であった。

『なんだあいつ!!ホント意味わからんし!』

家に帰ってから愛はずっと智哉が頭から離れなかった。

『・・・なんか知らんけどム力つく〜!』

馬鹿にされた様な気持ちになっていた。

その後も何度かヒデ達と遊ぶ時に、智哉やその仲間と幾度と会うことがあった。

しかし、特に会話をすることもなく、目が合っても笑い合うことも無く、そんざいがある程度だった。

いつもお人形のような彼女を連れた彼。

仲間と話をする時だけはとても楽しそうな彼。

愛は目で追うが、なぜか彼には声をかけることができなかった。

どんな男でも声をかけ、自分に振り向かせる愛が、智哉にだけは、声すらかけることができなかったのだ。

しかしその後、愛は、一度だけ智哉の単車の後部座席に乗る機会があった。

愛は、【なんて声をかけたらいいのかわからない・・・】そんな事を考えている内に目的地についてしまった。

【こいつだけは・・・無理だ・・・】

愛は当時の、彼の印象はこつこつものであった。

二度目の運命の出会い

結婚した後も、愛は時々智哉を思い出す事があった。

あの後間もなく彼氏のヒデも含め、智哉もその仲間も警察に捕まり、自然と愛は彼等と会う事も連絡する事も無くなった。

ヒデとも自然消滅。

しかし、ヒデを思い出すことは無くても、不意に智哉を思い出す。

今でも謎の智哉。

ム力つく印象しか残っていない智哉。

今でもあのお人形のような彼女と一緒にいるのか？

ヒデに一度だけ聞いた事がある、智哉のフルネーム。

星野 智哉。

はつきりと今でも覚えていた。

しかし、智哉は自分のことなんて覚えていないだろう。

なんせ、一度【どーも】の言葉しか交わしていない。

【今もし再会したらどうなるのかな】

愛はよくそんなことを想像した。

まあ、もう会う事はないだろうと、次の瞬間には違う事を考える。

しかし、数カ月後にはまた同じ事を考えたりするのだ。

そんな時に、愛は友人から【SNS】のお誘いを受ける。

自分の日記をインターネット上で公開するだけではなく、同じ母校で疎遠になっていた人を探せたりもできる。

しかし、愛はそういうのがあまり好きではなかった。

面倒そうだし、変な出会い等がありそうで、ちょっとウザイ。

しかし最近、暇な時間を持て余していた愛は、

【暇つぶしにはなるか】

と、軽い気持ちで登録。

【探したい人のキーワードを入力してください】

愛は試しに同じ母校の人を探したりしてみる。

それが、次から次へと出てくる出てくる。

『すっげ〜・・・』

愛はしばし夢中になり過去の友人などを探した。

一通り探した後、早々と飽きてしまった愛は、パソコンから離れ横になる。

『別に今更会いたい人もいないしな・・・』

探したものの、連絡を試してみようと言う気は起きず、チラチラ見るくらいで満足してしまった。

『・・・会いたい人なんかいないしな・・・あつー!』

ふと愛は思い出す。

バツと起き上がり、マウスを握る。

【友人検索】

星野 智哉

『・・・まさかこんな簡単に見つかるわけないか・・・』

愛は軽い気持ちでマウスをクリックする。

【ヒット 一件】

『え!?マジ!?!』

開いてみるが、写真などは載せていない。

住所も都道府県のみ。

しかし、同じ都道府県だ。

しこで愛は更に、相手のプロフィールを読む。

『・・・間違い・・・ない・・・かも』

ヒデから少しだけ聞いていた智哉の経歴。

出身校は私立。

高校の名前。

全てが当たってた。

愛は、【メッセージを送る】に、カーソルを合わせるが、なかなかクリックできないでいた。

なぜなら当時、ほとんど絡みもなかった上に、印象は最悪なのだ。

仲良しだったならば、【久しぶり〜】というノリでいいが、そういう訳にはいかない。

愛は迷った。

自分からのメッセージを見てなんて思うだろうか？

その前に覚えていないかもしれない。

そうになると、自分はいつまでも智哉を忘れられない、しつこい変な女だ。

そんな風に思われるのは、男を手玉にとってきた愛のプライドが許さない。

どうしようかと、愛は20分ほど悩んだ。

【・・・どうせm忘れてたなら返事は来ないよね。】

愛はついに決意をして、メッセージを作成する。

【10年くらい前に少し遊んだ、ヒデの彼女だけでも、覚えてる？】

これだけの短いメッセージ。

送信ボタンをクリックし、【メッセージが送信されました】の文字が出る。

愛は少しドキドキしている。

すぐに返事は来ないだろうと、愛はパソコンの電源をおとした。

それから1日がたち、二日がたち、毎日愛はメッセージを確認した。

しかし、一向に返事はない。

愛は残念なような、ホッとしたような、複雑な気持ちでいた。

『・・・覚えているワケないか・・・』

そう思い、メッセージを送って三日後の今日、同じようにパソコンを開き、【SNS】に入る。

【新着メッセージが一件あります】

こう表示され、愛は息をのみ、クリックする。

【メッセージ 星野 智哉

え!?!? ってくらい、久しぶりやな!

愛やんな?!

覚えてるよ。

よく俺のこと覚えてて、俺やってわかったなあ!】

・・・覚えていやがった・・・

愛はしばらくメッセージを見つめながら固まる。

しかも、あの当時の智哉とは、ノリが全然違う。

彼は変わったのか・・・?

愛はとにかくメッセージを送り返す。

【何でかな？智哉は印象的やったから覚えてたよ。

偶然見つけてメッセージしてみました。

智哉は元気？】

偶然見つけて　なんて、ウソだ。

でも探してみたなんて絶対に言いたくない。

メッセージの返事はすぐに返ってきた。

【俺、そんなに印象的やった？（笑）

愛は結婚したんやな。

ヒデと結婚したん？】

このメッセージで智哉はヒデと、あの後繋がりが無くなったと言っ
事がわかった。

そうだ、自分のプロフィールには結婚したことを書いていたんだ。

あわてて愛は、もう一度智哉のプロフィールをじっくり読み直す。

『・・・智哉、今お店やってるんや・・・』

智哉のプロフィールに書いてある、【バーを経営しています】と言
うのを読み、愛は智哉にメッセージを送る。

【結婚したよ。相手はヒデじゃないけどね。

智哉はお店やってるんやね？

今度遊びに行こうかな？】

愛はこのメッセージを送るのに少し手が止まった。

『・・・会う事になる・・・？』

ほとんど絡みがなかった彼と、10年ぶりに会ってどうする・・・？

今の彼を見てみたい・・・？

いや、違う。

それもあるけど、10年前、あたしをあれだけオドオドさせた彼を・
・

彼に・・・

【仕返しがしたい。】

あれから自分は恋愛の場数を踏んできた。

今なら、今の自分なら、オドオドせずに彼に接する事もできる。

そうだ、仕返しをしたい。

今度こそ、自分の心の中にずっとあつた彼。

何かあつた心残り。

自分の中での大ボス。

【彼を、智哉を、自分に振り向かせてやる！】

愛は、先ほどのメッセージを力を込めて送信する。

すぐに彼からの返事が届く。

【うん、いつでもお店に遊びにおいで！

久しぶりに会いたいわ〜！】

よっしやキタ〜〜！！

これが先にも後にも、あたしにとっての最後の男とのゲームだ。

愛は小さくガッツポーズをした。

電話での再会

時を同じくして……

智哉は正直驚いていた。

愛とまさか今になって再会するとは思ってもいなかった。

『なんとなく覚えてるんだけどなあ……』

しかし、自分が何故覚えていたのか、またそれが不思議だった。

何度もサイトの中の彼女のプロフィールを読み直す。

『可愛かった……っけ？』

でもなんとなく覚えてる……んやけど……

なんでかなあ……』

彼にとっては出会った女やセックスした女は数知れずいる。

セックスした女でさえ、覚えていないこともある。

そんな自分が彼女をなぜ覚えていたのか、自分でも解らなかった。

しかも、今度店に遊びに来ると言う愛。

『可愛かったらいいけども、ブサイクやったらどうしよ……
繋がりにたくないな……』

そこで智哉は友人に電話をして聞いてみる事にした。

『もしもし、俺』

『おお、智哉。どうしたん？』

彼は10年前の当時、毎日一緒に遊んでた仲間の一人だ。

『お前さ、昔遊んでた時に、ヒデが女連れてきてた時期あったやん？』

『あゝ、愛ちゃん？』

この友人は女のことであればどんなに少しか遊んでいない子でも覚えている。

『そうそう、どんな子だったっけ？』

『まあまあ可愛かったんやない？なんでまた？』

子の過程を説明するのが、面倒になった智哉は

『いや、いい、また今度ゆっくり話するわ。じゃあな』

『え？ちよ…待っ…』

プーッ プーッ…

そう言うと一方的に智哉は電話を切った。

『まあ・・・可愛かったならいつか。
面倒そうな女なら無視すりゃいいわな。』

そうして智哉は、愛にメッセージを送った。

『月曜日か水曜日か金曜日においで！』

そう、自分の彼女、沙織がシフトに入っていない日だ。

もちろん理由なんて、愛には言うはずはなかった。

その頃愛は、メッセージを受け取り、店に行く日にちなどを考えていた。

一緒に行く友人・・・男にしようか女にしようか・・・

ここは無難に女にしておこう。

行く日は・・・早すぎても嬉しくて急いできたようだし、暇なヤツとは思われたくない。

一ヶ月後くらいに当日突然連絡を入れて店に行こう。

たまたま近くを通った・・・とかなんとか言っ

しかし、愛は大変な事に気付く。

『あたし、店の場所も、名前も知らんやん・・・』

さてどうする？

サイトを通してのメッセージ交換は何かと面倒だ。

一度サイトに入らなくてはメッセージを見ることも送ることもできない。

当日連絡するにしろ、道を聞くにしろ、不便すぎる。

彼はそれに気付かないのか・・・？

それとも、どうせ社交辞令だと思って店に来ないと思っているのか？

とにかく、当日までにはガツツキを見せずに連絡先を彼に聞かなくてはならない。

どうしても愛は彼よりも上の立場に立ちたかった。

こちらから追いかけるなんて、言語道断。

まだそんなことを言う仲ではないと思われるが、最初が肝心。

特に女は色々と頭の中でロールプレイングする。

色々悩んだ結果、愛は単刀直入に聞くのが一番だと思った。

あまり回りくどいと余計にいやらしい。

愛はマウスを持ち、智哉にメッセージを送る。

『あたし、店の場所も名前も知らないよ。(笑)』

080 - 1

『時間があるときに電話下さい。』

メルアドを書くかどうかは悩んだが、メール交換の方がなんだか形に残り気を使う。

それなら用件だけをさっさと伝えられる電話の方がいいと、愛は思った。

いつ、連絡があるのか、緊張感が漂う。

明日か・・・一週間後か・・・

しかし、愛の予想を裏切り、メッセージを送信してから30分後、知らない番号からの着信が入った。

時を同じくして・・・

智哉は電話番号が書かれたメッセージを見つめ、悩んでいた。

『深い意味は・・・無いよな・・・?』

店の場所すら知らない、そりゃそうだ。

しかし、いきなり10年ぶりに電話で話しをする。

ちよつとだけ抵抗がある。

なぜここまで智哉は警戒心が強いかというと、今までの彼の素行に問題があつた。

女癖の悪い智哉は何人も女から恨みを持たれていても当たり前。

しかも、酷い時にはストーカー行為を受けたりもしていた。

自業自得。

しかし、面倒臭がりやの智哉はこんなふうに、ぽつと出の女は特に警戒心が強くなる。

『・・・念の為に店の電話でかけるか・・・』

プルルルル・・・プルルルル・・・

『もしもし・・・』

テンションの低い、愛の声。

『あ、智哉やけど』

智也の声・・・

愛は声なんて全然覚えていなかった。

なんせ一度しか聞いた事の無い声。

しかし、こんなに男らしいカッコいい声だったっけ……??

愛は不覚にも少しドキドキして、声の上擦る。

『あ、久しぶりだね、智哉』

愛の上擦る声に智哉は気付かず話をする。

『店の場所……ホームページに載ってるんやけど……店の名前は……』

智哉は一通り説明を終え、最後に

『この電話番号、店の番号やからさ、当日迷ったりわからなかったらかけてきて』

と、【普段使いではかけてこないように】と、遠まわしに伝えた。

その思惑に愛はすぐに気付き、少し腹が立ち、

『心配せんでも、よっぽどの事が無い限りはかけないし』

と、嫌味っぽく言った。

『じゃ、また』

『はいはい』

そう、愛想無く言い、二人は電話を切る。

『腹立つ男~~~~!!』

『可愛くねえ女~~~~!!』

電話を切った後、二人はつぶやく。

そして……

『絶対会ったら覚えとけ!!』

二人は心にそう思い、とうとう再会の時はきた。

想像と現実

夜の七時。

二月の夜はとても寒い。

愛は夫には前もってこの日は出かけると伝えてあった。

普段真面目な愛を、夫は

『ゆっくりしておいで』

と言い、快く送り出してくれた。

今日一緒に行く約束をしたのは、愛にとっての最強の悪友である

【綾^{あや}】

綾とは駅で待ち合わせをしていたので、愛は車で綾を拾った後、智哉の店へと向かった。

店は、バーではあるが、子供にもしものことがあれば、すぐに家に帰らなくてはならない。

愛は仕方なく今日は飲むのを諦めて、車で向かった。

とうとうこの日 came。

友達の綾には、ある程度のこととは話をした。

綾も、久々の夜遊びと、愛の事情を知って、おもしろ半分楽しんでた。

車にはカーナビが付いている為、簡単に店はみつげられた。

しかし、少し離れた場所に車を駐車した。

これも愛の戦略。

【いきなり行ってはきつと私に気付かない】

10年ぶりの再会であるが為、愛はそう考え、車から降り店に電話をするつもりだ。

あれから智哉とは全くメッセージ交換も電話もしていない。

愛は、綾に目で合図を送り、携帯から店に電話をかけた。

程なくして、電話先に、智哉ではない声が聞こえる。

『すいませんが、星野さんお願いします』

愛は塀ゼンを装うが、少し声が震えた。

寒さからか、それとも緊張感からか・・・

『はい、星野です、お電話かわりました』

すぐに彼が電話口に出た。

『あたしだけど・・・わかる？』

しばらくの沈黙のあと、智哉は、電話の相手が愛であることに気付いた。

『あ！愛？どうした？』

間をおかずに愛は話し続ける。

『今ね、店の近くに用事あって、ついだからちょっと寄りつかと思っただけども、場所わかんなくて。』

綾が隣で声を殺して笑う。

『あ、・・・えっ!?!?』

智哉は驚いている。

『ごめんねえ、急で〜。』

愛はまた続けて話をする。

『今ね、角にある　　って言う喫茶店のとこなんだけども、お店mこの近くだよね?』

智哉はやっと状況がつかめたのか、話をしだす。

『ホンマ、急やなあ！オツケー、その角を曲がって・・・』

道を説明するが、愛には見せの位置がわかっている。

『わかった、ありがとう、今から行くね』

そう言い、愛は電話を切った。

たまたま来たわけが無い。

今日の為に美容院に行き、新しいワンピースを新調した。

気合を入れてメイクをした。

準備万端で挑む。

『さ、綾、行くよ!』

愛はもう一度気合を入れなおした。

その頃。智哉は電話を切ったあと、少し呆然としていた。

【なんや、あいつ・・・普通前もって連絡してくるやろ・・・】

今日は店は平日、時間帯的にも暇である。

こんな日は、忙しいを理由に逃げられない。

【急に現れたと思ったら、急に店に来て・・・ほとんどしゃべった事もないのに変な女・・・】

とにかく、今から来る事は間違いない。

変な女だったら、どうやって逃げるか？？

友人を店に呼ぼうか・・・？

そんなことを色々考えたが、とにかく考えるより会って、愛をみて、それから考えようと思い、智哉は店の入り口まで愛を迎えに出た。

程なくして、店にたどり着き、愛は店の扉を開けようと手を伸ばした。

その瞬間、いきなり内側からドアが開く。

『いらっしやいませ』

愛は不覚にも固まってしまった。

【彼だ・・・少し大人っぽくなってるが、間違いなく彼だ・・・】

愛は確信した。

少し冷たそうな目。

整った顔立ち。

綺麗で少し癖がかかる黒髪。

10年前よりもなんだか雰囲気が出てるが、面影はきっちりある。

そして、電話先から聞こえたあの声。

愛の横で綾もまた固まっていた。

冷たさを感じられる、今にも吸い込まれそうな彼の目から、愛も綾も反らすことができなかった。

『こちらへどうぞ、カウンター席でよろしいですか？』

はっと我に返る愛。

『あ、はい・・・あ、う・・・うん』

明らかに動揺している。

次の瞬間。

『・・・プツ・・・あははは！何固まってんねん！』

彼の口元が緩み、無邪気なあどけない顔で大きく笑う。

『え・・・？あ、あはは・・・』

つられて愛も、綾の方を見て笑う。

そうだった・・・

彼とこんなに間近で目が会うのは今日が初めてだった・・・。

10年前は偶然一瞬、目が合うことはあったが、こんなに近くでまともに目が合う事なんてなかった。

愛は少しドキドキしていたが、必死にそれを押し殺した。

『久しぶりだね、智哉』

『おお、久しぶり。どうぞ』

そう言うと智哉はカウンターの一番奥の席に二人を通した。

智哉が一度店の入り口の方に向かって行くと、すぐさま綾が愛の耳元で興奮気味に話す。

『ちょっと！あんなにカッコいいなんて聞いてないんやけど！』

確かに愛も少し驚いていた。

男としての格があがった智哉。

驚く程にイイ男になっていた。

しばらくして智哉は、カウンター越しに二人の前に立つ。

『何飲む？』

智哉は二人を見て聞く。

『あたし、ミモザ』

綾はすかさずそう言った。

『ミモザね。愛は？』

智哉は愛の方を見て聞く。

『あたし、今日は車で来たから・・・飲みに寄るつもりもなかったから・・・』

愛は自分の組んだシナリオの台詞を精一杯答える。

『あ、そっか。たまたま通ったんやったな。』

『じゃあ、何かバージンカクテル作ってくるわ』

そう言い、智哉は一度、店の奥に入っていった。

『ねえ、愛？大丈夫？』

綾は少し笑いながら愛に聞く。

『何が？』

愛は何事も無かったかのように答えた。

『智哉さんに惚れちゃったんじゃないの？』

綾は、店に来る前と、店に入ってから愛の違いを見抜いていた。

『んなわけ無いヤン〜！』

愛は笑いながら答えた。

綾は店の奥の方をボーッと眺めながら言う。

『でも、めっちゃ男前やん』

『うん・・・確かにね・・・』

愛も男前は嫌いじゃない。

過去の智哉に対しても、イイ男だなと思った記憶があるが、その前に印象が悪すぎて、あまりちゃんと見てはいなかった様な気がする。

しかし、愛もそう簡単に人に惚れる女ではない。

確かに今までに無いタイプで面食らったが、今はもう智哉を観察する事を始めていた。

あの時の自分とは違う。

愛にはやはり、自信があった。

『うん、面白そうだね。』

愛はちょっと笑って綾に言った。

『やるかあ？愛！』

綾もそう言い、笑った。

その頃、店の裏で智哉はお酒を作る。

普通ならカウンターに出て、客の目の前でカクテルを作るのだが、今日は少し考えたかった。

【愛、結構可愛いな。あんなに可愛かったっけ？10年前は常に自分の女が側にいたから大して気に留めなかったけど・・・】

カクテルをクルクル混ぜながら考える。

【それにしても一緒に来てるあの友達もいい女だなあ・・・】

智也も同じくじつくり女二人の表情や態度を観察するタイプだ。

【愛は本当にただ俺をたまたま見つけてメッセージを送り、今日店に来ただけなのか？】

今の段階では、愛に何か裏があつてきたようには見えなかった。

【まあ・・・もう少し話をして様子を伺うか。

とにかく、ブスじゃなくてよかった・・・】

そんな事を考えながら、智哉は出来上がったカクテルを持ち、彼女達のところに向かった。

『お待たせ』

そう言い、智哉は二人にカクテルを差し出した。

『それにしてもよく俺のこと、覚えてたな』

智哉がまず、愛に話しかける。

『だから言ったやん、すっごい無愛想で印象悪かったからって!』

そう言い愛が笑うと、智哉も笑った。

『アハハ、確かにあの時は束縛の厳しい彼女はいつも側にいたからなあ。』

愛は聞きたかった。

一度だけ自分に笑いかけた事を覚えているのか？

それはどういう意味だったのか……。

しかし、喉まででかかったその質問を飲み込む。

『あのすっごい可愛い彼女は?』

愛は違う質問をする。

『あゝ、あの後7年も付き合って、別れたよ。』

俺、渡米したからさ。

しばらく遠距離してたけど、遠距離すぎてダメになった』

そう言い智哉は笑う。

『確かに、遠距離すぎるよな。
でもめっちゃ可愛かったよな〜・・・
智哉よりもあの彼女が凄い印象的やったもん』

愛はこんな小さなウソを付いた。

『確かに、今までの女の中では一番可愛かったなあ・・・
あ、あいつの事なら印象残りそうだな。
めっちゃ可愛い彼女のいる男って事で俺のことを覚えてたのか〜』

そついい智哉は少し安堵の表情を見せた。

【うん、違うけどね】

愛は心の中で答えた。

なぜか今まで愛の心の中に居座り続けた彼、恋愛感情とは違つのに、その謎を解きたかったのに、彼を見ると、余計に疑問が深まる。

なんでコイツの目はこんなに人を吸い込むんだろう・・・。

『んで、こつちの彼女は？』

智哉が綾の方を見てニコリとする。

綾は少し照れながら

『愛の高校の時の友達です』

と、答える。

『そうなんや、じゃあ、結構二人の友達暦、長いね。』

智哉がグラスを磨きながら答える。

『悪友だよね』

愛が綾に話しかける。

『だよ〜』

綾が笑いながら答えた。

それから智哉と愛たちは、当たり障りの無い世間話、今の自分の状況、あつてなかった10年間の話や、思い出話をして、楽しい時間を過ごし、数時間が経った。

愛も、最初の思惑を忘れてしまっくらい、楽しい時間だった。

そろそろ夜も遅くなり、帰らなくてはならない時間になる。

『じゃあ、そろそろ帰るね。』

愛が智哉に言う。

『あ、かえる?』

智哉はそう言うと、伝票を持ち、レジの方へ向かう。

会計を済ませ、綾と愛は店の外にでる。

外はますます冷えていた。

『今日はありがとうね。』

『今日はありがとうございました』

綾と愛が送りに出てくれた智哉に言う。

智哉はタバコに火をつけ、タバコを加え、ポケットに入れていた片手を出し、軽く手をあげた。

そして、その手でタバコを持ち、

『今度さ、当時のツレも呼ぶからさ、みんなで飲もうや、綾ちゃんも一緒においでよ』

そう言い笑った。

綾は笑顔で頷く。

愛はなぜかその場から離れられなかった。

タバコを加えながら

『うつわ〜・・・寒うう〜・・・』

と、肩を縮める智哉をじっと見つめた。

その視線に気付いた智哉が、両手をポケットに入れ、タバコを加えたまま

【ん？どうした？】

と言う表情をした。

『智哉、なんか変わったね』

愛はそう言い、笑う。

『じえっん、じえん！』

タバコを加えたまま智哉が答え、ポケットから手を出しタバコを持つと、続けて話す。

『俺、昔から変わってへんよ。』

今日、沢山しゃべって、本当の俺を、今日、愛は初めて知ったんや』

そう言うと、智哉はまた無邪気な笑顔で笑う。

『そっか。』

なら今日来てよかった。

ありがとう。』

愛は満面の笑顔で言った。

『お。又おいで』

そういい、智哉はタバコを持つ手を振った。

愛と綾も大きく手を振った。

智哉は二人が角を曲がるのを見届けてから、店に戻った。

完敗

家に帰り着き、愛は一人考えていた。

少し浮かない顔をした愛に、夫は

『楽しくなかったの？』

と、心配した。

『久しぶりの友人に会えてすごく楽しかったよ。』

愛はこう答えて、冷えた体を温める為に風呂に入る。

そこで、今日あった事、話をした事、智哉の顔、表情、色々思い出した。

なんて事だろう。

少し胸が高鳴っている。

【この高鳴りは、これから勝負に入る為の高鳴り。智哉は自分に恋をさせるように・・・】

一生懸命こう考えた。

しかし、愛の頭の中には最後の

【今日知ったのが、本当の俺】

そう言った智哉の顔が頭から離れない。

あの瞬間、愛の中で何かが弾けた。

『あゝゝ！もうッ！』

そう小さく叫び、頭まで浴槽に沈む。

【・・・これからどうしよう・・・】

愛は悩んでいた。

なんだか手を出してはいけないような予感がする・・・。

彼は危険だ。

直感でわかる。

しかし、長い間主婦として真面目にしてきた愛は、男に免疫も切れ、勘が鈍り、そう感じさせているだけなのかもしれない。

でも愛は本能で思った。

【彼が欲しい。一度でいいから自分のモノにしたい】

久々に沸き起こるこの感情。

そう、自分のモノになり、てきとくに楽しんで別れればいい。

なんせ、あんなに手ごわい相手、しかもあたしは既婚者というリス
クやハンデもある。

楽しいじゃないか。

そう、今までと同じように・・・。

決意は固まった。

勢い良く浴槽から立ち上がり、立ちくらみがしてよろけた。

【おい・・・大丈夫か・・・？あたし】

明日とにかく行動開始だ。

その夜、早々と布団に入ったがなかなか寝付けず、悶々と明日のこ
とを考えていた。

【今の現状では・・・10対0で、あたしの完敗・・・だな】

第一作戦

愛は考えていた。

今のところサイトを通してのメッセージ交換と、店の電話番号しか知らない。

連絡をとりたくても、結構ややこしい。

まずは直アドか、直電を知る事から始めなければならない。

愛は考えた。

とにかく、智哉にうまく聞かなくてはならない。

いきなり聞くとうとうしても会ってイイ男だったから連絡先を知りたくなった、そう思われてしまう。

しかし、逆に、どうでもいい存在だと愛が思っているとわかれては、それはそれで困る。

愛は彼を、ことう分析した。

ああ言うタイプの男はやっぱり、女に対しての免疫が強くある。

そして、自分がモテる事も良く知ってるはず。

そういう男は褒められ好きなナルシストが多い。

これだ。

これをうまく利用するのが一番だ。

彼をまず持ち上げて、多少自分に好感を持ってくれていると言いつ事に何気なく報せる事だ。

しかし、決してがつついてはいけない。

今までもきつと、面倒臭い女にひっかかり、大変な思いをしているはずなので、逆に警戒して離れていこうとしてしまう。

だからすぐに連絡先は聞かない。

『・・・仕方ない。かなり遠回りになるけどこの方法で行こう。』

愛は作戦を決めた。

最初、智哉を見つけた【SNS】には、日記を公開するブログの様なものがある。

まずこれに、愛は店に行った事を日記に書く。

今日は、女友達と、久々の夜遊び

しかも行く店は、このSNSで見つけた、

10年も昔に疎遠になってしまった男友達の店

久しぶりに会う彼はびっくりするくらいの良い男になって、

気合入れてオシャレして行ってよかった〜（#^・^#）

もう、ヤッバイぐらい男前になってた彼・・・
あゝあ、あたし結婚早まったかな？（笑）
まあ、あたしがもつと自分に自信があれば
『ぎゅ〜って抱きしめて』
の一言くらい言えたのに〜（<―>）
いや、いつそ、一晩だけ抱いて欲しい（^^
それくらい思うほどのイイ男になってた彼。（笑）
また会いにいつちやおうかなあ・・・

よし。

完璧。

な〜にが『自分に自信があったら』・・・だ。

アリアリな癖に！

愛は少し鼻で笑った。

そして、次は智哉に直接メッセージを送る。

昨日はありがとう。
本当に楽しかった！
って言うか、何より驚いたのは、智哉イイ男になりすぎ！
終始ドキドキしてしまったよ〜！
抱きしめてもらえばよかったかな？（笑）

日記にも、男前の友達がいる事書いて、自慢しちゃった！
ま、そんなことはどうでもいいとして

また機会があれば遊びに行きます。

昔の仲間にも久しぶりに会いたいしね。

じゃあ、またね（*^^*）v

お仕事がんばって下さいね。

よし。

完璧。

ここまでやって、後は彼の反応を待つのみ。

愛の分析が正しければ、きっと浮かれた返事が来るはず。

少なくとも悪い気はしないはずだろう。

そう思いながらパソコンの電源を落とす。

この男は下手したらこちらがはまってしまい、ボロボロにされてしまいかもしれない。

現に昨日会って、不覚ながらも少しドキドキしてしまった自分がいる。

本当に手を出してよかったのか・・・？

また悩みが沸き起こる。

しかし、もう行動に移してしまった後だ。

今なら後戻りができるが、それではいつか後悔してしまいそうだ。

よし、自分さえしっかり持っていれば大丈夫。

危なくなればその時に身を引けばいいだけだ。

いや、あたしが惚れるわけが無い。

しかも、いかにも遊び人って感じの彼。

本気になるわけなんかない。

逆にこっちが遊んでやる！

愛は色々自分の中で格闘していた。

愛が自分と格闘している時

智哉はボーっと考えていた。

【あいつ、また来るかな・・・？

ただ久しぶりに会いに来たって感じだったな。】

懐かしい話が弾み、智哉なりに楽しい時間が過ぎせ、智哉は満足していた。

【可愛くなつてたし話も面白かったし、イイ女になつてたなあ。】

ふと、智哉は愛からメッセージが来てるんじゃないかと思い、パソコンを開いた。

そこには先ほど愛が送ったメッセージが記されていた。

【あいつ、褒めすぎやろ？】

智哉は鼻で笑う。

そして次に日記に目を通す。

【あはっ！ここでも褒めてるよ！知り合いに見られたら恥ずかしいやん】

智哉は大きく笑った。

【返事・・・書くか】

智哉は愛のメッセージに返信した。

こちらこそありがとう。

俺も昨日は楽しかった。

って言うか、日記見たけど褒めすぎや！

恥ずしいわ（笑）

送信した後、智哉は、メッセージが届くと、自分の携帯に届くようにメッセージの設定を変え、パソコンを閉じた。

【また返事来るやるか・・・】

愛はメッセージを送った後、返事が来ないか気になり、何度もパソコンを開いていた。

そして、愛もメッセージの受信設定を携帯に変えた。

程なくして、携帯にメッセージが届く。

もちろん智哉からである。

先ほどの智也が送ったメッセージが目飛び込む。

【よし、思惑通り】

愛はすぐさま返信をする。

マジで智哉かつこよかったよ。

褒めすぎ違うよ～～！

マジで抱いて欲しいのに) # ^ . ^ # (

送信。

きつと智哉からはすぐに返事が来るだろう。

内容は想像が付く。

愛は確信していた。

智哉が自分の引く線の上に乗りに出した事を。

そして、愛の思った通り、すぐに携帯になる。

そんなんばかり言っていたら、ホンマに抱くで！

『はい、乗った〜。』

愛は小さくガッツポーズする。

ここまで来ればメルアドを聞いても問題ない。

彼も時間を置かずにメッセージを返信してくる。

きっと今も愛からのメッセージをじっと待ってるであろう。

そろそろサイトを通してのやり取りは面倒に感じてきているはず。

警戒心もだいぶ取れ、もしかしたらこの女とヤれるかも？と期待に胸と下半身を膨らませているだろう。

愛は一番肝心なメッセージを作成した。

いやん(#^・^#)

ドキドキさせんといてよ。

って言うか、サイトを通してのメッセージ交換面倒じゃない??

あたしのメルアド、 @.....

直メちようだいよ。

送信。

きっとすぐに彼からメールが来る。

餌をばらまかれた鳩の様に、今は他が見えてないはず。

愛は確信して笑った。

しかし.....

愛はソワソワしだした。

そう、すぐに来ると思っていたメールが、待てども待てども来ない。

今までコンスタントに5分おきに來てたメッセージが最後に送った
メッセージから30分経った今も来る気配がない。

愛は一分置きに携帯を確認する。

【.....きつと、何か用事があったんだ。時期に来るよ。】

必死でそう思う手には携帯が握り締めてある。

しかし、その考えとは裏腹に、その日が終わっても携帯は鳴る事がなかった。

【・・・しくじった。早まったか・・・】

愛は脱力する。

賭けに負けたかのように・・・。

次の日も、その次の日もメールはなかった。

幸い土日だった為、仕事が休みの夫と子供と三人で出かける等をして、気分が多少紛れたものの、やはり気になり何度も携帯を見た。

しかし一向にメールはない。

次の作戦を練るかそれとも諦めるか。

愛は必死で考えたが、なかなか答えは見つからない。

『悔しい～～～！』

愛は携帯を放り投げた。

『・・・もう、知らん・・・。』

考える事を諦め、ここ2日間携帯が気になりなかなか熟睡できなかった。その日は久しぶりに早々と熟睡してしまった。

二人の第一歩

次の日の朝、やはりメールの受信はなかった。

なんて気の重い週初めの月曜日なんだろう。

愛は携帯の待ち受け画面をぼーっと見つめる。

【・・・どうせダメになるなら、何か行動してみるべき・・・かな。

】
愛は自分から一軒のメールを送信した後、立て続けに自分から連続メールを送る行為が大嫌いだった。

いかにも【あなたを追いかけています】的なこの行為。

しかし、今回だけはやむを得ない、このままだと本当に終わってしまふ。

愛は重い気持ちでサイトにつないだ。

メッセージを送る画面に入り、手早くメッセージを作成する。

どうかしたかな？

あたし何か悪い事言っちゃったかな？

それとももしかして何かあった・・・？

結構心配しています。

大丈夫ですか？

どちらにしろ、一度メッセージ下さい。
本当に心配しています。

送信……。

しかし、その直後、愛はメッセージを送ったことを深く後悔した。

【あかん！めっちゃ立場下になってるやん。あたし、めっちゃ追いかけてる女やん！】

愛は落ち着き無く部屋をウロウロする。

【あゝも〜、戦略めちゃくちゃやん】

そして、もう一度メッセージを作成。

彼女でもない癖に、なんであたしがこんな心配しなきゃあかんねん〜！

送信。

【あ……】

送信した後、更に先ほどよりも大きな後悔が襲う。

深く考えずに感情の勢いで送信してしまったこのメッセージ、明らかに逆効果。

しかし、時はすでに遅し。

【・・・何やってんだ〜あたし・・・】

愛は頭を抱える。

【完全にあたしが振り回されてるやん・・・】

愛はしばらく動けなかった。

【これじゃあ、完全に恋する乙女やん・・・】

しかし、その一時間後

愛は少し頭を冷やそうと、出かける準備をしていた。

その時、携帯がなる。

一瞬メールかと思ったが、電話である。

【・・・電話・・・？誰？】

ディスプレイには見たことの無い携帯番号が表示されている。

それを見た愛は、大きく一度、全身が脈を打つ。

愛はゆっくり通話ボタンを押し、携帯を耳に当てた。

『もしもし？俺、智哉』

三日前の金曜日。

智哉は愛とのメッセージ交換の最中。

【おっ、返事来た来た】

智哉はベッドで横になりながら携帯からサイトに繋ぎ、メッセージを読んでいた。

【あ、メルアドが書いてある、そっぴゃこイツの携帯番号も俺前に聞いてたな。

あの時は警戒して店から電話したから発信履歴には残ってないか
・・・

・・・携帯に登録しとくかあ。】

智哉は過去のメッセージを見直し、愛の携帯番号が書かれたメッセージを探す。

【あ、あったあった・・・】

智哉はメモ帳を探し、愛の携帯番号と、メルアドをメモる。

【・・・ややこしいアドレスやな・・・】

携帯に登録する為、一度サイトを閉じ、形態とメモ帳を交互に見ながらひたすら打つ。

次の瞬間。

『そのアドレスと番号、誰の？』

後ろから声が聞こえる。

智哉はびっくりして、飛び上がるように後ろを振り向く。

そこには彼女の沙織が立っていた。

『お前何やねん、急に来るなや』

智哉はあきらかに動揺して答えた。

『何を言うてんの？いつも金曜日のこの時間には、あたし来てるやん？』

『・・・っていつか、それ、誰のよ？』

沙織は机の上のメモ帳を指差し智哉を見る。

『ツレや。携帯変えた言うて連絡あつたんや』

智哉はメモ帳を机の引き出しにしまいながら答える。

『連絡あったならそのまま、メモリー登録できるやろ？
何メモってんねん、おかしいやん』

沙織は少し怒り口調で智哉を責める。

『お前、しつこい。』

智哉は携帯を閉じ、ベッドに戻り横になる。

『ちよつと、携帯貸して』

沙織は智哉の携帯を取り上げる。

『おい！返せ！ウザイ事すんな！』

智哉が立ち上がり、沙織から携帯を取り上げようとするが、沙織は意地でも渡そうとせず、携帯のメール画面を開こうとする。

『ちよつと！何携帯にロックかけてるのよ！？』

『暗証番号教える！』

沙織がメール画面を開こうとすると、暗証番号入力が表示がされる。

『なんでお前に教えなあかんねん！いいから早く返せ！』

智哉はそう言うと、沙織の腕を掴み、無理やり携帯を取り上げる。

『隠さなきゃあかんこと沢山あるからロックしてるんやろ？
隠すこと無いなら見せるよ！』

沙織は少し泣きそうになりながら智哉を責める。

『お前がそうやって、勝手に携帯を見ようとするからロックかけてるんや！』

ホンマにお前、ダルイわ！』

智哉は携帯をズボンのポケットにしまいこむ。

当たり前だ、智哉の携帯には智哉を狙う店の客や、飲み屋で知り合った女の携帯番号やメールが沢山入っている。

智哉は携帯のロックを常にかけていた。

『見せるよ……』

とうとう沙織が泣き出す。

『あゝも〜、ホンマウザイ！』

ほらまたそうやってすぐ泣くやろ？

お前泣いたら勝ちやと思うなよ、そういつとニマジでダルイ！

もつええよ、帰れ、帰ってくれ、気分悪いわ』

智哉は泣いている沙織にも酷い言葉を浴びせる。

沙織は静かに俯き泣いている。

『お前が帰らんのなら、俺が家出るわ、そのまま仕事に出るから待ってても帰らんからな』

そついい、泣いている沙織を置いて、智哉はベッドの脇に掛けてあ

るダウンジャケットを着て、外に出た。

『でさあ、俺そのまま腹が立ってイライラしてたから、仕事に出て、そしたら仕事の終わりかけに女が店に来てよ……』

智哉は会いに電話で事情を話す。

『うん、うん。……あははは』

愛は話をじつと聞いていた。

『で、結局土日は監視されたまんま。
俺が携帯開くたびに覗こうとするし』

智哉はその場面を思い出し、少しイライラしながら愛に愚痴る。

『あはは！智哉キレてんのにその行動できる彼女、すごいなああ
』！

愛は笑う。

『お、すっげ〜女やで。ホンマ怖いわ〜』

智哉も笑う。

『……でさ、電話もメールも出来なかった。
ホンマごめんな、心配かけたみたいで……』

智哉が謝る。

『あ、ううん、そんな事じゃないかと思ってた、彼女といるのかなあって』

愛はまた、ウソをつく。

『あれ？俺、女いるって言ったっけ？』

愛は少し【しまった】と思ったが、すかさず返す。

『あれだけ男前なら彼女の一人か二人くらいいるって思っただけ。週末だしね。』

愛は完全に切り替えしたと思った。

しかし、智哉の返事は愛を困らせた。

『・・・ふうん、あんなに何度もメッセージ送って来といて？彼女でもないのに心配だ〜って？』

愛はカーツと顔が熱くなるのを感じた。

『あ、それはさ、ほら、

また智哉なんかやらかして、警察に捕まったんちゃうかなあって・

』・

愛は気が動転しながらも必死で言い訳をする。

智哉は少し含み笑いをしながら

『ふ〜ん』

とだけ答えた。

愛はつくづく二度目、三度目のメッセージを送ったのを後悔した。

無言になってしまった愛に、智哉は続けて話をしだす。

『で、本気で抱いて欲しいの？』

愛は、話が変わったことに少しホツとして、頭を切り替える。

『うん、そうだねえ。智哉みたいなイイ男なら一度でいいから抱かれてみたいね』

愛の頭の中には色々シナリオがあった。

まずは智哉とは【遊び】という関係を持つこと。

いきなり智哉に本気になれと行動をおこしても、こちらは既婚者、相手も彼女がいる。

ならまずは、お互い軽く楽しい浮気相手として関係を持っていくことを考えていた。

最終目標は、智哉の彼女から智哉を奪い取り、自分を本命にさせること。

『わかった、いいよ。
たださ、俺にも女いるし。一度だけな』

智哉が答えた。

『うん、あたしもさ、旦那も子供もいるしさ、本気で付き合っなんて考えてないし。』

遊びだね、遊び、暇つぶしに多少ドキドキしたいだけだし。
遊び相手なら智哉くらいの男前がいいしね。』

愛はとりあえず前に進む関係にガッツポーズ。

『長く続けて俺が愛にマジになったら困るしなあ』

そう言いながら智哉は笑う。

『有り得ないでしょ〜!?!?』

愛も笑う。

『ま、ヤッてしまってもせっかく再会したんやし、友達関係続けような』

智哉が真面目に言う。

ここで、愛は次の思惑を智哉に仕掛ける。

『キスは無しね。』

キスは絶対に好きな人とだけだから!』

これは愛にとっては重要な事だった。

これは自分への防御線。

愛は遊び相手とは絶対にキスはしないと決めているのだ。

万が一、恋愛感情には発展しないように、自分で線をきっちり引く。

『あ、それ、なんとなく俺もわかるような気がする。

了解、キスはナシね』

智哉も答えた。

『ただ、旦那、子供、彼女がいる関係だからさ、なかなか時間合わないから難しいかもね。』

愛が言うが、これも愛にとっては好都合、そんなに簡単に体を許すわけがない。

『だな、ま、また時間頑張って作ろつや』

智哉が言う。

『また近いうちに店に遊びに行くよ』

愛の作戦、また間を開けずに顔を店に行く事は肝心。

このままだとうやむやになって、なくなってしまうことは良くある。

『おお、楽しみに待ってるわ』

智哉が答え、電話を終える。

愛は少しワクワクしてきた。

数分後、愛の携帯メールが鳴った。

これ、俺のメルアド。

女がいて返事できない時もあるけど、またいつでもメールしてきてな。

会えるの、楽しみにしてるよ

智哉

由佳

それから愛は毎日毎日智哉にメールした。

他愛も無い話の中にも、ちよくちよく仕掛ける。

メールは文章。

想像や妄想を掻き立てる上に、確実に距離を縮めることができるとても便利な機能。

これを愛は最大限に利用する。

智哉も今は愛とのメールが一日の中で習慣付き、毎日やり取りを何通も何通もしていた。

愛 【智〜〜哉〜〜】

智 【どうした〜ん（＃＼＼＃）】

愛 【ちゅっ】

智 【ちゅうう】

愛 【あはは（＃＼＼＃）仕事中にウザイ??】

智 【犯すぞ！（；――）（笑）】

他愛も無いメールだが、お互い気分はノリノリだった。

基本、智哉が彼女と一緒にいない時間にメールをやりとりする、となると、智哉の彼女、沙織がシフトに入っていない曜日の仕事の時

間が一番都合がいい。

まるで、ラブラブなカップルかのようなメールを、来る日も来る日も続ける。

そしてお互いを高めあう。

愛 【早く会いたいね】

智 【俺も早く会いたい。今から抱きしめに行っていない？】

しかし、愛は一番いいところで釘を刺す。

愛 【恋愛ごっこも楽しいね】

これは立派な作戦。

高めるだけ高め、愛し愛されている関係だと錯覚しそうなところで、現実に引き戻す。

【わたしはあなたとの遊びを、浮気を、心から楽しんでいます】

と。長期戦だがジワジワと意識させる。

想像と妄想と錯覚で。

もつと深い話、例えば相談事、そういう話は一切しなかった。

なぜなら重みのある話はまだ早すぎるから。

お互いのプライベートを良く知るにはもう一度会ってからの方がいい。

その来る二度目の面会の日までに、冗談と本気の間メールをやり取りし、警戒を解く。

二度目の面会后、すんなりと相手のなかに入り込むために、できるだけうわべだけのお付き合いと言う線で仲良くなっておく。

そして、初めて再会してから約一ヶ月たった頃、そろそろ会いに行く段取りを整える。

愛は次に一緒に行く友達はもう決めていた。

【由佳】

彼女は愛にとって、男を落とす方法やテクニックを学んだ、言わば師匠的存在。

彼女とは16歳の時にバイト先で知り合い、似たもの同士で意気投合。

何より彼女は経験の数が違う。

そして、男を分析する力は神のように長けている。

愛は今回、彼女に智哉を会わせて、分析してもらい、意見を聞き取った。

由佳にそのうまを伝えようと、快く了承してくれた。

そして今回は前もって智哉にも遊びに行く日にちを伝えた。

しかし、愛はもう一つ企んでいた。

智哉に行くと言えた水曜日は、智哉の彼女の沙織がシフト入りしていない日。

しかし、愛はその日に行くつもりはなかった。

どうしても友達がその日に行く事が無理になって、次の日の沙織がいる木曜日に行けないと、当日連絡をいれ、智哉の彼女に会う。

それが目的。

もちろん智哉には

【彼女には絡んだりしないから大丈夫】

と、伝える。

由佳にはついでに彼女を分析してもらったつもりだ。

敵を知ること、これが最大の勝利への道。

ついにこの作戦を実行に移す日が来た。

電話にて智哉に、彼女のいる木曜日に行く事を伝えた。

そう、決戦は木曜日。

その頃、今日来る予定だった愛を待っていたが、いきなり明日彼女のいる木曜日に変更になったと言う電話を先ほど受けた智哉は、店で少し落ち着きをなくしていた。

【愛も既婚者で同じ立場だし、まさか変に沙織に絡むことは無いだろうと思うけど……

それよりも……】

智哉は愛が変にばらしたりする事に心配はなかった。

それよりも、女と話をするだけで嫉妬に狂い、また機嫌を損ねてウダウダと文句を言う沙織が目には浮かび悩んでいた。

【全く知らない一見さんのお客さん……そんなウソはすぐにバレてしまいそうやし……】

智哉は沙織に、愛がどういう知り合いかと言うか、それを悩む。

【……仕方ない……ツレに頼んで裏とってもらうか……】

智哉は10年前の当時に一緒に遊んでいた友達が、たまたま愛と再

会し、今智哉が店を開いていると愛が聞き来店した、そういうシナリオを組み、友達と愛に個々メールを打ち、そういう話にあわせてもらう様に頼んだ。

『あ〜〜！面倒くせえ・・・』

メールを打ち終え、智哉はそう呟き携帯をポケットにしまった。

そのメールを受け取った愛は

【了解です！楽しみだね】

と、返信した。

『あはは。焦ってる』

愛は可笑しくてたまらなかった。

そして、ついに木曜日 came。

愛は由佳をつれ、今日も車で店へ向かう。

今日飲まない理由は

【悪酔いして、彼女に絡むとヤバイから】

由佳の提案だ。

本当はすっかりした思考で智哉の彼女を見極めるため。

今日は途中電話を入れずに店へ直行する。

由佳は念入りに化粧直しをしていた。

『そんな男前ならあたしもドキドキするやん』

と、笑いながら。

しかし愛は少し苦笑いをした。

由佳は愛から見ても美人だ。

そして男に関してはプロだ。

彼女に獲物をとられるのではないか・・・

彼女とつるんで行動に移すと常にその心配があった。

そんな愛に気付いたのか、由佳は

『心配せんでも人の獲物取ったりせんよ!』

と、笑う。

そうこうしているうちに店にたどり着く。

『あたしが先に入っただけ？』

由佳はそう言うか言わないかの間で、店の扉に手をかけた。

『いらっしやいませ』

聞き覚えのある声がある。

由佳の背中越しに智哉らしき影が見えた。

『よっ！いらっしやい、カウンターでいい？』

愛に気付いた智哉は、チラッと由佳を見てから愛に笑顔で話しかける。

『うん、カウンターで』

そう答えた愛は少し照れていた。

自分でもどうしてこんなに照れてるのかわからない。

彼の目がちゃんと見れない。

ここ一ヶ月のメールのやり取りが頭の中に駆け巡る。

もちろん、冗談ばかりのラブラブメールだったのに、智哉の顔を見て声を聞いてしまうと

【このクールな彼からあんなメールが届いてた・・・】

と、頭の中でめちゃくちゃになる。

ヤバイ、まだ会うことに免疫ができていない。

二人がカウンター席に座ると、智哉がカウンター越しに立つ。

由佳は堂々としている。

『あたし、ソルティードック』

それに智哉が

『ソルティードックね。愛は？』

と、声をかけ、愛を見る。

照れてしまってまともに顔を見れずにうつむき加減にしている愛とは違い、智哉はまっすぐな目で愛を見つめる。

【こいつ、ほんとにすげ〜・・・しっかりしろ！あたし！】

愛は頭の中で自分に【頑張れ】と励ます。

すると由佳が口を挟む。

『愛は今日は酒飲むなって言ってるからさ、ウーロン茶でもよろ

しく、愛は酒弱いから!』

・・・由佳、GOOD JOB

智哉が由佳を見て、笑いながら

『了解』

と答え、二人の前から立ち去ろうとする。

その時愛は背を向けようとしている智哉をやっと見るこゝろができた。

が、しかし。

まさに背を向けようとした瞬間、智哉は愛の方を見てクスッと鼻で笑った。

100

【うっわ、完全に上の立場に行かれてる・・・見透かされてる・・・】

愛はしまった・・・と頭を抱える。

すると、由佳が愛の膝のあたりを抓った。

『イタっ!』

愛はハッと由佳を見ると、由佳は愛を笑いながら睨みつけていた。

『愛・・・お前完全に相手のペースやん、あかんやん。完全に負けてるやん』

はい、まさにその通りで、今落ち込んでいたところです。

『しつかりせよ』

由佳は愛の目を見ながら軽く頭を小突く。

『・・・はい』

次の瞬間、由佳は愛に手招きをして、耳を貸せと言いつぐさをした。

そして、愛の耳元で愛は呟く。

『あの男、相当なやり手やな』

智哉が二人の前にお酒とウーロン茶を持って戻ってきた。

『お待たせしました』

愛は気合を入れなおす。

しかし、先に口を開いたのは由佳だった。

『あれ？彼女は？』

そう、カウンター内には智哉の姿しかなかった。

店に入ってしばらくは店内を見渡す余裕がなかった愛も、少し落ち

付き改めて店を見回すが、客以外に女の子はいなかった。

『なんか体調悪いから少し遅れてくるってさ、もうじき来るんじゃない？』

智哉の答えに由佳が続けて話をする。

『大丈夫、ある程度あたしも聞いているから、心配しないで』

智哉と由佳が笑う。

愛も少し遅れて笑う。

『心配なんかしてへんよ』

そう言うと智哉は違う席の客から呼ばれ、二人の前から立ち去った。

『由佳、イイ男でしょ？』

愛が由佳に小さな声で話しかける。

『確かに。でもそれをあの男、自分でよくわかってるね、相当なナルシストだわ』

由佳が答えた。

愛のよみも間違いなかったようだ。

続けて由佳が話する。

『自分を褒めてくれた時点であの男、その女をターゲットとしてみるんじゃない？』

あたしは絶対男前だね、なんて言ってやんない』

そう言っつて由佳は大きな声で笑った。

つられて愛も笑った。

間もなくして、カウンターに一人の女の子が入ってきた。

『彼女だ！』

由佳と愛は二人同時に小さく叫んだ。

なにやら智哉とこちらをみながらコソコソ話をしている。

話してる内容はなんとなくわかる。

智哉が何か彼女に言った後、彼女はこっちを見ながら厨房に入っつていった。

その後智哉は由佳と愛の前に再び立つ。

『あれ、女』

智哉は普通に話をしてきた。

『可愛いね』

由佳が答える。

『うっくん……』

智哉が笑いながら首を傾げる。

確かに沙織は可愛い。

しかし、智哉にとってはそうでもないのか。

昔のあのお人形のような彼女を知っている愛ならなんとなくその気持がわかった。

『今日はあだし達の相手、しなくてもいいからね。』

愛は智哉に言う。

『あゝ、大丈夫やで、気にせんでも』

そう言い笑いながらも、智哉は二人の前から立ち去る。

そして、その後、あまり智哉と話をする事がなかった。

彼女はいるからだけではなく、急に店が混みだし、智哉は忙しく店内を走り回っていた。

由佳は彼女とも少し話しをしたがっていたが、忙しいからか、はたまた私たちの側に来たくなかったのか、話をする機会がなかった。

『……帰ろっか』

由佳が諦めたかのように口にだす。

『そだね。』

愛もこれ以上店にいても仕方ないと思い、席を立つ。

レジにて会計を済ます。

レジではもう一人の知らない若い店員が対応してくれた為、最後に話すらできないまま。

今回の作戦は不発だったかな・・・と思いながら店をでた。

愛は、少し元気がないまま、店の前でカバンの中にある車の鍵を探す。

その時、誰かが店から飛び出してきた。

智哉だ。

『ごめんな！開いてできなくて！』

開口一番、智哉がこう言った。

『うん、忙しかったみたいだし、全然気にしてないよ』

愛は笑顔で答えた。

由佳は少し先のほうで誰かと電話をしている。

・・・電話をしているフリかもしれない。

チラチラとこちらを見ている。

『ホンマ、ごめん、せっかく来てくれたのに、ごめん』

智哉はチラチラ店の中を気にしながら、何度も謝る。

『いいよ、店に戻りな。またメールするし』

愛は彼女を気にしている智哉にそう言った。

『お願い！また近いうちに店に来て。今日の借りは返すから、な！
？絶対に』

智哉がそう言った直後、店のドアが開く。

『智哉~~~~？お客さん呼んでるよ〜？』

沙織だ。

沙織は愛を見ながら智哉に話し掛ける。

『あ、わかった、すぐ行く』

智哉は彼女にそう言い、手で【店に入れ】と言うジェスチャーをした。

しかし、沙織はずっと店のドアを半分開けたまま、智哉を待っている。

沙織と愛を交互に見て、愛に何かを言いたそうにしている智哉。

『ねえ！ともや！お客さん呼んでるってば！』

沙織が少しイライラしながら智哉を急かす。

『あ！？わかってるって！』

智哉も少しイライラしている。

『あ・・・じゃあ今日は有難うございました。』

愛はそれだけを言い残すと、智哉に背を向け由佳のところまで小走りした。

由佳の所にたどり着き、ふと後ろを振り返ると、もう、智哉はいなかった。

愛が、家に帰るや否や、携帯メールが受信する。

『由佳からだ・・・』

お疲れ〜。

あたしが分析する限りは、あの男を本気にさせるにはなかなか

難しいかも。

まして、あなた、既婚者なの知ってるんやろ……？

下手したらあの男、恋愛、したことないんじゃない？

愛の方がはまってしまふ可能性が高い。

とにかく！

絶対エッチすんな！

ヤツっちゃったら負けだと思ふこと！

愛のこと、食う気満々やわ、あの男。

あと、あの彼女はそんなに問題でもないんじゃない？

何かあったらまた相談乗るから連絡しておいで

【……由佳、これはあたしを止めてるのか……？】

メールを返信しようとした途端、またすぐにメールを受信する。

【また由佳や……】

忘れてた。

あたしが愛のことを分析した結果。

あんたはもう、少しだけあの男に恋愛感情抱いてる。

あたしはそう思ったけどな！

【はあ〜？】

愛は顔を顰める。

【確かにいい男だし、ドキドキしたけども、恋愛感情なんて入ってる訳ないやん。】

愛はブツブツ独り言を言う。

由佳には【ありがとう】とだけ返信をして、携帯を閉じる。

『有り得へん！』

愛は大きく息を吸う。

『……有り得る訳ないやん。』

愛は今日、帰りしなに、智哉が何かを言おうとしてた事を思い出した。

『……何やったんやろ……』

泣かない女

あの日から数日間、智哉からのメールはなかった。

おそらく彼女が常に側にいるのだろう。

愛もその後からしばらく、子供が風邪をひいたり、自分も風邪をひいたり、何かとバタバタしていて、メールが無い事を多少気にしたが、自分の生活でいっぱいだった為、自分からメールをすることもなかった。

こうやって、一日、二日、三日と、時間が経つにつれ、あんなに頭の中がいっぱいだった智哉の事が、日に日に薄れて行っていた。

『やっぱり家族が一番、ゴメンね、ママ自分のことでいっぱいになつてて』

愛は眠る子供の頭をなでながら呟く。

由佳の言葉もあり、もう手を引こうか、考え出していた。

『・・・なんだかちよつとめんどくさくなつてきたなあ・・・』

不思議なことに人間、時間が経つことと、暇がなくなると、急にきつちり現実を見れるようになる。

『まあ、それだけの事だったのかな』

携帯依存症のようになっていた最近の愛、しかし、もう執拗に携帯

を見る事もなくなっていた。

メールも長らく打っていない。

【このまま宙ぶらりんもなんだかなあ・・・】

愛は悩んでいた。

このまま放っておいてもいいのかもしれないけど、きっちり終わらせないとまた日が経ってから智哉から何か言ってくるかもしれない。

じゃあどうやって終わらせるか・・・。

愛は携帯を持ち、久しぶりに宛先を智哉に合わせる。

どうしてる？

この前はありがとうね。

彼女、大丈夫だった？

あたしも何かと忙しくて・・・

ここまで打った後、愛は手が止まった。

【なんて切り出せばいいのかわからない】

何も始まっていない二人。

別れようって言葉は違う。

この前の約束は無しね。

これもなんだか違う。

愛は完全に手が止まり、携帯を見つめる。

その時、いきなり着信で、手に持った携帯が震えた。

【智哉】

なんてタイミング。

電話に出ようかなやんでいたが、なかなか切れないので、愛は通話ボタンを押す。

『もしもし？』

『あ、俺、連絡できなくてごめん』

智哉は何事も無かったかの様に話をしだす。

『あ、うん、あたしも色々忙しかったし』

愛は智哉の出方を見る。

『そっか、実はあの後俺、女とスッゲー喧嘩して。』

智哉のテンションが少し下がる。

『え!?!あたしのせい?』

愛はびっくりして聞き返す。

『いや、違・・・うっん・・・』

愛は黙る智哉の声に何かを言おうとしたが、言葉が思いつかない。

『確かに愛達が来て、嫉妬とかもあるんやけどさ・・・
それだけじゃなくて、なんか何も無いとこまで疑ってくるし、
仕事で疲れてても色々詮索されてさあ』

智哉が疲れたような声で言う。

『で、疲れたってわけか』

愛が答える。

『こっちがちよっと何か言っと泣けばいいと思ってやがるし・・・
しんどいわ』

愛はそれを聞いてすぐに答える。

『女らしくて可愛い彼女やな』

智哉はその言葉に少しテンションが上がり、愛に聞く。

『愛は俺から連絡なくて寂しくなかった?』

愛は答えに悩んだ。

寂しかった……と言えば二人の関係は続いていく。

全然……と答えればうまくそこから終わらせる事ができる。

愛は一瞬で色々悩んだが、不意に答えが口から出ていた。

『寂しかったよ』

愛は本心なのか、または戦略の続きなのかわからなかったが、どちらにする愛の本能が答えてしまった。

『愛は寂しくて泣いたりせーへんの？』

智哉は愛に聞く。

愛は思った。

これは智哉側の戦略だ。

女の子を探る戦略だ。

愛は簡単に答えが出てきた。

『可愛くなくてごめんね。』

寂しいくらいで泣く女じゃないのよ。』

愛は笑いながら答えた。

智哉も電話先で笑う。

『泣く女は嫌いやけど、そう、はっきり言うと、確かに可愛くないな！』

智哉が笑う。

『うん、可愛くないよ』

愛も笑いながら答えた。

少しして、智哉の笑いが止まる。

『・・・・・・・・いよ。』

電話先から、ボソッと何かが聞こえた。

『なに？』

愛が聞き返す。

『愛は、可愛いよ。』

会いたい

電話を切り、愛は顔を赤らめていた。

【あれくらいで、このあたしが何照れてる!!】

愛は顔を二回パチパチと叩く。

【・・・あいつ上手いな・・・】

ちよつとキュンとした自分に反省。

だめだ、完全に相手のペース。

・・・でもなんだろう・・・

ちよつと、会いたい。

顔が見たい。

愛は騙しきれない自分の気持ちに苦しんでいた。

【あつ！彼女と仲直りしたのか聞くのわすれた】

愛の次の戦略は、彼女との仲を一生懸命親身になり、聞いてあげ、相談にのり必死で仲を保たせようと見せかけ、徐々に別れにちかづかせると言うものだった。

【関係を切るつもりがあたし何やってんだか・・・

どっちも中途半端やん・・・】

とにかくもう一度会いに行こう。

この前は彼女がいたからなかなか発展もなく、イマイチこの先が見えなかったし・・・

愛は自分に言い訳をしている事に気付いてない。

本当は本能が叫んでいる。

【会いたい】

ちょうど昨日、綾からメールがあった。

【彼氏と別れた〜(T|T)男紹介して〜】

これを利用しよう。

愛はさつき電話を切ったばかりの智哉にメールを打つ。

最初行った時に一緒に行った、綾、覚えてる？

彼女が男紹介して欲しいって。

誰かいるかな？

これを会うきっかけにもっていこうと、愛は考えた。

しばらくして返信メールが来る。

了解！

俺なんかどう???

ウソウソ (笑)

いつ来る?

その日に誰か呼んどくわ!

愛は少し笑った。

俺なんかどう?・・・って、ちょっと本気のくせに。

愛は綾に連絡をしていく日を決め、智哉に伝えた。

智哉からの返事が返ってくる。

お?もうすぐやん?

また会えるなw

楽しみやね。

綾ちゃんならかわいからツレも喜ぶわ。

愛の方が100倍可愛いけどな(#^・^#)

愛は少しニヤけてしまった。

そして返信をする。

嘘くさっ！

あたしにもイイ男紹介しろ！

すると智哉からすぐに返信がくる。

俺がおるのに？

あかん！（怒）

愛は俺のもんや（＃＾．＾＃）

愛は固まる。

【うそ臭さの満開なのに・・・】

何あたし智哉を試して思い通りの返事に喜んでんだか・・・】

愛は携帯を閉じ、少し赤くなった顔を擦った。

大失敗の故・・・

綾と店に行く当日。

今日は夫が

【大丈夫だからたまには飲んでおいでよ】

というので、電話で行こうと思った。

しかし、三月とは言え、まだ寒い。

しかも、子供からうつされた風邪がイマイチ治っていないのか、鼻水がでる。

今日も飲まずに我慢しようと、鼻炎薬を飲み、愛は車で店に向かう。

しかし、鼻炎薬が効いてきたのか、だんだん眠気が襲ってくる。

【・・・ヤバイなあ・・・】

目をパチパチさせながらなんとか店に着く。

今日は綾とは店で待ち合わせをしていた。

店に着いた時にはもう、綾は店に入っていた。

愛は少しドキドキしながら店に入る。

すぐに智哉が入り口に来た。

『いざっじゃいませ』

愛はニコッと笑い、

『綾は？』

と、智哉に聞く。

『もう、おれのツレと飲んでるよ。』

そう言うと、智哉は綾の座っている席まで愛を誘導する。

『お〜、愛、遅いよ〜！』

綾はテンション高く愛に話しかける。

テンションの高さの理由が愛にはすぐにわかった。

綾の隣に座っている男、おそらく彼が智哉の連れであろう。

なんとも綾の好きそうな、ノリの良さそうな男だ。

『ごめん、ごめん、ちょっと道混んでて〜』

愛は綾の反対隣に座る。

『愛ちゃん？俺、アキラ言います。』

『とりあえず乾杯しましょ。』

綾の隣から身を乗り出し男は乾杯のフリをして愛に話しかける。

『あ、あたしは・・・お酒は車だし・・・』

愛が言いかけた言葉に被せてアキラは言う。

『一杯くらい大丈夫でしょ。』

『智哉、愛ちゃんに軽いの作ってやれよ』

勝手に進めるアキラに愛は苦笑いしかできなかった。

『まあ、一杯くらいなら大丈夫かな・・・』

愛も決して飲めない訳ではないので、今回は軽く一杯だけ飲むことにした。

しばらくして智哉がカクテルを持ってきた。

『薄く作ってあるから』

そう言いグラスを愛の前に置く。

『おい。智哉も飲めよ』

アキラは智哉に言う。

『アキラ、じゃあ久しぶりにいつとく?』

智哉はクイツと飲む手振りをした。

『いつときますか〜!?!』

アキラが答えると、智哉はすぐにテキーラを出す。

そして、四人でグラスを持ち、

『かんぱ〜〜い!』

チンツット、甲高い音がして、アキラと智哉はショットグラスを飲み干す。

綾もグラスの半分ぐらいまでビールを飲む。

愛は一度少しグラスに口をつけ、味を確かめる。

『あ、美味しい』

愛は久しぶりのお酒がとても美味しく感じ、クツと飲む。

『いいねええ〜!』

アキラが笑っている。

『久しぶりにテキーラ飲むと来るな〜〜!』

智哉も楽しそうに笑う。

愛もアキラが場を盛り上げてくれる事が救いになり、今日は普通に楽しめそうだと、気分良く笑った。

しかし……

【……やばい……】

綾とアキラと智哉は楽しそうに話をしながら笑っている。

愛も笑っているが心ここにあらず。

目が一点を見つめている。

それに気付いた智哉は、

『大丈夫？』

と、愛に声をかけるが

『うん、平気だよ』

と、愛は精一杯こたえる。

しかし、愛の体は闘っていた。

【睡魔】と。

愛はすっかり忘れていた。

鼻炎薬を飲んでできたことを。

ただでさえ鼻炎薬で眠気が来てた中で、ものすごく久しぶりのお酒。

もう、目を開けているのが精一杯だ。

みんなが笑ってる声が遠くに聞こえる。

まるで音の無いテレビを見ているようだ。

何かを話しているが、全く内容が耳に入らない。

今すぐカウンターにうつ伏せて眠りたい……

眠りたい……

……眠り……た……

『お〜い、お〜い』

『ダメだわ』

『愛〜？大丈夫〜？』

『あかん、完全に潰れてるわ。』

『キールロワイヤル一杯で?』

『あははは!』

『愛?先にあたし帰るよ?明日仕事早いし、ごめんね?』

『全然聞こえてないって!』

『智哉、俺も綾ちゃん駅まで送ったらそのまま帰るわ。』

『お、また飲もうなあ』

『智哉さん、愛宜しくお願いします』

『あ、もう少し寝かせたらちゃんと起こして帰すよ』

『ありがとう、よろしくお願いします』

『じゃあなあ、智哉』

『おい、またなあ』

……誰かがあたしの頭を撫でている……

誰……?』

眠いよ〜・・・

もう少し寝かせて〜・・・

『おい・・・おいつ！ 愛っ！』

『はいいい???』

『いつまで寝てんねん!』

ぼんやりした視界の先に、なんとなくわかる智哉の顔・・・

え・・・?

智哉???

ごうごう・・・?

『何寝ぼけてんねん!俺の店やる!
グースカ寝やがって!』

あ・・・そつか・・・寝てしまったんや・・・

『あれ?綾は? アキラは?』

『お前が起きへんから帰った』

智哉は呆れたようにため息まじりに答える。

『うそ！？酷いわ〜・・・』

愛はひれ伏せる。

『何が酷いやねん、どれだけみんな起こそうとした事か』

【・・・まじ・・・？あたしそんなに爆睡してたの？】

愛は色々と思い出そうとする・・・

すると、智哉は続けて話をする。

『しかも来て10分で一杯飲んだだけでつぶれやがって・・・
飲めないなら飲むな、アホ、お前の方が最低や』

愛は返す言葉もない。

『・・・いや、薬も飲んで・・・
でもなんか断れなくて・・・
っていうか！今何時！？』

愛は我に返り、あわてて時間を聞く。

『22時過ぎ』

智也がチラッと腕時計を見て無愛想に答える。

愛は少しホッとする。

『よかつた〜・・・もしかしたらもう日が変わってるのかと思った
〜』

愛はまた、ひれ伏せる。

『そう思ってちゃんと起こしたやろが!』

智哉はそう言いながら愛に水を渡した。

愛はペコッと頭を下げ水を一気に飲む。

『旦那、門限何時よ?』

智哉はまた呆れた顔をして愛に聞く。

『・・・無いって言えば無いけど一応日が変わるくらい・・・かな。
』

愛はまだ少しボーッとした頭を一生懸命整理していた。

そして智哉をそーっと見た。

『あほっ!』

目が合った瞬間、智哉は吐き捨てるように言った。

愛は今回ばかりは反省・・・

シユンと落ち込んだ。

『・・・・・・・・ツプ・・・・・・・・』

智哉が噴出した。

サツと顔を上げ愛は智哉を見る。

『・・・・・・・・クツクツクツ・・・・・・・・』

智哉は声を殺して笑っている。

そして

『愛はもう少ししっかりしてると思ってたけどな』

そう言い、大きく笑った。

愛はボーッとそんな智哉を見つめた。

『夜遊びはそんなにしないのか?』

智哉が愛に聞く。

『・・・・・・・・いや・・・・・・・・たま・・・・・・・・に』

愛は小さく答えると

『男か?』

と、即座に智哉は聞いてきた。

『え?・・・あつ・・・』

愛は答えに詰まった。

まだ思考回路がまともではない。

次の瞬間、少し智哉がムツとした表情を見せた。

『なんやねん、旦那以外に男おるんやん』

愛はふと、ヒロを思い出した。

そう、智哉を出会い、長い間メールもせず、無視していたヒロ。

智哉と出会うまでは月に一度ヒロと出かけていた。

『・・・いや、もう最近会ってない・・・』

愛はとりあえずこうこたえた。

『浮気性。』

俺、浮気癖のある女とは付き合いたくないわ〜』

智哉はちよつと不機嫌そうに答えた。

『付き合いたくないって・・・』

あたし智哉と付き合ってたないし。』

愛は少し腹が立ち、嫌味っぽく答えた。

『あ、そつやな!』

智哉は笑った。

愛は黙り込む。

そして、少しの間を置き、愛は席を立つ。

『そろそろ帰るわ』

会計をしている間、二人は無言だった。

そして、財布にお釣りをしまい、やっと愛は言葉を出す。

『今日は迷惑かけてごめんね、ありがとう』

そついい、出口に向かい歩き出す。

すると、

『あ、ちよつと待って!』

智哉が慌てて店のバックルームに入っていく。

そして、すぐに出て来た彼の手には、ダウンジャケット。

『車どこ？駐車場まで送るわ』

そう言いながらダウンジャケットを羽織る。

店にいるバイトの男の子になにやら話をしに行き

『はい、行くじ』

と、愛の前を歩き出し、店の外に出た。

・・・愛のないSEX・・・

『うわゝ、さつぷゝゝ・・・』

智哉がダウンを深々と着なおし、ポケットに手を入れる。

愛は智哉の左側に移動し、少し小走り。

『おれがこんな風に店の前よりも遠くに送るなんて、ホンマ特別やで！』

なんて押し付けがましい言葉。

でも、愛は何も言い返せなかった。

智哉はふと、足の向きを変え、道の脇にある自動販売機の前に立ち、財布を取り出す。

『どれ飲む？』

愛は暖かいコーヒーを指差す。

『オススメって書いてあるからこれ選んだんやろ？』

『これ、マズイで！』

そう言いながら智哉はオススメとPOPのついたボタンを押す。

『え！？嘘！？じゃあ違・・・あっ！』

愛はまさに【オススメ】と書いてあったために選んだので、違う種類に変えようとしたが、智哉に先にボタンを押されてしまった。

『つつそ〜！』

『はいよ、これ。』

智哉はそういうと、愛に取り出した缶コーヒーを渡す。

愛はコーヒーを受け取り、少し膨れっ面をした。

『怒るなっ〜！』

智哉は自分の分の缶コーヒーを買い、また道に戻り歩き出す。

愛も急いで智哉に追いつく。

無言の時間が流れる。

愛のヒールの音だけが響く。

えらく駐車場が遠く感じる。

無言に堪えられず、愛は口を開く。

『バーの仕事・・・楽しい？』

智哉はコーヒーを空けずに、両手で包み込むように持ちながら手を温めている。

『うん・・・そやな、しんどい時もあるけどな』

智哉はそう言うと、缶を振り、開けて一口飲む。

愛はそのしぐさ、一つ一つをじーっと見つめていた。

『女好きな智哉にとっては良い仕事やね。』

少し笑いながら愛は智哉に聞いた。

『天職やる！？』

智哉は無邪気な笑顔を見せ、答えた。

『だね』

愛も笑いながら答えた。

気のせいか、店を出てから智哉は愛の方を一度も見えていない。

愛が一方的に智哉の方を見ていた。

その視線に気付いているのかいないのか、智哉は前だけを見て歩く。

そうしているうちに、愛の車をとめてあるコインパーキングに着いた。

『車、どれ？』

智哉が愛に聞く。

『あ、これ。』

愛は車の横に立つ。

『でっかい車乗ってるんやなあ、いいなあ、中見せてよ。』

愛の車は8人乗りのミニバン。

智哉は愛は女なので、軽自動車であるかと勝手に想像していたのであろう。

『うん、いいけど』

愛はキーレスで車の鍵を開けた。

智哉はまず、運転席を覗き、次に後部座席のドアを開け、3列目のシートに座る。

『お〜、広いなあ、これくらい広いとやっぱりいいなあ』

愛はドアの側に立ち

『うん、広いのは便利だよ』

と、智哉を見て答えた。

智哉は車の中を色々探り

『へ〜・・・あ、こごなってるや〜』

等と、独り言を言っている。

愛は寒いので、運転席側に周り、先にエンジンをかけてから、もう一度後部座席側のドアの側に立ち、

『先にお金払ってくるね。』

と、言い、智哉の方を見た。

その瞬間、智哉が急に愛の手首を強く握り、愛の目を見た。

愛は声すら出せず、ただびっくりして固まる。

『おいで』

低い声で智哉が愛の目を見続け、小さく呟く。

そして、グイッと強く車の中に愛を引きずり込み、後部座席のスライドドアを勢い良く閉めた。

バタンッ

と、大きな音が響いた。

時間にして、10時半過ぎ。

店の場所から少し離れたこのコインパーキングは、住宅街に位置しており、時々会社帰りのサラリーマンが通るくらいで、コインパーキングの中までは誰も目を向けない。

静かな車内に、小さくカーステレオから音楽だけが鳴り響く。

座席に座る智哉、そして座席の下で、智哉の両膝の間に膝まつく様に座り込む愛。

愛は全く動けなかった。

智哉は愛の目をじっと見つめる。

やっとの思いで愛は声をだす。

『・・・な・・・どう・・・した・・・ん？』

ちゃんと声が出ない。

『抱いて欲しい・・・んやろ？』

智哉が真顔で聞く。

愛は今にも心臓が口から飛び出しそうだった。

ゴクッ・・・

愛は唾液を飲み込む。

口の中がカラカラだ。

『こ……ここで？』

愛はこうこたえるのが精一杯だった。

智哉は何も答えず、表情も変えず、愛の腕を握ったまま、ただ愛を見つめている。

愛は今すぐにも逃げ出したかった。

しかし、体が思考を反対にうまく動かない。

『冗談……』

言いかけて愛は言葉に詰まった。

まっすぐ見つめてくる智哉の目。

少し恐怖感さえ覚える。

愛は完全に黙り込んでしまう。

カーステレオから流れる曲が終わった瞬間

智哉は愛を力強く抱き寄せた。

愛は完全に動けなくなっていた。

あれ？どうしてあたし、こうなったの？

一生懸命今日のここまでの経過を頭の中で辿る。

しかし、今この状況ではちゃんと頭が回らない。

『智・・・哉・・・』

愛は智哉に苦しいくらい強く抱きしめられ、何かを言いたいが言葉が思いつかない。

智哉が愛の横髪を少し撫でてから耳にかける。

そして、愛の耳に唇が触れる。

そのまま首筋に唇を這わせ服を脱がせる。

愛はもう体に全く力が入らなかった。

それに気がついたのか、智哉は一旦手を止め、片腕で愛を抱きしめながら、自分が着ていたダウンを脱ぐ。

そして、制服のベストのボタンとシャツのボタンを外した後、愛を抱き上げ、シートに寝かせた。

愛は既に抵抗することすら止めていた。

もう一度愛を見つめなおす智哉。

一時の間をおき、智哉は愛に覆いかぶさり、愛の胸元に顔を埋め、激しく愛を求めた。

愛も強く、智哉を抱きしめ返した。

．．．．はあ．．．．はあ．．．．

カーステレオから流れる小さな音楽と

二人の吐息だけが

車内に響く

完全に車の全ての窓ガラスは曇り

外からの視覚はシャットダウンされている

車内の温度は

急激に高くなっていく

『……オレ……もう……』

智哉の切ない声

『……いいよ……』

愛はぎゅっと智哉を抱きしめる

次の瞬間

智哉の顔が切なく歪む

そして

愛の体に

智哉の体が倒れこんだ

冷めてゆく心と湧き上がる感情

『え!?! ヤツちやっただの!?!』

声を裏返しながら由佳は聞く。

『……うん……』

愛はハンドルを握り、片手に携帯を持ちながら頷く。

『……マジで……』

由佳は笑い声にも似た、呆れ口調で答えた。

『だって〜逃げられんかったんやもん〜』

愛は信号待ちでブレーキを踏み停車すると、ハンドルに顔を押し付けた。

パーーーーッ!

自分の顔でクラクションを鳴らしてしまい、驚き慌てて顔を上げる。

30分前……

『あつ!』

智哉が飛び上がる。

『何!?!』

愛も慌てて起き上がる。

『今何時!?!』

智哉が脱いだ服のポケットから慌てながら携帯を探る。

愛は運転席横にあるデジタル時計に目をやる。

『11時10分・・・過ぎだけど・・・』

愛が答えるとすぐ

『やっべ〜!店放置して一時間近く経ってるやん!』

智哉は慌てて服を着ながら車外へ飛び出し、携帯から誰かに電話している。

愛も乱れた服を素早く着なおし、横に置いてあった智哉のダウンジャケットを持って外に出る。

携帯電話をパタンと閉じた智哉にダウンジャケットを手渡しながら愛は聞く。

『店、大丈夫？』

智哉はダウンジャケットを着ながら

『多分・・・急いで戻るわ！』

と答え、財布から2千円を取り出し、愛に渡す。

愛が困惑していると、

『あ、駐車場代』

と、智哉が答えた。

智哉がもう一度車に乗り込み、シート位置などを確認して、空っぽの缶コーヒーを二つ手にして再び車から降りた。

『これ、捨てとく、愛こそ家、大丈夫？』

愛に智哉は早口で聞く。

『うん、結構急がないとヤバイかも』

愛は答えながら駐車場代を払う。

うまく千円札が入っていかず何度も返ってくる。

『ちよっと貸してみ』

智哉が愛の手から札を奪い取り、清算機に入れるとすんなり入って

いく。

続けてもう一枚入れると、お釣りがチャリチャリ音を立てて落ちてくる。

そのお釣りを智哉は掻き出し、愛に手渡し

『気をつけて帰れよ、遅くなってごめんな』

と言った。

『うん』

と、愛は答え、運転席に乗り込むと、窓を開け、智哉に手を振った。

『じゃあな』

智哉も手を振る。

愛はそのまま車を出し、角を曲がり智哉が見えなくなるとすぐに携帯を取り出し、由佳に電話をかけた。

『は!?!?何それ!?!?』

由佳は少し怒りを込め愛に聞く。

『ね、ちょっと酷いでしょ?』

愛もこたえる。

『エッチ終わった後にそれかよ！いくら遊びでも酷すぎるっちゆうねん！』

由佳がまくし立てる。

『あはは・・・』

愛が呆れ笑いをする。

『でっ。』

由佳が続けて聞く。

『え？で？ってそれだけ。』

愛が少し困り気味に言う。

『ちやうつちゆうーねん！愛、あんたヤツて、今どんな感情よ？』

少し苛立ちながら由佳が聞いた。

『あゝ・・・あははは・・・』

愛は力なく笑う。

『まさか、ハマッたんやないやろっね？』

由佳が真面目な声で聞く。

『・・・うん、それがさあ、期待を裏切るように悪いんやけど・・・
・変なんよね。』

愛のテンションが少し落ちた。

『どつという意味？』

由佳が聞くと、愛はテンション低いまま、ぼちぼち話す。

『正直さあ、あたしもヤツちゃったら、ハマってしまうんやないか
と思っただね、少し怖かったんやけどね・・・』

なんていうか・・・どちらかと言えば気持ちが冷めていってると
言うか・・・』

なんか、もういやっていうか・・・
全くドキドキしてないんよね、さっきまでのが嘘のように』

愛は自分の今の気持ちを何て言う言葉がぴったり来るのかわからず、
悩んでいた。

なんだろう、この急激に下がっていく心の温度は・・・

『エッチが良くなかったって事？』

由佳が少し笑いながら聞く。

『いや、違う、それはそれはもう、よかった』

愛が笑う。

『終わった後の態度に冷めた？』

続けて由佳が聞く。

『いんや〜？違うなあ・・・』

愛も困惑する。

しばらくの沈黙。

『そこが愛にとっての今回のゲームのゴールやったんやない？』

由佳が少しトーンを落とした声で言う。

『あ・・・そうなのかも・・・』

愛は自分では気付いていなかっただけで、エッチした時点で終わりと、心のどこかで決めていたのかもしれない。

『勿体無いなあ・・・これから面白くなっていくのに』

由佳が悔しがるように言う。

『あはは！そうだね。でも・・・ちょっと考えるわあ・・・』

愛が力なく笑い答えた。

『了解、でも愛？背中押すわけじゃないけどさ・・・』

由佳が言葉に詰まる。

言おうか言わまいか、悩んでいるのが伺えたので、

『何?』

と、愛が聞き返す。

『あゝ・・・うん。』

今、愛の感情が断ち切れたからこそ、もし自分に振り向かせる作戦を続行した場合、

『愛が少し有利になるんやで』

そして、由佳との電話を切った。

電話を切り、愛は考えた。

【有利・・・か】

愛は悩む。

あまり気が乗らなかった。

どうしてこんなに一気に冷めていくのか。

しかも、彼との最初のメールでの約束。

【抱いてもいいけど、一度だけね】

その一度がこんなに早く来てしまった。

まさかこんな風になるなんて思ってもなかった。

作戦シナリオもおかげでめちゃくちゃだ。

ここからどう繋いだらいいかももう、わからなかった。

【もしかしてあたし、諦めてしまってる・・・？だから冷めてってる・・・？】

愛は髪をグシャグシャかき回す。

『はぁ・・・』

大きくため息をついた。

もう時期家にたどり着く。

そしてふと、思い出す。

【ホントにキス、一度もなかった・・・な。】

何をやってるんだ、俺

『ごめん、めっちゃ遅くなった!』

店に駆け込んだ智哉。

『何かあつたんですか?』

心配そうに店員の一人が智哉を見る。

『いや、ちょっとトラブル・・・もう解決したから』

智哉は店にある鏡を手にして、髪が乱れていないか確かめた。

『智哉、お疲れ!』

ニヤニヤ笑いながら近づいてくるもう一人の店員。

彼は智哉の後輩の【修】しゅう。

暇な時に智哉の店を手伝っている。

『何かお疲れや!』

智哉が修に殴るフリをしながら言う。

『大丈夫、髪、乱れてない』

修は智哉のパンチを受け止めながら笑う。

『何やねん、お前〜!』

智哉は笑いながら修を見る。

『で、どうやったん!?!』

修はニヤニヤしながら智哉に寄る。

『何がやねん、何も無いわ!』

智哉が修の肩を軽く押しつけ、カウンター内に入る。

修は智哉に続き、カウンターに入り

『いつもの様に急いで店に帰るフリ、したんやろ?』

と言い、ケラケラ笑う。

『修、黙れ、客の前や』

智哉は真面目な顔をして、話を切る。

修は手をパタパタと振り、【はいはい】と言う感じで厨房に入っ
ていった。

客は何事かと智哉を見ていた。

【……あいつ、遅くなったけど大丈夫か……?】

智哉は愛にメールを打とうと携帯を開いたが、すぐにまた携帯を閉じてポケットにしまった。

【今メールするのはヤバイか。

もしかしたら旦那と揉めてるかもしれへんしな】

そうして仕事についた。

【酔いつぶれてくれたなんて、助かった。

沙織に嘘をついて出かける手間が省けたな】

智哉は少し、鼻で笑った。

深夜3時。

店を閉め、智哉が外に出たると、あとからついてきた修が、智哉の肩を叩く。

『さて、店をほっぽりだした罰として、色々聞かせてもらおうか』

そう言いながら、智哉と肩を組む。

『お前なあ・・・』

智哉はタバコに火をつけながら笑う。

『どこの店行く？』

修が智哉の顔を覗き込む。

それに対し、智哉はわざとらしく、タバコの火を修の顔スレスレ口に加えたタバコを手取る。

『おい！危ねえな！』

修はバツと、智哉の肩に置いた手を退け、智哉から離れる。

智哉はそれを見ながら笑い

『悪い、今日は帰るわ〜。』

と、言いながら、タバコを持つ手を軽く挙げた。

『何？沙織ちゃん？』

修もポケットからタバコを取り出し加えた。

智哉は持っていたジッポで修のタバコに火をつけながら頷く。

『なんやかんや言いながら続いてるんやん』

修はサンキユ、と言うフリで手を挙げ聞きなおす。

『ウザくて仕方ないんやけどね、今日はなんか部屋で待つとるらしくて、怒らしたら面倒くさいやん？』

智哉は煙が目に入ったのか、目を擦りながら答える。

『沙織ちゃん、こええもんね。』

で、今日見せに来てた女の子に手を出すんかいな？』

修は智哉を見ながら聞いた。

智哉は【無い無い】と言う風に手を左右に振りながら答える。

『ダメダメ、あれ、人妻』

修は【ワハハッ】と大声で笑い、続けて話をする。

『遊びな訳ね、相変わらずやるなあ、智哉は。』

智哉は煙草を消しながら笑顔で頷く。

『いい女なんやけどねえ』

智哉はそう言いながら単車にキーを挿し、エンジンをかけた。

『ま、また明日にでも飲みに行こうや』

そう言っと、智哉は片手を挙げた。

『あいよ』

修も手を挙げ歩き出した。

家に帰ると、寝転んで雑誌を読んでいる沙織がいた。

『あ、おかえり、遅かったね』

沙織は雑誌を閉じ、起き上がる。

『あゝ、店、混んでて。』

智哉は着ていたダウンジャケットをベッドの脇に放り投げ、沙織を見ずに答えた。

『何時に店閉めたの？』

沙織が続けて聞く。

『2時半くらい』

無愛想に答える智哉。

『今、もう3時半』

少し機嫌の悪そうな口調で沙織は言う。

『閉店作業に手間取ってた』

智哉はベッドに腰掛け、ポケットから煙草を取り出す。

『それにしても遅くない？何時に店出たの？』

沙織は智哉の顔をじっくり見ながら聞く。

『修と少ししゃべってた』

ラスト1本の煙草が、真つ二つに折れていた為、少しイラッとしながら、共やは煙草の箱をグシャツとにぎり潰し、テーブルの上に投げた。

智哉の機嫌が悪くなるのを解りながらも沙織はまだ聞く。

『どこで話していたの？』

智哉は即座に

『店の前』

と、答えたが、かなりイライラしている。

『この寒いのに？何を話していたの？』

沙織は構わず話し続ける。

智哉はもう面倒になり、答えずにテレビの電源を入れる。

それが気に入らなかつた沙織は続けて話し続ける。

『何？あたしには言えない事？』

智哉はただテレビを見ている。

『今日は誰か知り合いの客、店に来た？』

智哉はテレビのリモコンをテーブルにわざと投げる。

バンツと大きな音を立てる。

『ねえ、何で無視すんのよ？』

『マズイ事があるからで……』』

沙織がそこまで言った時、智哉はとうとう我慢できなくなり、テーブルをおもいっきり蹴る。

ダンツと、大きな音が部屋に響く。

沙織は少しびっくりしたが、平然を装い

『何テーブルにキレてんのよ』』

と答えた。

智哉は沙織を睨みつける。

『仕事から疲れて帰ってきたオレにお前はそんな事ばかりしか言えんのか！？』』

智哉はやつと口を開く。

『そんなことばっかって、あたしはただ聞いてるだけやん！』』

沙織も負けずに言い返す。

『何がただ聞いてるだけや？』』

人疑うことばっかダラダラ聞きやがって』

智也のイライラは限界だった。

『んなこと言っただって過去にあんなことあれば誰だって信用なんかできるはずないやろ!？』

携帯も意地でも見せへんし!』

沙織は過去の智哉の浮気を責めた。

『昔のことやろ!』

あの時謝ったやろ!

それに対してお前は許したやろ!

嫌ならその時に別れたらよかったやろが!？』

智哉はすごい形相で沙織を睨む。

黙り込む沙織。

『嫌なら今すぐ別れたらええやろ?』

オレは構わんわ!』

沙織は目に涙が溜まるが、必死でこらえる。

『……ええからもう今日は帰ってくれ……』

ほんま疲れた……』

智哉が新しい煙草の箱を引き出しから取り出す。

沙織は首を横に振る。

それを見て智哉は大きいため息を吐く。

『・・・風呂入ってくる・・・』

そう言うと、智哉は部屋を出る。

それを見届けた後、沙織は声を殺して泣いた。

風呂場で智哉は考えていた。

【・・・最近沙織と会う度に喧嘩してるな・・・】

智哉も決して沙織を嫌いなわけではなかった。

今日こそは優しくしてやろうと思いつつながら沙織に会う。

智哉も喧嘩ばかりは嫌だ。

喧嘩にならないように最大限我慢をし、努力する。

しかし、いつも智哉をイライラさせる行動や言葉ばかり、沙織に先手を打たれ、我慢できずに言い返す。

いつからこんな風になったのか、考えるがわからない。

日が経つにつれて沙織の干渉はどんどん酷くなる。

沙織も足掻いているのだろう。

それは解る。

でも、智哉は沙織の態度や言葉に我慢できない。

正直もう、好きかどうかなんて解らない・・・

最近ではかわいいとも思えなくなっていた。

【・・・潮時やな・・・】

智哉はため息をついた。

風呂から憂鬱な気持ちで出てきた智哉。

ところが部屋には沙織の姿はなかった。

【帰ったのか】

少しホツとして髪をタオルで拭いてから一服しようと、テーブルに手を伸ばす。

そこには手紙らしきものが置いてあった。

智哉はベッドに腰掛け、タオルを首に掛けてから煙草に火をつけ、二つ折りの手紙を開いた。

【智哉へ】

癖のある沙織の字だが、どうやら慌てて書いたのだろう。

少し乱雑な字だ。

智哉が解らなくなりました。

でも、それ以前にあたしは自分自身もわからなくなりました。仲良くしようと努力もしました。

でも、智哉はそれに答えてくれません。

あたしだけ頑張っても意味がありません。

それをわかってほしかった。

智哉はもう、沙織のことが嫌いですか？

とにかく今日は帰ります。

連絡待ってます。

智哉は手紙を読み終え、テーブルの上に無造作に投げた。

【何があたしばかり努力しても・・・やねん】

智哉は呆れていた。

【結局自分のことしか考えとらんやん】

・・・連絡、待ってます・・・

沙織のことだかた、手紙を読んだら智哉からすぐに電話があると思っ
っているだろう。

電話がなければおそらく沙織の方から、かけて来るだろう。

智哉は服のポケットに入ってたままの携帯を取り出し、電源を切った。

『・・・今日は色々疲れたな・・・』

智哉はそう言い、そのまま眠ってしまった。

二人の関係

あれから愛は、智哉になんと連絡しようか悩んでいた。

と言うよりも、これからどう持っていていいのが悩んでいた。

【ただの友達になる。】

【縁を切る】

【それとも智哉を落とす為に引き続き仕掛ける】

しかし、今どれだけ考えても答えは出なかった。

とりあえず相手の出方を見ようと、智哉から何かしら連絡あるのを待つ。

明後日はホワイトデー。

おそらく彼女と過ごすであろう。

明後日までになにかしら連絡があると、愛はよんでいた。

しかし、待てども待てども何の連絡もない。

もしかして、一度ヤツたことで満足し、関係を終わらせたのは智哉の方だったのか。

愛は自分が冷めたように、智哉ももう自分の事がどうでもよくなっ

たのでは？と頭をよぎる。

【・・・それだとムカつく・・・なんかあたしがやり捨てされたみたいやん・・・】

このまま自然消滅も結構だが、ヤツても友達として仲良くしようと言ったのは智哉の方。

このまま智哉の方から一度も連絡がないのはどうにも腑に落ちない。

悔しいが自分からメールをしてみようと愛は携帯を開く。

まずは出方を伺おう。

あれから、彼女にはバレなかった？（笑）

一行だけのこの文を送り、愛は携帯を閉じた。

沙織との喧嘩をした次の日、久しぶりに智哉は寝坊した。

『やつば〜〜！寝すぎた！』

智哉は飛び起き、慌てて着替える。

【あ！オレ風呂は言ってそのままあの後寝てしまったんや・・・髪乾かしてなかったからえらい爆発してるやん！】

慌ててドライヤーで髪をセットするが、なかなか寝癖がなおらない。

【あ〜も〜！】

智哉は仕方なく帽子ではねた髪を押さえ、とにかく家を出た。

【マジ？あと15分で開店の時間ヤン！】

単車に飛び乗り店へ向かう。

なんとかギリギリ店に着き、慌てて開店準備をする。

【そついや今日は沙織がシフトに入ってる日やな・・・

あいつ、昨日の今日で来るかな・・・あ！！】

ここでやっと智哉は携帯の電源を切ったままだったのを思い出した。

ポケットから携帯を取り出し携帯を起動させる。

そして新着メールを問い合わせてみた。

【新着一件】

おそらく沙織だろうと思い、メールを開く。

【あ！愛や。】

智哉は沙織からメールが一件も来ていないことに少し驚き戸惑う。

そして、昨日、愛を抱いた後で何も愛にメールをしなかった事に少し罪悪感を抱いた。

あれから彼女にバレなかった？（笑）

よかった、愛も起こっていないようだ。

これで愛からも責められてはいいい加減疲れがピークに来る。

愛からのメールを読み、智哉は少しホツとする。

【ま、返事は後でいつか】

とにかく智哉は帽子を取り急いで開店の準備をし、店を開けた。

しばらくして、智哉の体に異変が起こる。

【・・・寒い・・・寒気がする・・・】

智哉はガタガタと震えていた。

【しまったなあ・・・昨日ヤツて汗かいたまますぐに寒い外に出たからか？

それとも髪乾かさずに寝たからか・・・？】

智哉はとてつもない寒気と闘うが、自然と体が震える。

それに気付いたバイトの男の子が智哉の側に寄り

『大丈夫ですか？』

と、声をかける。

大丈夫だよ……と言いたところだが、今日ばかりはどうやらヤバイ。

これじゃあ客の前に出る事もできない。

客に酒を勧められても飲めそうもない。

手の震えも止まらない。

『いや……あんまり……大丈夫じゃない……』

智哉はなんとか答えるが、歯がガタガタなり声までも震えてうまく話せない。

店員の男の子がこれは大変だと思い

『星野さん、今日は暇だし大丈夫ですから、あがってください！』

と、智哉に言う。

あと一時間もすれば沙織も出勤してくるだろう。

『悪いけど……休憩室で横にならせてもらおうわ……何かあったら

呼びに来て・・・』

そう言い智哉は休憩室に入り倒れこむ。

とにかくその辺にある服やジャンパーを被り、横になり震える。

【あゝ寒い！熱上がってんのかぁ・・・？】

智哉は震える手で携帯を取り出しとにかく沙織にメールをする。

悪い、できるだけ早くに店に来て仕事に入ってほしい

メールを送信した後、次は愛にメールを打つ。

とにかく何かをメールしなくては愛にも責められる。

彼女は問題なし！

って言うか、寒気がする！ヤバイ！

送信した後智哉は携帯を置き、その後もジャンパーに包まり、ガタガタ震えた。

その後、携帯に一件のメールが受信される。

え！？大丈夫なん！？

愛からのメールだが、それに返信する元気は智哉には残っていないかった。

『何やってんの』

しばらく時間が経ち、芋虫のように丸まる智哉の前に沙織が立っていた。

『や・・・やばいくらい寒くて・・・』

智哉は沙織を見てカタカタ歯を鳴らしながら答えた。

『とにかく今日は帰れば？店の鍵、どこ？』

沙織は冷たく言い放つ。

智哉はロッカーの中にかけてある自分の上着を指差し

『ポケット・・・』

と答える。

沙織は智哉の上着のポケットを探り鍵を取り出し、休憩室の入り口に向かい

『明日の夕方、部屋行くから早く帰って今日は早く寝なよ』
と言い、休憩室を出た。

今日は沙織に店を任せて大人しく智哉は家に帰る事にした。

なんとか家にたどり着き、部屋に入るや否やベッドに倒れこみ智哉は眠った。

~~~~~

~~~~~

着メロが部屋に鳴り響く。

智哉は布団に入ったままベッドの下に転がる携帯に手を伸ばす。

『……はい……』

目を閉じたまま携帯に出る。

『あかし、愛やけど』

智哉はぼんやりする頭で

『あぁ、おはよ……』

と答えた後、部屋の時計を見る。

昼の二時を回っていた。

『ごめんね、起こした？』

愛は少し申し訳なさそうに聞く。

『いや・・・大丈夫・・・』

智哉はまた目を閉じ、うつぶせになり携帯を耳に当てる。

『昨日のメール大丈夫なん？』

愛に聞かれ、やっと自分が昨日体調不良によりダウンし、意識朦朧のまま部屋にたどり着き地力尽きて眠ってしまったことを思い出す。

『あ・・・うん、大丈夫・・・今はなんともない・・・』

智哉は寒気も治まり震えも止まっていることに気付く。

『無理したらあかんよ、病院には行かんのか？』

なにやら愛は本気で心配しているようだ。

『めんどくさいやん・・・』

智哉は答える。

愛は少し笑った。

『智哉らしい・・・あれからメール途絶えるからマジに心配したやん』

電話に出た智哉の声に少しホッとしたようだ。

『ありがとう、大丈夫やで』

智哉はやっと起き上がる。

少し頭痛がするが昨日に比べてだいぶ体が楽になっていた。

『無理はしたらあかんよ？彼女は？』

愛はまだ少し心配そうだ。

『あゝ・・・今日の夕方来るんちゃう・・・？』

昨日は言ったとおり沙織は来なかった事に智哉は気付く。

部屋に来た形跡がない。

『ちゃんと彼女に看病してもらっちゃんやで』

愛の言葉に「昨日の沙織との喧嘩を思い出す。

まだ沙織の手紙がテーブルの上にあった。

『あゝ・・・わかった、心配かけてごめんな』

智哉は手紙を手に取り机の引き出しにしまいこんだ。

『起こしたみたいでごめんね、またメールするし今からまた仕事までゆっくり寝てね』

愛は言う。

『わかった・・・じゃあ・・・』

智哉が答える。

『うん、じゃあね。』

愛がそういうと、電話が切れた。

そして、間もなくして沙織が智哉の部屋に来た。

しかし、智哉は電話を切った後もう一度ベッドに横たわり、知らないうちに寝てしまっていたので、沙織が来た事には気付かなかった。

電話を切った後、愛はシナリオを考えていた。

そう、愛は智哉を落とすために先に進もうと決めていた。

諦めかけたがこのままではやっぱり悔しい。

セックスをした途端、諦めてしまおうとやはり女の立場からすると【

負け】になる。

それだけは愛にとっては許せなかった。

愛の次の作戦は

【あたしはキミだけのもの作戦】

これは失敗してしまえばただの重たい存在になってしまう。

しかし、うまくいけば、ぐんと距離は縮まる。

先ほどの電話で【彼女に看病してもらうんだよ】と言った言葉には意味がある。

違う風にとれば【あたしより彼女が一番でしょ、あたしは彼女から貴方を奪うつもりなんて全く無いわよ】と、言っている。

こうして愛の重たさを軽減させる。

しかし、この作戦を実行にうつすにあたっては、一つの問題があった。

今二人の関係は、約束どおり、一度セックスしたただけの関係。

言い換えれば約束どおり、愛を抱いてあげた智哉は、ここで関係が終わったと思っっているだろう。

しかし、一回エッチしたが、終わらせないには、重たくない程度に

二人の関係を続けたいと言う意思を伝えなくてはならない。

男は自分に害を及ぼす心配の無い女だと、暇つぶしに体の関係を持てる女、所謂【セフレ】としてポジションを与えたがる。

それを利用しようとした。

少女としてのプライドが許さないが、今回失敗してしまった愛にとってはやむを得ない。

しかも、智哉は都合のいいことに、独占欲がハンパじゃない。

店で潰れてしまった愛が、ふと口に出してしまった【ヒロ】の存在。

それに対して確かに演技ではなく、一瞬機嫌が悪くなり

【浮気癖のある女だけは付き合いたくないわ】

と、嫌味までも吐いた智哉。

自分にメロメロだと思い込んでいた女が、他の男とも関係がある、それだけで怒りを覚える智哉は、よほど自分に自信があり、悔しい出来事なのだ。

自分に都合のいい女が、自分の彼女との仲を壊そうともせずに、しかも自分にゾッコン。

彼にとっては最高に気分が満たされる事だ。

愛はそんな智哉の性質を見逃さなかった。

これを最大限利用する。

愛はこの作戦に進みだした。

二人の関係を良い方向に転がす為に・・・。

あなただけのあたしでいたい

メールを受信した。

今日は電話ありがとう

愛は優しいな。

智哉からのメールだ。

【作戦開始】

愛の頭の中でゴングが鳴る。

第何ラウンド目であろう？

久しぶりに男を落とすので勘が鈍っているのか、ここまでかなりの失敗をしてきた。

もう失敗はできない。

愛の恋愛感情に近い思いも、先日のセックスで吹き飛んだ。

よし、今からが本勝負だ。

愛はメールに返信をする。

体調はもう大丈夫？

彼女には優しく看病してもらった？

愛はとりあえずこつ、送信した。

今日は彼女がシフトに入っていない日のはず。

店も平日のこの時間なら暇なはず。

おそらくすぐに返事は来るだろう。

思ったとおり5分後、すぐに返事が来た。

女、あの電話の後すぐに来たよ。

オレ、寝てたから気付かなかったけど・・・

ホワイトデーだから来たんだってさ（笑）

愛はあの日帰って旦那には何も言われなかった？

智哉からの【？】付きのメールが来た。

【よし、こじだ】

愛は智哉にすぐさま返事を打つ。

あはは（＾ ｾ）

彼女、面白いなあ。

旦那は大丈夫だったんだけどね。

・・・あたし、智哉に言いたい事あるんだ。

メールじゃあ言いたくないから、また時間ある時に電話で言うわ。

よし、これでよし。

見てろ。

すぐに電話がかかってくる。

きっとこのメールを読んだ智哉は何か気になって、店が暇な今、すぐに電話をかけてくる。

もしかしてセックスしたことで何か問題がおきてるんじゃないかと、不安になり、かけてくるはず。

そして、順調に愛の思惑通り、愛の携帯に着信が入る。

ここで失敗はできない、演技力がものを言う。

『はい？智哉？』

どうしたん・・・仕事中に・・・』

白々しい、実に白々しい。

『いや、今店、暇やし何か言いたい事ありそうやったし・・・
何やったん？』

智哉は少し不安そうだ。

愛のシナリオどおりに動いてくれる智哉。

有難い。

ここで愛は躊躇なく一気に答える。

『あたしさ、智哉以外の男と全部、切ったよ』

智哉の思惑

愛が智哉と電話する前

智哉は店で、愛のことを考えていた。

【この女、沙織みたいに束縛とかしないし、楽やな・・・
やったからって彼女面しないし・・・

一回だけはもったいなかったかもしれないなあ・・・】

愛の割と淡泊なメールや、しつこさのないメールに智哉は警戒をだ
いぶ解いていた。

【でもな・・・最初に警戒して一回だけって言ってしまったしな・・・

今更、やっぱり続けよう、なんて言っても、

愛だつて流石に利用されてるって気付くよな・・・】

智哉はなんとかならないものかと頭を悩ませた。

【あゝ！

一回だけなんて言うんじゃないか！

失敗した！

・・・まあとにかく、今日は心配してくれてたし、お礼のメール
でもしとくか・・・】

智哉は愛とのメール交換をして、愛の思惑の【電話で話す】の内容
を見て考えた。

【お！？もしかして、愛の方からお願いか！？】

智哉はラッキーと言う感じですがすぐに電話をかけた。

そして、考えていた内容の話ではなく、いきなり言われた

【智哉以外の男と、切ったよ】

という言葉に、答えに困ってしまふ。

【・・・え？どういう意味？】

そういえばアイツ、オレ以外に夜遊びする男がいるって言ったな・・・

そいつの事か・・・？

でもなんだいきなり・・・？

もしかしてこいつもヤツた途端、彼女面か・・・？

しかもさっき心配してきた電話の中では何にも言っていなかったのに・・・】

智哉は頭の中で必死に考えた。

『えっ・・・？』

智哉はこれだけを口にするのが精一杯だった。

『ごめんね、言ってなかったの。』

愛が続ける言葉にただ聞き入る。

『あたしさあ、他にも遊びの男、何人かいたんだよね。』

【おいおい、最低な女だな・・・】

智哉は少しムツとした。

『・・・はあ・・・で?』

明らかに機嫌の悪い声で智哉が答える。

しかし愛は淡淡と話続ける。

『あたしが潰れたあの日さ、あたし、つい、言っちゃったよね。

智哉以外に遊んだりする男いるって』

【ああ、言ってたよ、知ってるよ】

智哉は心の中で答えながらだんだんイライラしてきた。

『・・・んなこと言ってた・・・?』

智哉は忘れたフリをした。

『覚えてるくせに、智哉相当機嫌悪くなってたやん!』

【なんだ?この女、おちよくってんのか・・・?】

智哉は黙る。

愛は続けて話す。

『でさ、あの日、あたし智哉とヤツちやっただやん？

でね、思ってしまった。』

智哉は相変わらず黙って聞いていた。

『あれだけで終わるの、あたし、嫌や。』

【は・・・？どういう意味よ？

それと他の男と何が関係する？

もしかしてオレと本気で付き合いたいとか？

うわ〜・・・そうだとしたらめんどくせえ・・・】

智哉は頭が混乱していた。

しかし、次に愛が口にした言葉は智哉の想像したものとは全く逆のものだった。

『智哉知っちゃうと、他の男がつまんないわ。

あたし、浮気相手、智哉だけで十分楽しめる。

あたしにセフレでいいから智哉の浮気相手のうちの一人ってポジ
ション

頂戴！！』

『はいい???』

智哉は思わず声が大きくなる。

こんな変なこと言う女、初めてだ。

やっぱりヤツっちまったら最終的には自分だけのものにしようとしてくる女ばかり。

【何だ？この変な女・・・既婚だからか・・・？】

『あはは、何ていう声出してんの智哉！』

セフレって言葉はなんかいやだなあ・・・
体の関係がある親友？

現実とは違う裏の恋人・・・？』

愛は楽しそうに話す。

『・・・って言うか、そんなんでいいの・・・？』

智哉は愛に聞く。

『って言うか、そんなんがいいの。』

智哉と彼女の関係潰す気なんて全くないし、あたしも家庭壊す気ないし。

ただドキドキしたり、わくわくしたり、疑似恋愛楽しみたいの。
智哉はそれを私にくれるから』

智哉はそれを聞いて力が抜けて、笑った。

『愛、お前、おもしろいな。』

愛も笑う。

『そう？』

でもさ、浮気だからスリルもあって燃えるんやん？

智哉すっごいカッコいいし、智哉の本命の彼女だとあたし心配できっと潰れちゃう。

でもさ、あたし、今日那以外では、智哉だけの女だよ。

あたす、智哉以外の男なんか目に入んない』

【結構可愛い事も言うじゃない。

確かに浮気相手だからこそ重たくないし、喧嘩もしないで済む。

しかも、沙織に少し疲れてる今なら、愛と過ごすと気分転換になり新鮮な気持ちになれる、

こんなふうに分り切ってる愛ならオレを自分だけの物とか

ややこしいことは言わなさそうだ。】

愛は続けて話をする。

『ねえ、智哉、あたしを好きにしていよいよ』

智哉は少しドキッとした。

最近では沙織にもドキッとなんかしてないのに。

智哉は小さく頷いて、愛に言った。

『わかった、今日から愛は、オレの裏の女、な。』

楽しかな、疑似恋愛

【よっしゃっ！】

電話を切った後、愛はガッツポーズ。

大成功だ。

智哉に浮気相手だとは言え、自分の女であるを意識させることに成功した。

これで、どんっどん疑似恋愛をして自分の女だと言っことをもっともっと意識させる。

そのうちに、疑似だかなんだかイマイチ見分けがつきにくくなる瞬間がかならず訪れる。

次はその時を待つ。

こんなにうまくいくなんて！

愛はわくわくしていた。

しかも、なんだか疑似恋愛も少し楽しみだ。

愛もどうせなら疑似恋愛を楽しもうと思っていた。

その頃、智哉は電話を切り、一人クスクス笑っていた。

【それにしても、変な女……】

誰もいないことをいいことに、こっそり店の酒を一杯飲んだ。

【でもまあ、今まで色々浮気もしたけど、やっぱり嘘ついたりしんどくて面倒くさくて……】

それに比べて愛は、隠し事や嘘もなく付き合っていけるなんて、めっちゃ楽そうやん】

智哉は楽しくて仕方なかった。

【あとはうまく沙織にだけはバレずにいくことやなあ……】

まあ、それは今までも同じか】

智哉は今繋がってるほかの女を携帯のメモリーを見ながらぼーっと考えていた。

【この際、面倒くさめの女、切ってしまおうか。

愛はしばらく楽しめそうだし】

そして、数名の女からの着信と、メール受信を拒否設定にした。

【次はいつ会う……かな】

智哉は久しぶりに特定の女に

【会いたいな】

と言っ感情を持っていた。

そして、頭の中の半分の場所が、愛で埋まっていることにまだ気付いていなかった。

嫉妬

愛は綾に電話していた。

『ってな訳でさあ、また近々見せ行かん？』

愛はある程度の経過を話した。

『その話はアキラには言わないほうがいいね。』

綾はあれからいい感じにアキラと続いていた。

『うん、そだね、今は言わないで欲しいかな』

愛と綾は口裏を合わせる。

『了解。久々にアキラに会えるの楽しみだし！』

綾にはアキラを呼ぶようにお願いした。

『でさー、綾、お願いがあるんだけどさ・・・』

愛が言つた、

『何々？』

と、綾もノリ良く聞き返す。

『うまい事言ってるさ、アキラにもう一人、男呼んでもらってくれな

い？』

思ってもないお願いに

『え？！なんで！？』

と、答える綾。

『うん、ちよつと作戦。』

智哉の知り合いでも知り合いじゃなくてもいいからさ。』

綾はとりあえず

『わかった・・・頼んでみるよ。』

といった。

『ありはとう、アキラと綾が話していると愛が寂しそつだから話相手呼んであげて〜とでも』

何とでも言っつていいから！』

愛が大げさに喜ぶフリをする。

『わかったわかった〜。』

綾が答える。

『それとさあぁ・・・』

愛がまた何かを言いかける。

『何！？まだなんかあんの！？』

綾が大きな声で言う。

『アハハ、違う違う、店に行く日なんだけど、火曜か木曜か土曜がいいんだけど』

愛が言うとすぐに綾が聞き返してきた。

『え？その曜日って彼女いてる日じゃないん？』

その通りだ。

愛はどうしてもその日は智哉が会いに話しかけにくい状況を作りたかった。

『うん、そうなんだけど』

愛が答える。

『いいけど・・・まさか愛・・・めっちゃ酷いこと考えてへん？』

綾が恐る恐る聞く。

『あはは、そうかも』

愛が答える。

『智哉君、めっちゃ怒るんやない？』

まして智哉君の友達だったら・・・』

綾は愛の作戦に気がついたようだ。

『怒られる筋合いはないし・・・まあ当日・・・ね。』

愛が話を折る。

『え〜？まあそうだけど・・・知らないよ？』

綾は少し心配そうに言う。

『綾には迷惑かけないよ。』

空いてる日決まったら教えてね。』

そう言って電話を切った。

【オレの女】

と言われてからも、愛は智哉と楽しくメールのやり取りや、電話での会話をしていた。

早く会いたいね

今度はゆっくり二人で過ごしたいね

「ご飯でも食べに行こうか？」

普通のカップルと何ら変わりのないやり取り。

冗談半分【浮気したらダメだよ】なんて話もした。

時には彼女との仲を相談にのったり、旦那との生活の不満を語ったり、お互い仲のよい友達のような関係になったりもした。

二人の仲は確実に縮まっていった。

智哉が彼女とあまりうまくいっていないことも、愛は知っていた。

しかし、愛は親身になり相談にのった。

【少し会いすぎなんだよ】

【今が山場なんだよ】

沢山の言葉をかける。

勿論、別れをすすめることだけはしなかった。

智哉にはもう、彼女に対して【愛情】と言つものがないことに、愛は気付いていた。

しかし、その事は決して口に出さなかった。

彼女にはもう少し智哉に嫌な思いをさせる役目を果たして欲しかった。

彼女が智哉を怒らせれば怒らせるほど、智哉は愛を頼ってくる。

彼女が智哉にとって、嫌な女になればなるほど、愛がイイ女に見えるてくる。

愛は彼女に、頑張つて智哉を怒らせると応援する。

そして当日。

『ごめんね、綾やアキラが時間合わなくて、彼女シフトに入ってる日しか無理だった』

智哉にはこう伝えてあった。

『しょうがないよ、顔見れるだけでも嬉しいし』

こんな返事が返ってきた。

愛はなぜか少しだけ心が痛んだ。

しかしすぐに、この巧みな言葉も智哉にとっては女の子を喜ばせる技だと思いきむ。

『智哉、上手いね』

そんな言葉を返してごまかした。

そして、いざ、出陣。

今日はお酒を飲む為に電車で店に向かっていた。

酔った勢い酔ったフリも重要になる作戦。

智哉の好きなミニスカートをはいて、愛は店に向かった。

愛が店につくと店の前にはちょうど綾とアキラと、もう一人の男が見せに入ろうとしていた。

『あ、愛だ〜〜!』

綾が愛に気付き大きく手を振る。

愛も小さく手を振り綾たちの元まで急ぐ。

『どうも・・・って・・・あれ!?!』

アキラの横に立つ男が愛に話しかけたが、顔を見て、言葉に詰まる。

『愛・・・って、愛ちゃん?』

愛は【?????】と言う顔をする。

『俺やん！って覚えてないかあ。』

山本、ヒデともつるんでた！』

愛はしばらく考え

『あ……なんかいたような気がする……』

と、答えた。

10年前、みんなで何度か遊んでた時に何度かしゃべった事のある男だった。

『うそ〜？覚えてへんやろ〜？』

山本は笑いながら言う。

『いや、覚えてるって！名前までは覚えてなかったけど……』

愛が少し申し訳なさそうに答えた。

『うっわ〜、悲しい〜〜』

山本は笑う。

そして四人は店に入る。

『いらっしや……あれ？山本……』

智哉が少し驚く。

『お、アキラに可愛い女の子来るから来いって言われて来たら、何や愛ちゃんやん〜。』

山本が答えた。

『そうなんや・・・ま、どうぞ』

智哉が愛の方を少し見てから、席に案内する。

『智哉、お前愛ちゃんといつ再会してん〜！
オレのこと知っててなんで言わんねん〜』

山本が智哉に言う。

するとアキラがそれに答えた。

『え？もしかして山本が言った忘れられないキミって愛ちゃんのこと〜。』

愛は【えっ！？】っと言う顔をする。

『おいおい、いきなり言うか〜？恥しいやん』

山本は笑う。

『お前に言ったら会わせるってうるさいやろ〜。』

智哉がメニューを出しながら答え、愛をチラッと見た。

『そりゃそうやる？運命感じるやん？あ、俺ビールね』

山本が冗談混じりに言いながら笑う。

愛も笑っているが、内心これはおもしろいと考えていた。

『こいつ、意地悪くねえ？』

山本がアキラに言う。

『だって智哉は女は全部自分のもんやと思ってるから』

アキラは智哉を指差し答えた。

『愛ちゃん、コイツ、智哉だけはやめときや〜。』

やることめちゃくちややし、女癖悪いし、この10年ホンマえらいことなってるやで』

山本が愛に向かい言う。

『おい、山本、いらんこと言うなや。』

愛、綾ちゃん、何飲む？』

智哉は愛に何かを言いたそうにしている。

『あたしキール〜』

綾が答えた。

『じゃ、あたしミモザ』

愛が答えるなり智哉が言う。

『今日はずぶれんなよ』

愛はイーッとしてみせた。

『何やねん！オレの前でラブラブすんなや！』

智哉、もうすぐ愛しの沙織ちゃん来るやろ？

チクるぞー！』

山本が智哉を追い払う手振りをする。

智哉が笑いながら酒を作り、4人の側を離れた。

それを見送り山本は

『結婚したんやって？』

と、先ほどまでのテンションから一気に落ち着いた話し方で愛に話しかけた。

『うん、3年前に』

愛は山本の方を向き答えた。

山本の肩越しに綾とアキラが楽しそうに話しているのが見えた。

『子供は？』

山本が聞く。

『一人いるよ』

愛は笑顔で答える。

『幸せ？』

山本が続けて聞いてくる。

『まあまあかな……。』

愛は答える。

まあまあ……。愛が常日頃考える幸せ……

愛が心から幸せと感じたのはいつだっただろう。

結婚した時？

子供が生まれた時？

確かに些細な幸せや小さな幸せ、常に感じている幸せ、そういうのであれば沢山感じてる。

しかし、感極まり、瞬間的だが脳内麻薬が多量に分泌され、声にもならない叫びにも似た歓喜の声を上げ、心から湧き出る喜び、そういう幸せは産まれてこの方、愛は経験したことがなかった。

高校野球で優勝をした球児が、喜びに叫び泣く。

出産の瞬間、我が子を抱いた瞬間、感動に声にもならない喜びに涙を流す。

恋愛ドラマで大好きな人と相思相愛になった瞬間、主人公は彼の胸に飛び込み幸せに涙する。

愛はそれを【うそ臭い】と感じていた。

学生時代、部活もしていた。

もちろん喜びもあつたが、そこまで打ち込んでいたわけではなかった。愛は涙を流す程ではなかった。

出産の時、確かに感動はしたが、妊娠期間にくたびれていた愛は、やっと終わった妊娠期間とサヨナラできる喜びが多く、母性を感じたのは2日後の初授乳の時だったので涙を流すことはなかった。

もちろん、幸せに涙を流す程の恋愛なんて一度も経験していなかった。

『あかし、感動薄いのかな？』

急にそう言った愛に山本は

『なに？いきなり〜』

と、笑った。

『なんでもない!』

そう言い愛も笑った。

しばらくして店に智哉の後輩の修が来た。

『おゝ 修〜〜!』

山本が大きな声で修を呼ぶ。

山本にとっても修は後輩だ。

修が山本の側まで来て

『あれ? 智哉は?』

と、聞く。

『わからん、どっか行った、修は今日はここでバイト?』

山本が修の胸ポケットから煙草を取り出しながら答えた。

『山ちゃん、ラス1! やめて〜や〜』

今日は暇だけど俺も飲みに来ただけ』

そういうと、修は愛の隣に座る。

『ども! 何度か店に来てるよね? 不良人妻さん!』

修が愛に話しかける。

『はい、何度か』

愛は修をみてこたえた。

『あ、オレ、智哉の後輩ね、態度のでっかい後輩で有名な修
キミの事はたまに智哉から聞いている。』

愛は修がどこまで知ってるのかわからないので、笑いながらうまく
ごまかす。

『どうせロクなことじゃないんでしょ？』

愛は笑いながら聞く。

『ロクでもないのは智哉だよ、あ、オレもか！』

修は笑いながら智哉を目で探す。

『お前が一番ロクでもないわ！』

山本が愛をはさみ、修の肩にパンチする。

『アハハ！山ちゃんなんか毎週土曜日になると一人で店に来て酒力
ツ喰らって

ロクでもねえよ』

修は肩に当たった山本の手を押しつけながら笑う。

『あ、沙織ちゃんだ、出勤時間だな。』

山本がカウンター入り口付近を指差し言う。

愛と修は指差す方向を見た。

沙織は長い髪を後ろに束ねようと、髪を手でときながらまとめている。

そこに智哉が厨房から出てきて沙織に何か話をしている。

沙織は智哉の話を聞き、少し笑う。

『なんや、愚痴ばかり言うところくせに、仲良しこよしやってるやん。』

修が智哉達を見て言う。

すると沙織がこちらを向き、手を振る。

それに答えるかのように山本と修が手を振る。

『あ、沙織ちゃん、小学校からの俺の同級生やねん』

修が笑顔で手を振りながら愛に話す。

愛は沙織は一つ年下だと、智哉から聞いていたが

『そうなんだ』

と、知らないフリをした。

すると、智哉がまた、厨房に入り、沙織がこちらに向かい歩いてきた。

『沙織ちゃん、おはよ』

修が言うと沙織は笑いながら

『おはよ、今日は山本君とアキラ君とのみにきたの？』

と、聞き返し、愛の方をチラッと見た。

それに気付いたアキラが沙織に手を軽く挙げる。

綾は愛を見ていた。

『どうも、こんにちは、高橋です。』

愛は沙織にペコリと頭を下げた。

沙織は一瞬ハツとした顔をしたが、つられるように頭を下げた。

『話は智哉から聞いてるよ、可愛い彼女がいるって』

愛は続けて沙織に話しかけると、沙織は少し口元が緩み、笑顔が出る。

『そうですか、今日は山本君と修君とデートですか？』

沙織が愛に敬語で話す。

『そんなもんかな』

愛は山本に笑いかける。

『俺が昔好きやった女やねん』

山本が間をおく事無く沙織に言った。

『そうなんだ』

沙織が大きく笑う。

そして

『じゅっくり』

といい、沙織は去っていく。

愛は彼女の余裕な態度に少し驚いた。

智哉からの話を聞いている限りでは、おそらく女と言っただけで機嫌が悪くなるか、無視するか、そう思っていた。

山本達がいだからだろうか？

その後愛は、修と山本と話しながらお酒を楽しんだ。

沙織はあれから話しにかけてくることはなかった。

智哉はというと、どうやら山本と愛を気にしてはいるようだが、チラチラ二人を横目で見るだけで、常に智哉の行動を目で追ってる沙織を意識し、愛たちの側にあまり寄る事はなかった。

時々注文を聞くフリをして愛の前に現れるが、山本と修の目もあり、余計な事は話せなかった。

しかし、愛は智哉がいない時に、だんだん酔いがまわりだした山本に、冗談とも本気ともとれないアプローチをされていた。

『一回でいいから二人で飯行こうや!』

『俺に愛ちゃんとの思い出をくれ』

修もそれを面白半分笑いながら見ていた。

そんなふうにしらべに話す三人を智哉は離れた場所から見ていた。

【もっと見る、もっと見る】

愛は心の中で思っていた。

時が経ち、愛はそろそろ帰ろうと席を立つ。

『もう帰んの!?!』

山本が愛を見て言う。

『もう10時半回ったし』

愛が笑顔で答えた。

『まだ10時半・・・あ、そっか、旦那怒るわなあ・・・』

ふと愛は智哉の方を見ると、智哉も愛を見ていたが、ふっと目をそらす。

『ねえ、愛ちゃん、メルアド教えてよ。』

山本が自分の携帯を取り出し、二人はメルアドを交換する。

おそらく智哉はこの行為を見ているだろう。

『俺土曜日はこの店にだいたい毎週来てるからさ、来れるとき来て

』

山本が携帯に目をやりながら少し照れくさそうに言う。

『なに？俺が邪魔やった訳？』

修が笑いながら言う。

『そーだよ！』

山本が間髪いれず答えると大きな声で修が笑う。

綾が

『今日はもう少しいるわ〜、ごめんね』

と言つので、愛はオッケーと、手で伝える。

『修、俺愛ちゃん駅まで送ってくるわ』

そう言つと、山本も席を立つ。

レジのところには智哉が立っていた。

レジを打つとすると、山本が慌てて言う。

『あ、いい、いい、愛ちゃん分、俺につけといてよ』

と言った。

『あつそ。』

智哉は無愛想に答えると、ボタンとレジを強めに閉めた。

『智哉、またね』

愛が手を振ると智哉は軽くてをあげた。

愛が店を出て、続いて山本と一緒に店を出ようとしたとき、

『山本、お前どこ行くねん』

と、智哉が呼び止める。

『夜遅いから益まで送ってくるよ、心配すんな！
食い逃げなんかしないから！』

そう言い山本は手を振り愛と一緒に店を出た。

それを影から見ていた修が、智哉の後ろに立つ。

『智ちゃ〜ん、何妬いてんの？』

修が智哉の耳元でニヤニヤしながら言う。

『んな訳ないやん』

智哉が修を【どけ】と言わんばかりに突き飛ばした。

『アハハ、あのままだと山ちゃんに持ってかれちゃうねえ』

修は笑う。

智哉は黙っていた。

『山ちゃんは智哉と違ってとつても素直だから〜』

修がニヤニヤしながら話す。

そして智哉は客に呼ばれ、修の方を見ず、返事もせず、無言でカウンターに入ってしまった。

15分後、店に戻ってきた山本。

15分と言う時間が、駅まで送り、帰ってくるまでの妥当な時間だった為、二人には何も無く本当に送ってきただけだと思った智哉は、少し安堵の表情を見せた。

そんな智哉を見て、修は影から笑っていた。

怒り

山本とえらく楽しそうやったな（；――）

家に帰り、沙織の目を盗み、智哉は愛にすぐこんなメールを送った。

普段であれば、沙織がいるときは女にメール等絶対に打たない智哉だが、今日ばかりは何かを言いたくてしかたなかった。

【こんな嫌味くらいしか打てない・・・か・・・】

文末に入れた顔文字。

入れるか入れないか大分悩んだ智哉。

結局入れた理由は碇を隠す為。

怒りをあらわにするのは、今の愛との関係では格好悪すぎる。

智哉はこのメールが精一杯だった。

【男好きめ】

智哉は自分が他の女を褒めたり手を出す事には何の罪悪感もないが、自分の事を好きだと思ってる女や、例え浮気相手だろうが、自分以外の男に目を向けられる事が、プライドに傷がつくのか、死ぬほど嫌っていた。

【あゝなんか腹立つ！】

ちよつとでもそんなそぶりが見えたものなら、智哉は迷い無く、瞬時にその時からその女を

【あの女、誰だっけ？俺、あんな女知らないし、関わったこともねえし】

と言う存在に置き換える。

たとえそれが本命の彼女であろうと、浮気相手だろうと、自分に一度告白してきた女だろうと、関係ない。

自分を男の事でイライラさせる女など要らないのだ。

そんな女にしがみつかなくても、いくらでも自分を想う女はいる。

【でもまあ・・・今日は沙織もいたし、俺も相手してやれなかったしな】

山本が自分の友達だと言うこともあり、今回は我慢することにした。

間もなく愛から返事が来た。

今日はありがとう

今日は思ったとおりあまり話す事できなかったね。

だから山本君や修君と話すのしかなくて。
でも、昔恋されてたなんてびっくり！
嬉しいもんだね。（笑）

妬いちゃった？（笑）
ごめんね。
また遊びに行くね。

【妬くか、アホ】

智哉は笑う。

寂しかった

愛の言葉は嘘っぽさのある表現だが、少し嬉しかった。

妬いた（＝＝）
少しだけね（笑）
あいつ、昔ヒデがいなかったら〜ってずっと言ってたからな。
今の俺らの関係を言つと泣くだろうな。（笑）
また遊びにおいで。
抱きしめるくらいは隙を見てするから！
女がそろそろコンビニから帰るから、またメールするわ！

智哉はメールを送信した後、携帯にロックをかけ、ポケットにしま

った。

【まあ愛も人妻だし、あんな山本みたいな重ための男なんか本気で相手しないだろう】

智哉はイライラが少し吹き飛んだ。

【智哉、怒ってんの、バレバレ】

愛は携帯を閉じて笑う。

今日の帰りしなの智也の態度に、話し方、表情をみて、あれで怒っていないなんて言えたもんじゃないと、愛は可笑しくて笑えてきた。

【プライド高いのか、怒っていないフリして・・・】

彼女いる夜にメールしてくるなんて、よっぽどなくせに】

愛は可笑しくて仕方なかった。

【でも、問題は次・・・】

そして愛は携帯を再び開き、メール画面を開く。

送り先は、山本だ。

お疲れ様！

今日は送ってくれてありがとうね。
楽しかったね。

ところで来週の土曜日、時間作れそうだから智哉の店に行くよ。

ただ、一緒に行く人いないから一緒に行かない？

すぐに山本からのメールが届く。

もちろん！喜んで！！ (^ ^)

今までに無い感情

愛と山本は駅で待ち合わせをしていた。

『愛ちゃん〜〜!』

愛が駅をでるとすでに山本は待っていた。

『うわ〜、めっちゃ嬉しい〜!』

愛を見て第一言目がこの言葉。

『何言ってるの〜山本君』

愛は笑う。

二人は楽しそうに店に向かい歩き出す。

愛のシナリオは出来上がっていた。

今日、急に山本と二人で店に来た愛に、智哉はきつととんでもなく驚くだろう。

しかも、1週間前に来たばかりで、かなりのハイペースで店に来る。

しかも、相手は山本だ。

今日は土曜日だが、智哉の彼女は用事でシフトに入っていないこと

を以前聞いていたので、今日を言う日を選んだ。

智哉は常に二人の前に立つてであろう。

そこに、この一週間、愛が一生懸命メールで気分を高めておいた山本が、嬉しそうに愛との話を智哉にするであろう。

智哉はプライドが邪魔をして、決して二人の前では感情的な言葉等出さないに決まってる。

帰り際、山本と愛が楽しそうに店を出るのをどんな顔で智哉は送り出すだろう。

その表情を愛はきつちり見逃さずに見極め、帰ってからすぐに智哉に電話をして、怒りを抑えながらも抑えきれない智哉に、愛は謝りながら少し涙声で訴えるつもりだ。

【智哉に嫉妬してもらいたかったと。

智哉はきつと一気に愛を意識するだろう。

この前店に行った時の智哉の態度やその後のメール。

智哉のプライドが邪魔をするなら、2度目の今回は、きつと智哉も感情的になり本音を吐くに違いない。

愛は今日で一気にどちらかに転ぶ事を予想し、ドキドキワクワク、そして、少しの不安を抱いて店に向かう。

【智哉が怒りもせず冷静だったりすれば、もうあたしの負けだな。前回きつちり嫉妬してくれてたから、それは無いとは思うけど・・・】

しかし、結果は合いにとっては想像すらつかない結果となった。

店に入ると、思ったとおりの反応をしてくれた智哉。

席に着くと、思ったとおりに山本が愛と今イイカンジなんだと言う話を沢山智哉にしてくれる。

智哉は思ったとおりに、苦笑いをしながら

『うん、へー、そう。』

と、答えるだけ。

たまに愛の方を見るが、亜今日は会いは智哉とは目を合わさない。

合っても笑いかければいいと思っていたが、少し愛は胸が痛くて目が見れない。

そーっと智哉を見たときに、怒りのような、切ないような、なんとも言えない表情で、山本の話の聞く智哉の顔を見てしまったから

か。

この顔も智哉にとっては演技なのか……。

愛は山本が嬉しそうに話をする隣で、ただし俯き、作り笑いをする。

山本が一通り話を終わると愛に向かって声をかけた。

『早めに店出てさ、違う店に行かない？』

嬉しそうに愛を見る。

『え？あ……うん。』

愛にとっては予想外の事だったが、ここで断つては智哉を怒らしきれないと思い、同意する。

『ここじゃ智哉いるし、二人つきりになれんしな〜！』

山本が智哉を見て言う。

智哉はいつものノリであれば

【悪かったな〜！】

と、茶化すように答えるはずだが

『……じゃあチェックするわ……』

と、無愛想に言い、レジに向かい歩き出した。

そんな智哉の様子が少しおかしいと思ったのか、山本は顔を傾けたが、なんせ今日は大好きだった愛とのデートだ、深く考えず、

『さ、愛ちゃん、行こう！』

と、愛の手を引いた。

きっと今夜の電話で智哉は愛にこの後どうしたのかと、執拗に聞き、責めてくるだろう。

愛はシナリオどおりに行く事に喜ぶべきだったが、何故かあまり、嬉しくなかった。

『山本君、ちょっとお手洗い・・・』

愛が咄嗟に山本に言った。

『わかった、会計済ませて待ってるから』

山本は足早で会計に向かう。

愛はトイレに入り、鏡を見ながら考えた。

ここから携帯で智哉にメールをして謝ろうか・・・

この後山本に行くのを断るから・・・と伝えようか・・・。

しかし、自分で組んだシナリオを自分で潰してしまう結果になる・・・

でも、なんだか今回は気が進まない。

なんだかとんでもなく嫌な予感がする。

もしかしたらさっきの勢いで智哉が怒ったら、二度と取り返しがつかず、会うこともなくなってしまうかもしれない……。

愛は携帯を開いたり閉じたりしていた。

その瞬間、ふと、10年前の智哉と出会った日の事が頭の中でフラッシュバックした。

【何！？なんで……？】

愛は胸がぎゅーっと締め付けられる思いをした。

理由は全くわからない。

ただ、フラッシュバックした瞬間、息ができないくらい、胸が苦しくなった。

愛に向け、一度だけ笑顔を見せた、10年前のあの時の智哉の顔が、愛のシナリオを崩してしまえと、背中を押す。

愛は携帯を開き、宛先を智哉に合わせた・・・。

コンコンコン コンコンコン

その時、誰かがトイレのドアを叩く。

『大丈夫か～～！？お～～い！』

智哉の声？

違う。

山本？

いや、違う。

愛は慌てて携帯を閉じて、トイレを出た。

そこに立っていたのは、今日バイトに入っていた修の姿だった。

勢い良く飛び出してきた愛に少しびっくりした修が

『大丈夫？便所、遅いから・・・』

と聞く。

『あ、山本ならレジのところで誰かに電話してるけど・・・』

きよろきよろする愛に修は答えた。

『あ・・・ごめんね。大丈夫』

愛が修に言う。

なんだか不安そうな。今にも泣き出しそうな愛を見て、修は愛がおかしい事に気付く。

修の前を立ち去ろうとした愛の腕を掴み、無言で修は愛を呼び止める。

愛が振り返る。

『・・・好きならちゃんと、試したりしたらんと、智哉だけを見る』

修は少し怖い顔をして、愛に言う。

【好き・・・？何を言ってるのこいつ・・・】

愛は修の手をはらって

『あんな遊び人好きになるわけないやん！

しかも、あたし人妻やで〜!?!?』

と、笑いながら答えて、レジの方に歩き出した。

愛がレジのところにとどり着くと、じーっと愛を冷たい目で見る智哉と目が合った。

【何怒ってんの・・・？好きでもない女のくせに】

愛は自分のシナリオ通りに怒ってる智哉なのに、自分で仕組んだのに、なんとも言えない、まるで恋愛しているかの様な錯覚に陥っていた。

【修が変な事言うから・・・あゝもゝ！あたしが錯覚してどうする！】

愛は智哉から目をそらした。

【遊び相手に嫉妬してキレる様なサイテーな奴なのに！】

愛は頭の中で一生懸命友やのダメなところをリピートしていた。

まるで、好きと言う小さな感情を打ち消す為かのように。

愛が戻って来た事に気付いた山本が、電話をきって、愛の側にやってきた。

『悪い悪い、仕事の先輩からでさ。』

大丈夫？いける？』

山本が愛を気遣い聞く。

愛が黙って少し笑顔を作り頷く。

『じゃあな、智哉！』

山本が店のドアを開け、愛に【どーぞ】と言う手振りをした。

愛は後ろを振り向かず、俯き下をむいたまま、店を出た。

『ありがとうございます。』

と、智哉の音がする。

続けて

【又の来店を心よりお待ちしております】

と、聞こえてきそうだ。

店のドアが閉まる音がした。

愛はそこでやっと、店を振り返った。

店の中は見えない。

『俺、いい店知ってんねん』

と、言いながら嬉しそうに歩き出す山本。

愛は店に背を向け、山本の後ろを歩き出した。

バタン！！

大きな音がした。

『待て、コラア！』

怒りに満ちた声が聞こえた。

愛と山本が振り向く。

そこには智哉が立っていた。

智哉は今にも人を殺しそうな形相でそこに立っていた。

誰が見てもわかる。

【こいつ、完全にキレてる……】

しばらく沈黙が続く。

智哉がずっと二人を見ている。

『なんやねん』

ちよっと機嫌の悪そうな声で、山本が智哉に言う。

返事はない。

愛が智哉の視線に耐え切れず下を向く。

すると、智哉がこちらに向かい歩き出した。

山本が少し構える。

愛は下を向いたまま動けない。

もう目の前に智哉がいる。

俯いた視線の先に智哉の足先が見えた。

『お前、ちよつとこつち来い』

智哉が愛の腕を掴み、店の前に連れて行くとした。

『痛っ！』

あまりにも強く腕をつかまれたので、愛は不意に声が出た。

『おい！何やねん、やめたれよ！』

山本が智哉の肩を掴む。

智哉が山本を鋭く睨む。

しかしまた、何も答えず愛を引っ張る。

『おい智哉！聞いてるんか！？なんやお前！！』

山本がすぐに追いかけて、智哉の腕を強く引っ張った。

『お前、帰れ、いいから帰れ！』

智哉が山本の手を振り解き、そう吐いた。

『いや、意味わからんし、何で帰らなあかんねん』

山本がもう一度振りほどかれた手で智哉の腕を掴んだ。

『俺はコイツに話がある、悪いけど帰ってくれ・・・お前を殴りたくない・・・』

智哉は腕をつかまれたまま、先ほどよりも少しトーンを落とした声で山本に言う。

山本は静かに智哉から手を離す。

そして黙ってそこに立っていた。

『・・・またちゃんと説明するから・・・』

智哉がもう一度山本に言った。

山本は状況がある程度察知したのか、二人に背を向け無言で歩き出した。

店の手前まで来た智哉と愛。

『ちよっと、痛いつてば!』

愛は智哉の手を力強く振り払う。

それが又、かんに障ったのか智哉はキツく愛を一度睨みつけて店の外壁に向かい愛を突き飛ばした。

『痛っ!!!』

愛は背中を強く打った。

愛も智哉を睨みつけると同時に、智哉は愛が逃げられないように、愛の顔の左右に両腕を店の壁に立て、愛を自分の体で包囲した。

至近距離で智哉に睨まれる愛。

本当はすごく怖かった。

愛はかろうじて智哉を睨み返していたが、体が振るえ、動けなくなっていた。

しばらくそのまま沈黙が続く。

しばらくして、智哉が口を開いた。

『・・・なんでやねん・・・』

低い声で呟いた。

愛は何も言えない。

【何でやねん】の意味が全く解らなかった。

智哉は愛をじーっと見た。

また、しばらくの沈黙の後、智哉は口を開いた。

『・・・もう山本には連絡すんな・・・』

急に智哉の話し方が少し優しくなった。

愛は小さく頷いた。

すると、智哉はバリケードの様になっている腕を退けて、愛から離れた。

愛は動けないままだった。

『修、見てやんと、店入れ・・・』

智哉がいきなり声を出した。

ふと店のドアの方を見ると、心配そうな顔をした修が立っていた。

智哉の声を聞き、チラッと愛を見てから、修は店に入って行った。

それを確認した智哉は、愛に背を向けたまま

『……気をつけて帰れよ』

と、言った。

『うん……』

愛もやっと声を出す事ができた。

しばらくしても、智哉は愛の方を見ようとしなない。

だからと言って、店に入ろうともしない。

ただ、そこに立っていた。

愛は何かを話そうとしたが、うまく言葉が見つからない。

今日はこのまま帰る事にした。

愛は壁にもたれたままの体を起こし、

『……じゃあ……ね』

と、言う。

智哉は何も言わない、動かない、こちらも見ない。

愛は智哉に背中を向け、歩き出した。

『また、連絡するから・・・』

智哉が突然、声を出した。

愛はびっくりして振り返るが、智哉はまだ、背を向けていた。

『・・・うん・・・。』

そう小さく答えると、愛もまた智哉に背を向け、駅に向かい歩き出した。

振り返ることはできなかった。

心の変化

智哉は店を閉めた後も、一人店に残りカウンターに座っていた。

さっきまでの感情の整理をしていた。

【ここに座る山本と愛を見てて・・・】

店を変えると言った山本に愛が同意した時点では

俺はこの女はもう要らないと思っていたはず・・・】

智哉は目の前にあるウイスキーをグラスに注いだ。

【店を出る二人を見るまではそう思っていたはず・・・】

智哉はウイスキーと一口飲んだ。

【出て行くのを見届けてカウンターに入ろうとしたら

修が『いいの？』って聞いてきたんやっただけ・・・】

智哉がグラスにつく水滴を手でぬぐう。

【で、何故が良い訳無いって咄嗟に思ってた・・・】

俺、店飛び出したんやっただ・・・】

智哉は頭を抱えた。

【何が良い訳ないんや、俺！】

しばらく智哉はぼんやりした。

【・・・何で最後、また連絡するって言ったんやろ・・・
今までならもうあんな女なら着信拒否すのに・・・】
考えても答えが出ない。

【なんであの時、俺許してしまったんや・・・？
それ程どうでもいい女やかからか・・・？】

智哉は苦しんでいた。

【じゃあ、俺、なんであんなに怒ったんや・・・？】

智哉は携帯を見た。

【何俺、知らんうちに愛からのメール待ってるんやろ・・・】

その時智哉の携帯がなった。

今日はホントにごめんなさい

今日のこと、本当に後悔しました。

一つだけ聞きたいことがあります。

さっき言った

【何でやねん】

の意味、よければ教えてください。

【何でやねん・・・そんな俺言ったか・・・？】

愛からのメールにまた智哉は頭を抱える。

智哉は忘れていた。

と言うよりも、不意にでていた言葉の為、覚えていなかった。

智哉は一気にグラスに残ったウイスキーと飲み干した。

【はぁ・・・あ～～も～～!!】

何でやねん！俺今までこんなことなかったのに!!】

・・・何で別れたくないなんて思ったんやろ・・・】

智哉は最後に本音が出た事に気付いていなかった。

そのままカウンターにひれ伏せて智哉は眠ってしまった。

キス

『で？何が聞きたい？』

電話先の由佳が、愛に聞く。

愛はあれから今までのこと、変な感情に襲われた事、全てを丁寧に由佳に説明していた。

もう自分でいくら考えても自分では答えが出ない、そう思い相談しようと思ったのは由佳だった。

『うん、何が聞きたいんやろ・・・』

もう何が聞きたいかすらわからなくなっていた。

『じゃあ、言い換える、あたしに電話してきたって事はさ、何か言っただけで欲しいんやろ？』

【あたしが由佳に相談相手に選んだ訳・・・訳・・・
あたしは由佳に言っただけで欲しい言葉がある・・・？】

由佳が続けて話す。

『で、あなたはどっちをあたしに勧めて欲しいワケ？』

【どっち・・・？】

わからない・・・わからない・・・

あたしの中で何かが動き出す・・・

それを必死で止めようとしている何かがある・・・

ねえ、助けてよ・・・】

愛が心の中で葛藤していると、由佳はまた続けて話す。

『あなた、それ、あたしに言われて進むわけ？

何わからないフリしてんの？

気付いてるんやろ？』

【由佳・・・何を言いたい・・・？】

お願い、あたしにはつきりとした決定打を頂戴・・・】

愛の態度に由佳はだんなんな大きな声になる。

『あゝも〜イライラするなああ！

要するに！あなたはどうにもこうにも、智哉を好きになってきてるんやろ?!

それをあたしに、馬鹿な事言ってるんな、妄想や、と言って欲しいんか!?

それとも・・・』

由佳が言葉につまる。

『・・・もう一つを選択なら、時期に智哉に気付かされるを得ない状況にさせられるんじゃない・・・？』

愛は頭の中のモヤモヤがどんどん、すーっと消えていくのがわかる。

そう、改めて人に言われて整理がつくこともある。

愛もプライドが高く、ひねくれている。

そんな愛が素直な気持ちを自分で認めるには、自分だけの力じゃ難しい。

『あたし、智哉が好きみたい・・・』

愛が初めて口にした言葉。

なかなか口に出すのが難しかったこの言葉。

『あたし、智哉に負けた、惚れたのはあたしやわ・・・』

愛が勇気を出して口にした。

しかし、口にした瞬間、心がスーッと楽になった。

『よく、認めたね、愛。えらいね。』

由佳は優しく言う。

『でも、……あんた旦那も子供もいる身なのに……どうすんの……?』

そつだ、認めたら次は違う悩みが襲ってくる。

『うん……でもさ、あたしの片思いだから。

智哉にとっては、あたしは浮気相手だから……』

愛が答える。

『うーん……あんた負けたんだもんねえ、しかもあんな癖の悪い男に』

由佳が少し笑いながら言う。

それに対して愛が言う。

『選択は二つ。

一つは一緒にいたいから、このままあたしも遊びのフリをして、関係を続ける。

もう一つは……辛いから関係を……切る……。』

愛はだいぶ、頭の中が整理されてきた。

『で、もう一つあるやろ!?!』

由佳が言う。

『智哉を振り向かせるってのがさあ?!』

由佳は明るく言うが、愛は自信が無かった。

惚れた方は弱い、惚れた方が負け。

これは今まで沢山の恋愛をして、いろいろなものを見てしまったからわかること。

』とにかくさ、一度、あたしとまた、近いうちに店に行こう。

今日の後じゃ、このまま会えないのは辛いやる?』

由佳が言った。

『うん、あたしも会ってちゃんと誤りたい。』

愛も同意した。

電話を切った後会いは考える。

【負け・・・かあ。】

初めて負けたが敗北感に落ち込むことはなかった。

それよりも、智哉をあんなに怒らせてしまったことに落ち込む。

【・・・今までの男も、こうやってあたしのことで落ち込んだり、眠れない夜過ごしたんか　な・・・】

少し申し訳ない気持ちになった。

【でも・・・あのフラッシュバックからあたし、急に変な気持ちになった・・・】

なんやったんやろ・・・あれ・・・】

フラッシュバックのことだけは、由佳には言わなかった。

なんとなく、笑われるのが嫌だった。

【智哉・・・会いたい・・・よ。】

『早く！早く行くで！』

由佳が愛の手を引つ張る。

『ち・・・ちよっと待って』

愛は腰が引ける。

『何やってんねん、愛らしくもない』

由佳が呆れる。

『だって・・・3日前にあんなことあって、今日なんか・・・』

あの電話を切った3日後、いきなり昼間由佳が家に来た。

『愛、今日行くで！旦那にはあたしが話つけたる！』

由佳は仕事から帰った愛の旦那に、どうしても自分の彼氏と話し合いをする仲裁役に、愛をかしてほしいと、女優並に演技をして愛を連れ出した。

『あんなことあったから早い内がいいねん！』

由佳が愛の手を引く。

『でも、今日は彼女の出勤日やし・・・』

愛が言うと、由佳は呆れた顔をして言う。

『はあ・・・？そんなん関係ないやん、』

って言うか、ホンマに恋した瞬間いきなり弱弱しくなって・・・
なんや情けない、昔の愛が見て笑うで！』

由佳が首を傾げて言う。

『じゅん~~~~』

愛は情けない顔で由佳を見る。

そりゃそつだ。

自分から好きになった片思いなんで、愛にとっては生まれて初めてのこと。

それに関しては今の小学生の方が度胸がある。

『好きか、好きじゃないかが違うだけで男を落とす業は一緒や、早く行くで!』

由佳が言う。

【そりゃそつやけど・・・難しいよ・・・由佳】

店に入るとやはり面食らった智哉がいた。

『智哉君、愛つれてきたよ〜!』

なんか愛が言いたい事あるんやってさ!』

由佳が智哉に向かい言う。

『何?どないしたん』

智哉はいつもの口調で言う。

愛は少し安心した。

『智哉の方がやっぱりウワテやな』

由佳が愛の耳元でコソッと話す。

【そりゃ智哉にとってはあたしは遊びの女だから……】

愛は言いかけて言葉を飲み込んだ。

なんだか言葉にすると、余計虚しくなるから……

『とにかく、席、案内するわ』

智哉が二人を誘導する。

彼女はまだ来ていないようだ。

『今日は何飲むの？』

智哉が二人におしぼりを渡す。

『あたし、スプモーニ、愛はどうする？』

由佳が聞く。

『あ、あたし……』

言いかけた時に、智哉が口を開く。

『今日は俺のオリジナル飲んで？』

作ってくるからちょっと待ってて。』

そう言い智哉が二人の前から立ち去る。

『やっぱり男前やなあ、あたしがもらってもいい？
あたしは惚れるようなへマセーへんで!?!』

由佳が意地悪そうに言う。

『いやや！あかん!』

ちよつとムキになった愛を見て由佳が笑う。

『冗談やん〜』

【あんな由佳の冗談でムキになって、ホンマあたし、頭の中どうな
ってんやろ・・・】

愛は難しい顔をした。

『お待たせ』

智哉が両手にグラスを持ちながら二人の前に来た。

『で、何？言いたいことって。』

智哉が続けて言う。

愛は少し俯きながら戸惑い気味に答える。

『・・・この前は・・・ごめんね。』

言い終えても言葉が何も返ってこないの、愛はそーっとな顔を上げてみた。

『やっと、俺の目をみた！』

どないしたん、今日はなんか、大人しいな。』

智哉が愛に笑いかけた。

愛は良い訳がすぐに頭に思いつかず、黙り込んでしまう。

フォローするかの様に由佳が横から口をだす。

『この前の事、愛かなり凹んでんねん』

智哉が由佳からこの言葉を聞き、笑う。

『もう気にしてへん、せっかく来てくれたんやし、楽しく行こうや』

智哉は自分の分のビールを出し、暮らしに入れた。

『今日は俺がおごったるわ！はい！乾杯〜〜！』

三人は乾杯した。

しばらくして、愛の携帯に着信が入る。

『あ、旦那やわ・・・何やる・・・？』

愛がいつも出かける時は、滅多に連絡などしてこないのに・・・

『ごめん、ちょっと・・・』

愛は携帯を持ち、店の外に出て通話ボタンを押す。

『もしもし、今どこ？』

旦那が聞く。

『あ、由佳の家の近くの店・・・』

咄嗟に嘘をつく。

『まだかかりそう？』

なんだか旦那の様子が少しおかしい。

流石に1週間の間に2日間も家をあげたから、機嫌が悪くなったのか。

『・・・うん、なるべく早く帰るようにする・・・』

愛が少し元気なく答えた。

旦那は今、由佳と由佳の彼氏の話がこじれているのかと察知したかのように

『うん、大丈夫、由佳ちゃんの力にちゃんとなってやって』

と、答え電話を切る。

【あゝあ、旦那相手ならこんな元気のない演技や、元気な演技も簡単にできるのにな あ・・・】

愛はため息をつく。

『旦那、大丈夫？』

愛の後ろから声が聞こえる。

振り返るとそこには笑顔で立つ智哉がいた。

『あ、大丈夫！』

愛は急なことに慌てる。

『どないしたん？』

なんか今日、ホンマに変やで？

昨日の事まだ気にしてんの？』

智哉が愛の肩を抱き、愛の顔を覗き込む。

『え？いや、別に・・・』

愛は恥しさとドキドキで顔を見れず目をそらした。

『何やね〜ん！
めっちゃ変ちゃん、愛らしくない。』

智哉は大きな声で笑う。

愛は智哉を見上げる。

冷たいような目、整った顔つき、笑うと無くなる目にキュッと上がる口角。

ちゃんと今までこんなふうじじっくりとパーツパーツを見たことはなかった。

最初会った時には最悪の印象しかのこらなかったこの目も、この笑顔も

今は全てが好きだ。

全てが愛しい。

素直な気持ちでそう思える。

今まで感じた事のないこのドキドキも

気分が悪くなりそうな程の緊張も

なんて心地よく、気持ちいいのだろう・・・

智哉と一緒にいたい・・・

ずっと一緒にいたい。

智哉は自分をじっと見つめる愛に気付く。

『・・・ホンマ・・・お前、どないしたん・・・？』

智哉が真顔で言う。

しまった。

顔に出てた？

好きな事がばれた？

警戒された？

愛の中で次は不安でドキドキが始まる。

こんなに少しの時間で一喜一憂するなんて・・・

恋愛ってなんでこんなに

エネルギーを使うのだろう・・・。

『ごめん、あたし、変やな！アハハ・・・』

愛は慌てて笑顔で明るくこう言う。

しかし、視線は遠くに見える自動販売機。

今は智哉の顔を見れない。

一生懸命笑顔を作る。

しかし智哉は笑わない。

やばい、完全に退いてる……

愛はまた笑顔がなくなっていく。

『うん……今日の愛はなんか……』

智哉が真顔で言う。

愛は心臓が口から出てきそうな程不安でドキドキしている。

『なんか……めっちゃ可愛い、俺がなんかドキドキするわ……』

愛は思ってもいない智哉の言葉に驚き、智哉の顔を見上げる。

次の瞬間、愛は全身が脈を打つ。

愛の頬を、智哉が優しく手でなぞる。

愛が息をのむ。

そして

智哉はあいの肩に手を置き

愛を見つめて

智哉は愛にキスをした。

本当に短い

一瞬のキスだった。

智哉の顔が離れる。

【あたしは今、どんな顔をしてる・・・？】

愛は頭が真っ白になる。

急に智哉が笑い出す。

『変な顔！！』

愛はぼーっと智哉を見る。

『ゴメンゴメン、約束破ってチューしてもた！』

智哉が笑いながら言う。

『怒った？』

愛の頭を撫でながら智哉は優しい声で聞く。

愛の完全に止まってしまっていた思考回路が徐々に動き出す。

『・・・怒った。』

愛が真顔で言うので智哉は少し焦る。

『マジ？ホンマごめんって！』

焦る顔を見て愛が少し笑う。

『違う、変な顔って言われた事に怒ったの！』

それを聞き智哉が少し安心して笑う。

『だって、愛の顔、豆が鳩鉄砲食ら・・・あれ？』

『豆が・・・鳩？』

愛が笑いを堪えて聞き返す。

『うはっ！！鳩が豆鉄砲や！間違えた〜！恥しい！』

智哉が爆笑する。

愛も爆笑する。

『でも、ホンマ、約束破つてごめん。』

あまりにも可愛く感じてしまったから・・・』

智哉はまだ少し笑いながら言う。

愛はまた、一瞬【鳩と豆】のお陰で忘れていたキスを思い出す。

『でも、大丈夫、もう次は絶対にしないから！忘れてな。』

智哉が言う。

【忘れるわけないやん・・・】

愛は思ったが口に出す事はできなかった。

『ホンマやで、びっくりしたわ・・・約束破るから。』

もう、あたしに惚れたんやないの？』

一生懸命愛は冗談っぽく笑顔で返した。

『・・・かもな・・・。』

智哉が真顔で言う。

『はっ!?!』

愛は驚き聞き返す。

『・・・とか言ってみたりして〜!』

『ドキドキした?ドキドキしたあ?』

また智哉は笑顔になり、茶化すように言う。

『せ・・・せ〜へんわ! アホちゃうか?!』

愛も慌てて智哉のノリにあわせる。

【ムカつく〜!】

完全におちよくられてることに愛は心の中で叫ぶ。

でも、恋にかわってしまった愛の気持ちは、面白いほど単純に、智哉の恋愛言葉とお遊びに振り回される。

悔しいがどうする事もできず、振り回されている自分に智哉が気付かない様にその恋愛言葉のお遊びについていくのに必死だった。

好きではないのに、好きなフリをするのはとても簡単なのに・・・

好きなのを隠し、好きじゃないフリをするのは、どうしてこんなに難しいんだろう・・・。

『ま、今日のは俺も不覚。びっくりさせてごめんな。』

智哉が優しく笑い、愛に言う。

『うん。』

愛は頷き答える。

『でも、今日みたいな可愛い顔や態度しとつたら、また前みたいに急に犯すぞ!』

智哉が愛の頭を軽く小突き、満面の笑みで言う。

『変態〜!』

愛が智哉を叩き返す。

触れたり触れられるだけで踊る様にとびはねる心を精一杯隠しながら
ら。。。。

『由佳ちゃん、遅いなあって心配してるよ。さ、店入ろ!』

智哉は愛の肩に手を置き、二人は店に戻った。

思い出せない

初恋 おめでとう！（笑）

家に帰った愛の携帯に由佳からメールが入った。

【27歳にして初恋かよ・・・】

愛は笑う。

【こんなにドキドキしたり不安になったり・・・

めっちゃしんどいけど、今の今までこんな体験したことなかったなんて、もったいなかった かなあ・・・】

愛はふと思う。

【今まで何であたし、こんな経験しなかったんやろ・・・？

恋愛はいつぱいしてきたはずなのに・・・】

愛は不思議だった。

確かに遊び人だとは言え、今まで付き合ったり、デートしたり、キスしたり、セックスしたり。

結婚までもしたのに、こんなドキドキや緊張や不安は感じたことがない理由。

【勿体無いつて言うよりも、体験した事ないもんな・・・】

愛は由佳に携帯にメールで聞いてみようと、携帯を開いた。

そして、返信されてきた由佳からのメールに、愛はハツとした。

今までの相手が悪いんじゃない？

愛が相手に対して壁を自ら作ってたからじゃない？

愛自身が全力で人を好きになろうとしたことが無いだけやろ？ 違う？

それを格好悪いとか、恋愛で傷つくのがいやだったのか理由まではあたしにはわからんけどさ・・・

最初から防御線張ってたんやろ。

モテたあんたは、自分から仕掛ける事はあっても、自分から好きになる

きっかけもなかったんやろうし、余計やなあ。

そんなんやと、前には進まれへん様に、知らんうちに少し好きな気持ちが出てきたとしても、気付かないフリしてその気持ち、無理に押し殺してしまうからなあ。

じゃあ、あたしも聞くけど、どうして今回は素直に好きを認めてしまったん？

【何で・・・やる・・・難で素直に認めた・・・？
好きになってる事に気付いてしまった・・・？】

フラッシュバックがあつてから・・・
あたしは急に素直になつたんや・・・

10年前に笑顔の智哉と目が合った

あの時の智哉の顔が、あたしを素直にさせ・・・た・・・？】

愛は頭の中で徐々に何か思い出そうとしていることに、まだ気付いていなかった。

由佳にはとりあえず

さあ・・・なんでやる・・・？

とだけ、返事した。

店を閉めて、智哉は沙織と店を出た。

するとそこには、智哉の単車に跨る、修がいた。

『よっ！』

修が智哉に手を挙げて言った。

『どないしたん、修、バイト入るんか？悪いけど今日はもう閉店や。』

智哉が笑いながら修に言う。

『お前、こないだ【また明日飲みに行こうや】言つて、次の日熱出して行けんかったやろ』

修が単車から下りて智哉に近づく。

『いつの話してんねん！』

智哉が笑いながら答える。

『悪いな、そういうワケで沙織ちゃん、今日は智哉、俺が借りるわあ。』

そういうと、修は智哉の肩に手を回す。

沙織は少し笑って

『智哉を変な事に誘わないでね、修』

と言うと、バイバイと手を振る。

『また、電話するわ』

智哉が沙織にバイバイと返しながら言う。

『さて、話聞かせてもらおう！』

『よ～さん聞きたいこと、あるわ～！』

そう言つと、修は智哉の単車の後部座席に跨る。

『なんや～？お前～』

智哉が笑いながら単車に跨り、エンジンを回した。

修と智哉はいつも来るBarに来ていた。

ここは朝まで経営している為、多い時にはシュウに会くらい、智哉は仕事の後のみに来る。

『で、どうよ？智哉くん』

修が煙草に火をつけ、智哉に突然聞く。

『何がやね～ん』

智哉は突然の質問に、グラスを口に付けた途端、吹き出してしまつ。

『いや～、沙織ちゃんの事とかさあ』

修が一度フーツと煙草の煙を吐き出すと、続けて言つ。

『あの、人妻さんの事とか』

智哉は酒を一口飲み、修の方を見ずに

『ああ、沙織な・・・』

と、答えたあと、すぐに

『って言うか、何で愛やねん!』

と、笑って聞き返す。

修は笑うと

『いや〜・・・ただなんか、いつもの智哉のお遊びとは違う感じがしてなあ。

ほら、3日前だって・・・』

と、修が指を立てて言いかけると

『あ〜、あの日・・・な』

智哉が笑う。

『あれは明らかにいつもの智哉違うやん。遊びの女相手に・・・』

修が話をすると、そこに被せて智哉が話す。

『全部言っなあ!・・・あれは俺も自分で驚いた。

なんでまた続けようとしたんか・・・今もわからんわ〜・・・』

智哉もポケットから煙草を出す。

『俺が言うのも何やけど、あの人妻さ、智哉に本気なんちゃう!?!?』

修は真面目な顔で言うので、智哉は笑いながら

『有り得へん。旦那おるしやなあ・・・俺にはそんな風な態度、全然とらんし。』

でも実はな、今日、アイツ店に来たんよ・・・』

智哉が急に真面目な顔をする。

『ほんで?』

修が聞く。

『チューした。』

智哉がそう、真面目な顔で言うので、修が吹き出す。

『だから何やねん!』

修が爆笑する。

『・・・いや、別にいつもの事やねんけどな、なんか・・・あゝもくわからん!』

智哉が頭を食る。

それを見た修が話を少し変える。

『そういやあさ、いきなりあの人妻現れたけど、何で知りあったん？
なんか山ちゃんとも昔ながらの知り合いっぽかったけど・・・』

智哉はそこで、修には何も言っていなかったことに気付く。

『あゝ、昔、10代の頃遊んでた奴の女やってん。

それが最近ひよんな事で再会してなあ』

智哉の話に修はじつと聞き入る。

『当時はほとんど・・・いや、全くしゃべったり絡んだりした記憶
ないんやけどさあ、

あの女が俺の事覚えててな、俺もすぐなんとなく思い出してん・・・

『・

ここまで言つと、いきなり修が話を止めた。

『ち・・・ちよ・・・ちよつと待ってや！

全くしゃべったり絡んだ事ないのに、お前覚えてたん・・・？』

修が聞く。

『あ、不思議やる？そんなに印象深かったんかなあ・・・？

顔とかはすぐに思い出せんかったんやけど

10年ぶりに再会したら、すぐ顔見てわかったわあ。』

修が不思議そうな顔をする。

『だって、智哉、お前18の時に一回ノリでエッチした沙織のこと

ですら

アメリカから帰ってきたお前、沙織と再会した時忘れとった様な男やん!』

修が大袈裟に驚いたような口調で智哉に話す。

智哉は【あはは・・・】と、自分に呆れるように笑う。

『んなお前がさあ、ヤツてもいない、ましても話をしてもない10年も前に会った女の事を

覚えてるなんて聞いても、信じられへんで?

ホンマに当時、一度も話せんかったん?

なんか喧嘩したとか、印象に強く残る様な事、なかったんか?』

修が息つく間もなく話すと、智哉がぼーっと前を見て

『なんかあつたつけ・・・なあ・・・あつ!』

と、呟き、急に何かを思い出したかの様に目が一瞬大きく開いて、修の方を見た。

『何!? なんか思い出した? 実は10年前にその彼氏と3Pしてたとか!?』

と、修は真面目な顔をして聞く。

『アホか、んな事してへんわ』

と、智哉が笑いながら、大きく煙草を吸い込む。

そして、一気に吐き出し、話し始めた。

『一回さ、俺、自分の女がいないときにさ、アイツの彼氏の單車壊れてさ、

アイツの彼氏に頼まれて、愛を俺のケツに乗せた事あるねん・・・』

智哉が一つ一つ丁寧に思い出しながら、ポツポツ話す。

『んでさ、大阪城・・・やったはず・・・』

その大阪城からちよつとした場所に移動する短時間やったんやけどなあ

アイツ、無言で。』

修は前を見たままゆっくり話をする智哉をじっと見て話を聞く。

『俺、なんか話せなあかんのかなあ・・・と思ってな、愛に【寒くない？】みたいなこと

聞いたんよ。・・・春でな、その日は風強かったし・・・曇ってたから・・・』

そしたらアイツがポソツとさ、

【めっちゃ綺麗、雪みたい】

って、意味わからん返事してきて。』

そこまで話をして、智哉は一度酒を飲み、少し思い出す仕草をする。

『・・・で、俺、コイツ何言ってるのや？人の質問に意味わからん

答え言つて

頭おかしいんか？思つてな、バイクのミラーを愛に合わせてみてみたんよ。

そしたらアイツ、アホみたいな顔して、口をポカーンと開けて空見とつてん』

修が少し吹き出し

『で？』

と聞く。

『コイツやつぱりアホなんかなあ思つたんやけど、よく見たらな、桜が強風のせいだ

ものすんごい、舞つててん・・・

俺も一瞬見とれるくらい、綺麗やったわ・・・

桜の雪道、単車で走つてゐたいやつた・・・』

修が黙る。

『・・・そんだけ。』

智哉が修を見て笑う。

『要するに、単車の音と、風の音で、

愛ちゃんには智哉の話しかけた言葉が聞こえんかつてんな？』

修が聞く。

『多分そうやな』

智哉が答えた。

『……それだけの事で、智哉、愛ちゃんの事覚えてたん？』

修がちょっと呆れ顔で聞く。

『あの景色はホンマ、絶景やわ。』

単車に乗ってるからこそ、見えるんやで。

後ろに後ろに桜の花びらが飛んでいくねんぞ？

道が開けるように、積もった桜の花びらが、舞うねんぞ？

それを一緒に見たから……かなあ……

なんせあの景色は印象に残るわあ』

智哉の目には今、その景色が浮かんでるようだ。

『……それが、あのアホみたいな顔がえらい印象的やったんかな』

『？』

と、智哉が付け足す。

修と智哉が大きな声で笑う。

『でも、あいつ、あの時、桜をバックにアホみたいな顔してたけど

俺、あの顔めっちゃ鮮明に覚えてる……』

智哉が急に真面目な顔をした。

『さっきこの時のこと思い出したばかりやのに？』

修が笑いながら智哉に聞く。

智哉は笑わず、ぼーっと考えた。

『うん・・・なんでかなあ・・・』

あいつもあの景色・・・覚えてるんかなあ・・・』

告白と分岐点

『最近さ、よく行ってる昔の友人の店ってあるやん?・・・智哉君
やった?』

突然夕飯の最中に、夫が会いに言った。

『え?うん、そうだけど』

愛はドキっとしたが、平然としたフリで答えた。

『俺も行ってみたいなあ・・・あかん?』

旦那が優しく言う。

【あかん!】

と、言いたかったが、真つ当な理由がない。

『別にいいけど・・・またなんで?』

愛はドキドキしながら夫に聞く。

『いや、愛、行く時楽しそうやし、愛の昔話聞いてみたいやん。』

夫は楽しそうに笑いながら言う。

『そっか、わかった』

まあ智也には前もって夫が行きたいと言うので、智哉が常に立っているカウンター席ではなく、2階にあるテーブル席に通してもらって、後は忙しそうに彼女がいる土曜日に、店に行つて、智哉と接する機会を減らせばいいと、考えていた。

『次の土曜、どう？俺、明日にでも親に孫の守り、頼んどくわ』

夫が嬉しそうに言う。

『うん、わかった。』

二人でデートなんて久しぶりだから楽しみやな！』

愛も笑顔で答えたが、土曜日を夫から提案してくれて、ホツとしていた。

土曜の夜、夫と愛は智哉の店に向かっていた。

智哉には昨日の夜に事情を話し、裏を合わせてもらった。

愛は後ろめたさの中に、智哉の顔が見れる楽しみがあり、早く店に着いてほしかった。

何も知らないまま車を走らせる夫もまた、久しぶりの愛とのデートにワクワクしているのか、鼻歌まで歌う。

『こうして二人で出かけるのは、子供が生まれてから初めてやな！』
？』

夫はとっても嬉しそうに愛に言った。

『でも、いつものうるさいのがないから、なんだか静かだね。』

愛が答えた。

『家族としての幸せもいいけど、こうやってお洒落した愛と出かけるとなんだかちょっとドキ　ドキしてくるな』

夫が言う。

【ねえ？

？】
このお洒落があなたの為じゃないと知ったら、あなたはと思う

愛は今までは、相手を傷つけない為にうそをつくことは、相手の気持ちを考える為ではなく、自分がそれによって、責められるのが面倒だった為である。

しかし、自分が恋をし、傷つく事を恐れる経験をしてる今、夫に対して罪悪感を感じるようになった。

しばらくして、愛と夫は店に着いた。

『ここかぁ、感じのいい店やな！』

夫が店の外観を眺めて言う。

そして、夫が店のドアを開いた。

『いらっしゃいませ』

いつものあの声がある。

いつものクールな表情でそこに立っている。

【この前、あの唇であたしにキスをしたんだ・・・】

愛がぼーっとしていると、智哉が話します。

『こんばんは、愛の友達の星野智哉です。』

カウンター席とテーブル席がごいますが、テーブル席の方が夫婦でゆっくりできるかと 思いますが、どうされますか？

夫は智哉に笑顔で軽くお辞儀をして答えた。

『カウンターでお願いします』

智哉はちょっと驚いた、愛も驚いた。

しかし智哉は落ち着いて、カウンターの席に案内する。

『テーブルじゃなくていいの？』

愛が夫に聞く。

『うん、カウンターの方見たらお客さんいなさそうだし、雰囲気よさそうだったから。』

夫が笑顔で答えた。

土曜日なのに店は空いていた。

カウンターに座ると、今日はもう智哉の彼女も出勤していた。

『あれ、智哉の彼女』

愛は夫の耳元でこっそり伝えた。

『最近の若い子って感じだね。』

夫が愛の耳元でそう言った。

『可愛いと思う？』

愛が夫に聞くと、夫は迷わず

『うん、可愛いんじゃない？』

と、答えた。

愛は笑顔を作ったが、心の中は複雑だった。

智哉の彼女と言うポジションで、夫にも可愛いと言われ、愛は小さく彼女に嫉妬した。

そこに智哉が来た。

『ご注文はお決まりですか？』

愛が、

『この前飲んだ、智哉スペシャル』

と、答えた。

続いて夫がビールを注文すると、智哉が二人の前から一度立ち去る。

『いい店だね』

そう言うと、夫は愛に笑いかける。

愛は作り笑いをした。

しばらくして、智哉がグラスを持って、再び愛の前に立つ。

テーブルにそれぞれのグラスを置いた時、カウンターの隅にいた沙織がこちらに向かってやってきた。

『いらっしやいませ』

可愛い声で言いながら笑顔で小さくお辞儀する。

『くんばんは』

笑顔で夫が答えた。

夫という存在に安心したのか、沙織は今日は積極的に話しかけてくる。

『えっと、奥様は時々来られますが、旦那様は初めてですよね？』

夫はビールを飲みながら頷き笑う。

『愛がいつもお世話になってます』

夫が彼女に言う。

智哉は隣で黙ってカクテルグラスを磨いている。

『いえ、あまり私は話した事なくて・・・』

そう沙織が言い、智哉の方を見た。

智哉がそれに気付き、笑顔を作り

『彼女はアルバイトで週に三日だけなんですよ』

と、答えた。

『とところで愛さん？』

いきなり沙織が愛に話しかけた。

愛は少し驚いて沙織を見る。

『その、カクテル、どうですか？』

愛の飲んでる、【智哉スペシャル】。

愛が勝手に名づけただけだが、この前来た時に智哉が勧めてきたので、それ以来こればかり飲んでる。

『うん、すっごい美味しいよ〜』

愛が笑顔で智哉を見て答えた。

しかし、智哉はこちらを見ずに、ひたすらグラスを磨いている。

『そのカクテル、まだ名前無いんですよ。』

店のオリジナルで・・・いい名前思い浮かびませんか？』

沙織が笑顔で愛に言う。

『そっか〜・・・うん・・・そうだなあ・・・』

愛は智哉の印象にピッタリの名前は無いかと、一生懸命考える。

その時沙織が嬉しそうに智哉を見て言った。

『店終わった後、遅くまで残って二人で作ったんですよ。』

ね？智哉！』

愛はガツンと殴られた様な感じに襲われた。

もしも【心】と言う臓器が体にあつたなら、その場所を強くハンマ

ーの様なもので殴られたみたいだった。

智哉がグラスを磨きながらグラスに目をやったまま

『……ああ……』

と、答えた。

『あ……そうなんや、いいね、ラブラブで！

じゃあ二人で名前付けたほうがいいね！』

愛は必死で笑顔で答えた。

『ねえ？羨ましいねえ？』

続けて夫にも話しかけた。

必要以上に話す愛。

沙織が少し照れながら

『それでもないですよ』

と、答えた。

続けて夫が話す。

『じゃあ、ラブラブで毎晩この彼女を抱いてるんだあ？

いいなあ、うちは子供が生まれてから枯れちゃって……

っていきなり下ネタはキツイなあ！』

と、少しお酒を飲んで気分が良くなった夫が沙織に言う。

アハハと、沙織が可愛く笑い

『毎晩なんて無いですよ。』

週に・・・3回くらい？

あ、言っちゃった、ごめんね〜智哉〜』

と、沙織は言う。

顔は笑顔だが、確かに愛の方を見ながら・・・

智哉は黙って少し笑顔を作った。

愛も作り笑いをする。

【この女・・・間違いなくあたしを意識して話をしている・・・】

愛は心の中で沸々と湧き上がる何かを感じた。

『ダメですよ〜旦那さん、ちゃんと奥さんを抱いて愛を伝えてあげなきゃあ？』

『浮気されますよ〜？』

と、沙織が笑いながら続ける。

『そつやんなあ・・・もう少しガ頑張らなあかなあ』

夫が笑顔で答える。

その後も、沙織は愛の知らない智哉との二人の出会いや、思い出、愛の知らない昔の智哉の話を、夫に沢山話した。

夫も楽しそうに聞いている。

愛はずっと作り笑いをしながら、ただそれを聞いていた。

明らかに沙織は愛を意識して話をしていた。

聞きたくない

聞きたくない

聞きたくない

聞きたくない

愛の心が悲鳴をあげる

聞きたくない

聞きたくない

聞きたくない

ここにいたくない……

~~~~~

~~~~~

その時、愛の携帯が鳴る。

『電話鳴ってるよ?』

夫に言われ、愛はハッとすする。

『あ、お母さんだ……ちょっと外に出て……電話してくる』

愛は【その場から逃げられる】と、すごく助かったと思い、携帯を持って外に出た。

目には涙が溜まっていた。

外に出ても、愛は電話をかけなかった。

今かけると、明らかに涙声になってしまうので、母に心配されてし

まう。

【あんな話、聞きたくなかった・・・こなけりゃよかった・・・
しかも、それを聞きながら笑う事しかあたし・・・出来へん・・・
】

季節は秋も深まり、夜は肌寒い。

智哉とであつた去年の冬から、もうすぐ一年が経とうとしていた。

【寒い・・・】

今日はなんだか風も強く、突きも見えない。

今にも雨が降りそうな低目の雲。

冬はすぐそこまで来ている。

【恋愛つて・・・遺体ものなんだ・・・】

『気分悪くした?』

後ろから声がする。

智哉の低く、優しい声。

愛は返事ができず、振り向く事も出来ない。

すると、智哉は黙って愛の隣に座った。

しばらく沈黙が続く。

愛は今声を出すと、全てを感情のままぶつけてしまうような気がして怖くて何も言えない。

全部言ったら、ここで全部終わってしまう。

智哉が愛の本気さに退いて、あたしの前からいなくなる・・・

もう二度と会えなくなる・・・

『寒くなったな・・・』

智哉がボソッと話す。

『またダウンジャケットの季節が来るなあ・・・』

単車に乗るのも寒くなる・・・』

また智哉が話をする。

愛も感情を押し殺して頑張って声を出す。

『・・・彼女・・・智哉がどこに行ったか心配して・・・また怒るよ・・・?』

感情を押し殺したつもりが、笑顔で言えない上になんて嫌味っぽい

言い方だろう。

『うん、大丈夫・・・』

智哉が答えた。

愛はしばらく黙って、智哉に聞きたい事があつたと思いついた。

『一つ・・・聞いていい・・・？』

愛が智哉を見ずに話す。

智哉が愛の顔を見て

『なに・・・？』

と、優しい声で聞く。

『智哉、胸が痛くなったり、苦しかったりする程の、本気の恋愛・・・したことある？』

愛はずっと下を向きながら智哉に聞いた。

智哉は何も言わない。

愛は聞いてはいけない事を聞いてしまったのか・・・と不安になり、智哉の顔を横目で見た。

すると、智哉が考え込むような顔をして、ポツリポツリと話し出す。

『・・・うん、あるよ』

愛は少しびっくりした。

智哉は自分と一緒にそんな恋愛したこと無いと思っていた。

そんな驚く愛の顔を見て、智哉は少し笑い

『そりゃあるよ、一人だけやけどな。』

という。

『どんな人だったの？その人とはどうして別れたの？』

愛は聞いた。

智哉が愛の顔を一度見て笑い、その後前を向き話し出す。

『今の女の前に付き合ってた女。』

特に可愛いつてワケじゃなかったけど、今思えば・・・
めちゃくちゃいい女・・・やったな。色んな意味で』

智哉はどんな感じだったかまでは詳しく言わなかった。

愛はそのまま黙って聞く。

『あの時、俺結婚迫られて、全くそんな気なかったから別れてしま
って・・・』

でも後でめっちゃ後悔した・・・』

智哉からそんな話が出ると思わなかったので、愛は少し驚いた。

『今でも後悔・・・してる？』

愛は今でも好きかを聞きたかったが、怖くて聞けなかった。

『うん、やり直せるならやり直したい・・・かな。』

今まで少し笑顔だった智哉が真面目な顔をした。

『・・・って言うか、実は一度、よりを戻そうって言ったんやけどね。』

智也が無邪気な顔で再び笑いながら言う。

愛はここでまた、智哉に嫌味っぽく言ってしまう。

『どーせ、その彼女と付き合ってた時も浮気してたんやろ？
しかも結婚する気もないくせに』

笑って言ったが、すごくいやらしい言い方になってしまう。

『うん、浮気しとった。』

でも、俺、より戻したいって言った時に、フラれたんよ。
結婚を考えてる人がいるってさ・・・』

智哉がまた少し笑顔になる。

『智哉が浮気ばっかするから嫌になったんちゃう？』

愛はまた嫌味を言う。

言えば言う程、自分が嫌になる。

こんな事ばかり言ってたらいい加減嫌われる。

わかっているが、止まらない。

そして、どんどん傷つく答えが返ってきてドツボにはまっていった。

『でも、俺、今よりを戻せたら、迷わずプロポーズして、アイツと結婚する。』

『浮気も・・・もうしない。』

智哉は真面目な顔をして答えた。

そして、次の瞬間、また笑顔に戻り

『ま、フラれたから意味ないんやけどね〜』

と言う。

笑顔で言うが、少し悲しそうな目で言った。

『アイツは俺の中では今でも一番大事にしてる女やな。』

そう言うのと、愛を見た。

そこには大きな涙の粒をボロボロ流す愛がいた。

『ど……どないしたん？』

なんで愛が泣くん？

暗い話してごめんって……!!』

智哉が焦って言う。

愛は俯き、顔を隠す。

『あたし泣かへん女や〜言うてたやん〜！』

俺の話で泣かんとしてや〜、俺が泣かせたみたいやん〜』

智哉が愛の肩を抱いて必死で慰める。

『……ちやう……ちやうねん……』

自分、めっちゃ腹立つ、あたし、嫌味しか言うてへん……

智哉、そんなに好きな人……いて……』

声にならない愛。

『嫌味て〜、俺らの中じゃ今まで普通にお互い言い合ってたやん〜、
なんや今更〜』

智哉が困った顔をして言う。

『……智哉、全然わかってへん……』

そんな話、聞きたくなかった……

自分から聞いてしまったこと、後悔したわ……』

愛が言うと、ふと智哉は愛の肩から手を離れた。

そして、真面目な顔になり、智哉は言う。

『……どう言う……意味?』

愛は【しまった】と思った。

しかし、もう止められない。

愛は立ち上がる。

『……あたし、店でさっき、智哉の彼女に話し聞いてめっちゃ嫉妬した。』

智哉は座ったまま黙って聞いている。

『で、今の元カノの話を智哉から聞いて、元カノに死ぬほど嫉妬した。』

智哉も立ち上がる。

『……ちよっ……ちよっど、愛?』

智哉が愛に触れようとした。

『触らんといて!!!』

あたし一人でドキドキしたりするのアホみたいやん!
むなしいやん……』

智哉が愛に触れようとした手を戻す。

【・・・なんで戻すの・・・？
そのまま抱きしめるなりなんなりして欲しいのに・・・
できる訳・・・ないよな。
あたしを好きじゃ・・・ないんやもん・・・】

心の中でそう思うと

愛は涙で顔がグシャグシャになる。

『愛・・・俺・・・ごめん・・・』

智哉が俯き言う。

【今のごめんは、どういう意味の・・・ごめん・・・？
わかってる・・・
意味はわかってる・・・
でも認めたくない・・・】

初めての失恋・・・】

愛は涙でぐしゃぐしゃの顔を俯き隠す。

『旦那・・・呼んできて。』

あたし、気分が悪くて店に戻れないから返りたいって言ってるっ
て・・・

呼んできて・・・』

愛はそういって、顔をぐしゃぐしゃ手で拭いて言う。

化粧もめちゃくちゃだ。

二人だけの思い出

『愛・・・覚えてへん?・・・』

智哉が振り向き、揺れる木々を見上げながら小さく聞く。

『・・・覚えてるかもしれへん・・・思い出したかも・・・しれへん・・・』

愛も上を見上げたままこたえる。

『桜・・・やる?』

智哉が言う。

『うん・・・』

愛が俯き智哉を見た。

愛の頭の中に10年前の事が再びフラッシュバックする。

初めて見た智哉。

冷たい目をした智哉。

その智哉が自分に向けた笑顔。

なんともいえない気持ちになった。

愛はそれを

【ムカつく】

という感情にすぐ置き換えた。

でもそれは……

智哉に一目ぼれした瞬間だったんだ……。

その後、智哉の単車の後ろに一度だけ乗った記憶。

少しの時間だったけど、二人きりの時間。

愛は智哉に何も話ができなかった。

それを愛は

【意味がわからない変な奴】

と、思い込んでいた為だった。

しかし、それは、智哉に恋する気持ちが、愛にいつもの

【男を落とす為の策略の言葉】

が、無意識に智哉には出せないだけの状態だったんだ。

緊張に話しかけることのできない愛は、その時の智哉の口にした

【寒くない？】

の言葉すら聞く余裕がなかった。

その時に目に飛び込んできた、満開の桜、舞い散る花びら。

それが愛の緊張を解し、愛の目を釘付けにさせたんだ。

301

その後、10年と言う月日がたつても、度々何故か思い出す、智哉の事。

結婚しても思い出した、智哉の顔、智哉との思い出。

なんでなのかわからず

【落とせなかった男】

と、偶然再会した時にそう思いこんだが、本当はそれは

【両思いになりたい男】

だったんだ。

再会してから初めて顔を見たとき、ドキドキが止まらなかった。

それは恋をしていた人に、再び会えたから。

メールの返事がなくて、腹が立って眠れなかった夜。

それは本当は、不安で眠れなかった夜。

初めて抱かれた夜、強引な智哉の手を振り解けなかった理由。

怖いからじゃなく、自分もそれを望んだから。

落とせないと一度諦めかけた日、面倒になったんだと思っていたが

それは本能で、傷つきたくないと思ったから。

智哉の方から離れて行ってしまふ事が怖くて、自分から身を引こうとしたから。

それでも智哉に会うことを理由をつけて続けたのは

智哉と少しでも一緒にいたいと

本能が指令を出したから・・・

自分で何度も何度も

きつく、難しく結んだ糸が

今、全て

解けた。

自分で蹴飛ばして、バラバラにしてしまったパズル

時間をかけてもういちどやり直して

今、最後のピースが

はまった。

全てが今、繋がった。

長い間、気付けなかった、いや、気付かないフリをしてた愛の智哉を好きな気持ち。

愛はやっと、全ての謎が解けた。

恋をしたことがなかったんじゃないくて

ずっとずっと、痛く苦しい、長い長い恋をしていたんだ。

だから誰にも恋できなかった。

ずっと、智哉だけをみていた、

長く、純粹な、一途な恋。

『あはは……』

愛が急に呆れたように笑う。

『自分で自分の恋愛、ムダにしてたんや……』

自分の気持ちをごまかして、ぶち当たる事も終わらせる事もしなかったから……

今日の今日まで引っ張ってたんやわ……』

愛が【情けない】と言う表情で力無く笑う。

『何は恋愛沢山した、恋愛のプロやねん……。恥しくなるわ……』

10年もの時間、無駄にして・・・
恋愛のド素人やん・・・。」

愛は智哉を見て笑いかけた。

『智哉、ありがとう、今日で終わらせるわ』

愛が言うが、智哉は固まったまま、動かない。

『・・・ごめんね、なんか、困らせてしまったな。

あたし、智哉のこと、ホンマに好きやってん。

話すと長いし、余計にもっと智哉を困らすから、言わないけど!』

智哉はただ、黙って愛を見ている。

愛は、そんな智哉に近づき

軽くキスをした。

『あたしは好きな人しか、チューせーへんで!』

愛はニツと智哉に笑って見せた。

『・・・智哉、ばいばい。』

愛はそう言い、旦那を呼びに店に入っていく。

智哉はただただ立ち尽くしていた。

愛は自ら智哉に告白をし、別れを告げ、自ら恋愛を終わらせた。

愛の初恋と、初の失恋。

【・・・やっと・・・終わった・・・な。】

愛は涙を両手でごしごし拭いた。

店に入ると、旦那は心配そうな顔をして愛を見ていたので

『お母さんに遊びすぎって、めっちゃ怒られた〜！帰ろっか！』

といい、店を出た。

愛が帰るとき、レジにも、先ほどまで立っていた外にも、智哉の姿はなかった。

智哉の決意

あの日から二人は一度も連絡していなかった。

メールも電話も、もちろん店で会う事もなかった。

愛はまた、真面目な主婦になる。

もちろん、男の影すらない日々。

それでも全然愛には他に男を作ろうなんて気がなかった。

ただ、毎日が、早々と過ぎ去る。

クリスマスが過ぎ、年が変わり

寒い冬がどんどん過ぎていく。

一年前

智哉と再会し、智哉との思い出が沢山出来た冬

今年の冬はともやと過ごさない冬。

しかし、愛は自然と頭の中で振り返り、思い出す一年前の数々の出来事を、なるべく思い出さないようにしていた。

寂しさで潰れそうになってしまつから・・・

別れを告げ、自分から終わらせた恋は

後悔ではなく寂しさを残した。

思い出は沢山できたが、その思い出が余計にいたい。

初恋と気付いた瞬間終わったこの恋

痛みや寂しさが残るのは仕方がない。

でも今回はちゃんと終わらせたのだから、いつか時間がたつにつれ、薄まっていくだろうと思っていた。

ところが、冬も終わろうとする2月の末。

そんな生活から一転するメールが愛に届く。

それは、あれ以来メールのなかった山本からのメールで始まった。

愛ちゃん、お久しぶりです。

お元気ですか？

一年前のあの日は驚いたよ。

智哉からは結局何も聞いていないのだけど、大体のことは

見当ついたので

あえて俺も智哉には聞いていません。

俺、智哉怖いから（笑）

で、今突然連絡したのは、智哉のこと。

あれからしばらく智哉とは会っていなかったんやけど・・・

急にこの前連絡があつて、愛と繋がってるか聞かれて・・・

。

俺、智哉にあんなふうに言われて繋がってるわけ無いって

笑って答えたんやけど

それ以上何も言わないから、どないしたんか聞いて。

俺、智哉とその後飲みに行ったんやけど・・・

智哉から聞いたんやけど、もうだいぶ会ってへんのやって？

んで、その後、俺智哉からえらい言葉聞いてもた。

悪いけど、その先は智哉から聞いてくれへん？

あいつ、またアメリカ行くかもしれへん。

出来るだけ早く連絡したってや。

智哉携帯番号変わってへんけど、消してわからんなら俺教

えるし。

あいつに頼まれたわけちゃうけど・・・

智哉、愛ちゃんにめっちゃ言いたいことあるみたいやで。

何があつたか詳しくは知らんけど、智哉から連絡しづらい

言つてたから

俺、おせっかいやけど・・・

大好きな愛ちゃんと、大事なツレの智哉のためやから！

それだけ！

P・S 俺、彼女できた！！

愛は智哉の携帯番号やメルアドは消せずにした。

しかし、山本からのメールに愛は正直迷っていた。

今更どんな話をする？

どんな顔で会う？

しかし、愛は山本からの全てを語らないメールの内容も気になった。

【どうしよう・・・智哉、最後に謝るつもりなんちゃうやるか・・・？

それならなんか、あたし、惨めになる・・・

それともアメリカに行くって、沙織との結婚でも決まった・・・？

そんな話は今は、まだ聞きたくないな・・・】

愛はまだ完全には吹っ切れていないため、しばらくどうすればいいか考え込んだ。

時は遡り

愛から突然好きだと言われ、愛から突然さよならを言われた智哉。

その時何もいえなかった。

と言うよりも、智哉は呆然と考えていた。

【俺は何かを忘れてる】

今、枯葉舞う景色と、10年前桜舞う景色が重なり

智哉は何かを思い出せず、去って行く愛をただ見つめ、立ち尽くす。

そして

愛がいなくなり、とてつもない寂しさが残った。

いてもたってもいられなくなった智哉は、愛を追いかけてみようかとしたが、自分の今のこの気持ちはどういうものかも解らず、しかも何か思い出せない大切なものもあり、追いかけたことで、なんといいいいのか、話す言葉が思いつかない……

智哉は店に入って行く愛の後姿を見送り、ポケットから単車の鍵を出した。

思い出せない何かを思い出す為に、あの場所へ向かう。

智哉は10年前によく来ていた、大阪城に来た。

【うわ〜・・・久々〜・・・】

単車を降りて、公園に入ると、ゆっくり遊歩道を歩き出す。

【懐かしいなあ・・・あの頃はみんな無駄にたまってたからなあ・・・】

毎日の様に夜になると訪れたこの大きな公園。

智哉は目をつむっても歩けるほど、この大きな公園を熟知していた。

寒さもあり、この時間になると、人は疎ら。

夏にはどこからともなく恋人達や、散歩する人たちが現れるこの公園も

冬口にさしかかる今、夜の公園は時々ジョギングする人とすれ違うくらい。

天守閣のライトアップが、煌々と光を発している。

【あはは、ここにあった自販機、下から手を突っ込んだらいくらでもお茶出てきたんや！

でも、コーラとか欲しくてもお茶だけした取れへんかったんや〜

・

・・・しかも自販、なくなってるし！】

智哉が少し笑う。

毎日毎日この場所で蒸し暑いなるの夜遊んだあの頃

時に何をするワケでもなく、ただ場か騒ぎをしたり、バイクでレースしたり、広い公園全てを使った単車で鬼ごっこやかくれんぼ。

ある日、どうしても見つからない奴がいて、何時間も探し、諦めた頃、そのどうしても見つからなかった奴からの連絡で、オマワリさんに捕まり全員で警察署に呼ばれ、朝まで事情聴取された夜。

朝、みんなで警察署を出て、また向かったのもこの大きな公園。

コンビニで山ほどの花火を窃盗して、パトカーにめちゃくちや追いかけられ、逃げ込んだのもこの公園。

そして、この公園で山ほどの花火をして、またすぐに見つかって追いかけられて、手に持った花火、パトカーに向けて投げたり……
そういうのが全部、後々つかまった時に余罪で出てきて、罪が重くなっただ。

智哉はプツと思出し笑いをする。

そして、智哉は、一つの大きな広場にたどり着いた。

いつもいつも、みんなで話をしたり

ただぼーっとしたり

最初に集まるのも、最後に解散するのもこの広場だった。

沢山の桜の木が植えてあるこの場所。

愛を初めて見たのも、この場所だった。

そこでみんなが騒ぐ景色が、智也のめに浮かぶ。

もう10年も前の事なのに、どんどん色々なことの記憶が蘇ってくる。

【あそこの木に登った山本が、頭から落ちた事、あったなあ。】

【俺、あそこのガラス殴って割って、腕切って縫ったっけ・・・】
色々な忘れてた思い出がどんどん頭に浮かぶ。

【10年も前のことやと、こんなに色々忘れてるんやなあ・・・】

愛と初めて会った日から、愛はしょっちゅう俺らと一緒に過ごす事になってたな・・・

原チャリレースの時も、愛は俺たちが楽しむのをじーっと見てた。

鬼ごっこの時も、ヒデの単車のケツに乗って、俺らと隠れた。

そのあと警察署にも一緒に来た。

朝になって、また公園に戻った時も、愛はついてきた。

コンビニで盗んだ花火をした時も一緒に楽しんだ。

．．．．．全ての日に愛の存在がいたことを、俺は全部覚えている．．．

楽しそうに笑った顔や

俺らを見て笑いながら座ってた場所

毛威庄所での不安げな顔

一緒に吉野家で飯を食ってたとき、牛丼をこぼした愛の顔

そして、一緒に桜を見た、アホみたいな愛の顔．．．

どうして俺は覚えているんだ．．．

こんなにはつきり．．．．．

そして智哉はもう一つ思い出す。

当時、何度も何度も俺たちは目が合っていた

ただ、話す事はなかった

・・・話せなかった・・・？

女がいていつも、話せなかった・・・？

違う、目が合ってもすぐにそらした。

最初会った日に、俺は単車が壊れてイライラしているときに

あの時の女に

『可愛い女の子来たよ』

って言われて初めて愛を見た。

俺が愛を見た時、俺をじっと見ていた愛と目が合った。

俺は少し固まった。

睨む様な目で俺を見ていた愛

その目に俺はドキツとした

俺を初めて見た時、目を反らす女が多い中で

愛は俺をじっと見つめた

俺は自分の女に『後で話してくる』って言って

その場は俺は愛から目を反らした

その後、ツレが愛を俺に紹介した・・・

でも、俺は愛を見れなかった・・・

その後も、無意識のうちに俺は愛を目で追っていた。

だから、色々な俺の頭の中の思い出に、どの場面にもきっちり愛が居座っていた

修が言っていた、俺みたいな

女をすぐに忘れる奴がどうして愛を覚えていたか。

・・・愛は俺が気付かない間に

俺の頭の中にずっと・・・

・・・いた・・・？

そして、目で愛を追うと

愛も俺を見ている事が多かった。

もしかして、愛も俺を、目で追っていた・・・？

いつもすぐに俺は目を反らしたけど・・・

そして、二人で桜を見たあの日

俺は【寒くない?】と聞いた

でも、確かに俺は少し緊張して小さな声で言ってしまった

愛には小さすぎて聞こえなかったのかもかもしれない。

返事のない愛を見て変な奴だと思った。

変な奴・・・そして・・・俺は・・・

愛に確かめたい。

もしかして会いも俺と同じ、ずっと10年間、愛の中に俺がいた・・・?

思い当たるふしがいくつもある。

SNSで偶然見つけたと言っていたけど

あんな何万人もいる中でそんな事あるのか・・・?

もしかして俺を探していた・・・?

でも、もし違ったら俺、笑い者。

それに、さっきバイバイと言われて

・・・今更聞けない・・・

それから三ヶ月、智哉は毎日愛のことを考え過ごしていた。

沙織とは全くうまくいってない。

今はなんだか会いたくない。

家に沙織が来る日はできるだけ予定を入れた。

何度も何度も電話をしようとした。

何度も何度もメールをしようと携帯を開いた。

でも、3ヶ月、愛からは何の音沙汰もないという事は、今俺から電話してはいけない気がした。

智哉は山本に電話をした。

あの時のことも謝らなくちゃならない。

もしかしたら、愛は山本になら連絡しているかもしれない。

しかし、山本も知らないと言った。

そんな時、アメリカに住む父親から

『アメリカに来て一緒に仕事をしないか』

と、声をかけられた。

いい機会かもしれない。

でも、愛に何も聞けないまま心残りのままでは日本を発てない。

智哉はプライドも何もかも捨て、10年前毎日一緒につるんでいた山本に全てを相談しようと、山本を飲みに誘った。

全てを聞いた山本は笑いながら智哉にこういった。

『智哉からそんなマジな恋愛相談受けるとは思わなかった。』

智哉は聞き返した。

『恋愛相談？』

山本は驚いた顔をした。

『お前まさか、まだ気付いてへんの？』

智哉は黙る。

『マジで……？信じられへんほど、鈍感……って言うかひねくれモノやな。』

素直じゃないわ……』

山本が呆れていった。

『なんやねん』

智哉が聞いても山本は笑ってた。

『アホかお前は、どうしようもないアホやで』

と、山本が言った。

【でも、今更どうやって会えって言うねん……】

智哉は山本に会ったおかげで余計に悩む結果になってしまった。

【……おもいきって愛に電話を試してみようか……】

二人の決意

愛は携帯を手に取りm電話帳を検索する。

【星野 智哉】

久しぶりに見る画面、名前。

愛は少し手が震えた。

【この電話を最後にアドレスも番号も消去しよう・・・】

愛は通話ボタンを押した。

プッ プッ プッ プッ・・・

トゥルルルル

トゥルルルル

トゥルル・・・

カチャ

『・・・はい』

あの声だ。

低くいつも不機嫌そうに聞こえる、あの声だ。

たった三ヶ月ぶりに聞く声なのに、やけに懐かしく感じる。

それだけこの三ヶ月が長く感じたと言う証拠。

それだけ聞きたかった声だと言う事・・・

『もしもし・・・愛です』

愛は少し声がかすれてしまった。

喉がギュっとしめつけられているような感覚になる。

『うん』

智哉が話を止めてしまったので、愛は何を言っているかわからなくなり黙る。

すると、智哉から話をしだした。

『俺も今、電話しようとしてた』

愛は次の言葉が出てこない。

山本から聞いたって言う？

いや、それもあるけど、なんだか違う・・・

『ホンマはずっと、智哉からの電話を待っていたのかもしれん・・・』

愛は自分でも驚くような素直な言葉がでた。

『ありがとう、俺もずっと考えててたくさん愛に話さなあかんこと、見つかった』

智哉はここで、ちょっと間を置いて続けて話す。

『明日、何とかして一人で店に来てくれへんか・・・？
何時でもいいから・・・』

明日は日曜日、店は定休日のはずだった。

『・・・店、休みやろ・・・？彼女は？』

愛は聞いた。

毎週日曜日だけは彼女と一日過ごす為、今まではメールも電話もしない約束の日だった。

『うん、だから、開けとくから。』

俺、一人で待ってるから、女は大丈夫やから。

何とかするから・・・』

キンッ

電話の先から高い金属音がした。

智哉が煙草に火をつけたジツポの音だろう。

この音ですら、懐かしく感じた。

『わかった、明日、夜8時ごろいく・・・』

愛はもう既に、理由やきつかけは何であれ、会いたくて顔が見たくて仕方なくなっていた。

『待ってるから』

智哉は言った。

翌日曜日。

愛は3ヶ月ぶりに智哉の店に向かい車を走らせていた。

外は少し雪がちらつく程寒かった。

去年の冬はあまり雪がふらなかつたのに、今年は大阪にも何度も雪が積もる日があった。

東京の方では何年かぶりの大雪がニュースになったりしている。

今年はずいぶん寒い。

二月末の今日も震える寒さだ。

『帰り、大雪になってなきやいいけど・・・』

愛はいつものコインパーキングに車を停めた。

ここは智哉に初めて抱かれた場所。

たった一年前の事なのにもうだいぶ昔のように感じる。

そして、コインパーキングから店に向かう道。

沢山の道の脇の木々。

智哉と歩いた道。

智哉とコーヒーを買った自販機。

三ヶ月ぶりに通る道なのに、やけに懐かしい。

その道を少し早足で歩き、そして愛は店の前に立つ。

いつもは店のネオンがきらきらしているが、今日は全て消えている。

愛は息をのんだ。

そして、ゆっくり店のドアを開ける。

いつも入ると、薄暗い雰囲気のある店内で

『いらっしやいませ』

と聞こえてくる声も、クールな表情で立つ彼の姿も今日はなかった。

愛は静かな店内をゆっくりカウンターの方に向かい歩く。

BGMもない、静かな店内に、愛の足音だけがコツコツと響く。

カウンターに入ると、真ん中らへんの席に座る影が見えた。

立ち止まる愛に、その影がこちらを向いて

『いらっしやいませ。』

・・・今日は私服だけど・・・』

と、少し笑った。

その顔は、3ヶ月毎日忘れることなく

会いたくて会いたくて、見たくて見たくて、仕方なかった

智哉の優しい笑顔だった。

「アハハ！あつたあつた〜！
その後、智哉、アイツにマジギレして、喧嘩になつたんやんな〜
」！

「そう、あれはホンマに腹たつたわあ。
でな、その後警察になあ・・・」

「あ、あつたあつた！
あたしあの時笑い堪えるの必死やつた〜！」

「で、その後花火してさあ・・・」

「そうそう！！・・・」

「アハハ！めっちゃ懐かしい！」

智哉と愛は二人きりの店内で、お酒を飲みながら昔話に花を咲かせていた。

最初は無言だった二人が並んで席に着き、智哉の

『・・・昔馬鹿やった時のこと、どんな事覚えてる?』

と言う言葉から、昔話が始まった。

二人で話しながら

二人で思い出していくと

二人とも忘れていた色々な事が

どんどん次々に記憶から蘇る。

懐かしい話に盛り上がる二人は、3ヶ月前にわかれ、今日少し気ま
ずい空気の中で会ったことをすっかり忘れてしまっくらい、話が弾
んでいた。

そして、その思い出はナシの中には10年前、二人が全く接点を持
つていなかったのにも関わらず、常に同じ時を同じ場所で過ごして
いたことを改めて実感させられる。

話の中に

『あの時智哉が・・・』

『あの時愛は・・・』

と、お互いよく見ていて知っていたかのように、10年前のお互い
のことをよく話す。

当時は全く話などしなかったのに・・・

当時二人はお互いを意識していたと、自分の言葉で再確認する。

『あゝ笑い死にするゝ・・・』

愛がおなかを抱えて笑う。

『俺も・・・俺たちどんだけアホやったんよなあ!』

智哉も煙草を加えたまま、火をつけることも忘れて笑う。

『はあ・・・楽しい』

愛はお酒を一口のみ、続けて話す。

『じゃあ、智哉、これ、覚えてる？』

ずっと、あたし、覚えてたんやけど』

愛は言う言葉をまだ少し笑いが止まらない智哉が、やっと煙草に火をつけ

『なに なに?』

と、聞く。

『初めて会った時、智哉めっちゃ感じ悪くてさ、目も合わせてくれなくて、睨むような目で

あたしを見て。

で、移動するって話になって、あたしがヒデの単車の後ろでふと智哉見た時、

智哉、あたしに笑いかけたこと・・・覚えてる？』

カシャン

智哉がジッポを閉じた音が店内に響いた。

しばらくの沈黙。

『・・・俺・・・笑った・・・？』

智哉が愛の顔を見て聞く。

『うつわ・・・肝心なとこ覚えてへんで、この男』。

ずっとその意味聞きたくていつ聞こうかと思ってたのに・・・』

愛は智哉を冷たい目で少し笑いながら見た。

もう、ノリは一年前智哉を好きを気付く前のノリだ。

智哉は真面目な顔で考える。

『覚えてへん、ごめん・・・』

智哉がやけに真面目に答えたので、愛は茶化すように言う。

『ど〜せ、そんな男よなあ。智哉は!』

すると智哉はまた、真面目な顔で言う。

『・・・覚えてる限りその時の心境の俺やと、愛と目が合って、照れたか、ニヤけた・・・やな。

意味はないと思う。』

『は!?!?』

愛は素っ頓狂な声を出す。

しかし智哉は煙草を加えながらじっと考えている。

『意味わからんし!』

愛は少し笑いながらも焦り気味に答えながらお酒を飲む。

すると、智哉はまだ煙草を加えたままじつと斜め下を見て言う。

『・・・ホンマに意味解らん・・・?』

そう言った後、智哉は愛を見た。

『わ・・・わからんわからん!そんなんわからんわ!』

まっすぐ自分を見る智哉の目を見れないで、愛は引きつり笑いをし

ながら俯く。

『俺が推測するに・・・俺も愛と一緒にやと・・・思う』

智哉がまっすぐ愛を見て言う。

愛は黙る。

『ホンマにわからんか？』

智哉はしつこく聞く。

愛は黙って首を縦に二度振る。

もちろん、愛はわかっている。

でも、そんなわけがない、万一そうだとしたら、智哉の口からはつきり聞きたい。

『今日、愛が店に入ってきて、カウンターのところに立つ愛を見て、俺、わかった。』

っていつか、気付いた。

・・・いままで気付かんふりしてたんやけど・・・』

智哉の口が一度止まる。

そして少しの間を置いて決意したかの様に言う。

『俺、認めた。』

愛はめをつぶる。

『愛、ちゃんと言つからこつち見てや』

智哉が言う。

愛はゆっくり智哉の方を見る。

『今まで、ごめんな。』

よーさん傷つけたと思う、俺も捻くれて素直やないし。しかも、再会したら人妻なってるし。

気付かんふりしとったけど、愛も素直に言うてくれたし、言うわ。

』

智哉が煙草を灰皿に押し消し、愛をじっと見た。

『10年前から俺は、愛の存在がずっと気になってた。』

智哉は続けて話す。

『でもあの時はツレの日での女やし、ツレの女にはなんぼなんでもよー手出さんし・・・』

再会したらしたで人妻やる？

自分の気持ちごまかすには最高のシユチュエーションやん。

・・・ゴメンな、気付かんかったとは言え、自分ごまかして遊びの女として側に置いとこうなんて卑怯な事して・・・』

言葉を出せず、首を激しく横に振る愛の目には少し涙が溜まっていた。

『・・・それを気付いて認めたんは。昨日今日の話やねんけど・・・
ホンマは無意識に俺の側に置いときたかったんやわ・・・』

智哉はやっとお酒に目をやる。

『三ヶ月かかった・・・でも、間違ってたら情けないけど
俺が思うにやけどな・・・？

愛も一緒やない・・・？

忘れられなくて、俺を探してたんちゃう・・・？』

智哉は恥しそうに目を反らして言う。

そしてここまできて愛はやっとな口を開く。

『笑かすわ・・・』

愛は言った言葉に智哉はこっちを見ないで少し俯く。

続けて愛が少し声を震わせて言う。

『智哉をあたし、全く一緒やん・・・めっちゃ遠回りしてたやん・・・

ホンマうちら、めっちゃアホやで・・・

ホンマ笑かす・・・』

愛の目から大粒の涙がポタポタと落ちた。

愛が言い終わると智哉は愛の方を見る。

俯き涙を落とす愛を見て

『ほんまやん、俺ら、どこまでアホやねんなあ？
似たもの同士やん。』

と、呆れた顔で笑い、愛の肩を抱く。

『いきなりやけど、今めっちゃチューしたいんやけど、チューして
いい？』

智哉が愛に聞く。

愛は少し笑い頷く。

そして、智哉は愛にキスをした。

少し震えてた。

顔が離れた後、智哉は無邪気な笑顔で言った。

『ホンマに好きな女としか俺はこんな本気のチューセーへん！』

愛は笑った。

そして智哉に抱きついた。

智哉も強く強く、愛を抱きしめ返した。

今までの遠回りした時間を埋めるように・・・

『・・・ふふっ・・・あはは・・・っ』

突然愛が笑い出す。

抱き合つたまま、顔を水に智哉は愛に

『何やねん、急に、こんなムードいい時に冷めるわ〜』

と、少し笑いながら言う。

『ふふ・・・だつて智哉・・・』

めっちゃ起つてるんわかる・・・うはははっ』

愛が含み笑いをして言う。

『やかましいわ！』

『しゃーない、男の生理や！』

智哉は相変わらず愛を抱きしめたまま言う。

『何興奮してんのよ・・・っふふふ・・・』

愛は抱きしめたまま智哉の背中をパシパシと二回叩く。

『大好きな女とこんだけ密着すりゃそら興奮もするわ』

智哉が笑う。

『……する?』

愛が笑いながら聞く。

『……いいの?』

智哉が笑いながら答える。

『智哉、我慢できそうに無いし』

愛が智哉を抱きしめた腕にぎゅっと力を入れなおす。

『うん、できへん』

智哉は笑いながら答え、愛と同じ様にぎゅっともう一度力を込め抱きしめ返す。

『……店やで?いいの?』

愛が笑う。

『関係あらへん、ここまできたら止まらんやろ?』

揺れる肩から智哉が笑ってるのがわかり、愛が笑う。

すると智哉は続けて言う。

『両想いの、愛のあるエッチ・・・しよか』

智哉の言葉に愛が顔くと、抱きしめていた腕を緩め、二人は顔を見合わせ少し照れて笑った。

それから少しの間をおいて、二人は長く熱いキスをした。

ゆっくり 丁寧に 二人は愛し合う。

何度も何度もキスをして

お互いの顔を何度も見つめながら

二人は長い時間をかけ愛し合う。

今、自分を抱いているのが智哉であることを確認するように

何度も会いは智哉を見つめ、頬を手で触れる。

今、自分が抱いているのは愛である事を確かめるように

何度も智哉は愛を見つめ、髪を撫でる。

愛しさに胸が潰れてしまいそうになりながら、二人は一生懸命相手に愛を伝える。

『・・・俺、やばい、頭ん中おかしくなりそうや・・・』

智哉は愛の髪を撫で、少し荒くなった息で愛に呟く。

『……あたしも、説明できない……こんな気持ちで抱かれたの……初めて……』

愛も智哉の頬を両手で触れながら、吐息混じりの声で答える。

『愛……どうしようもなく、愛しい……』

智哉が目をつむる

『……あたしもどうにかなるくらい……愛しいよ……智哉』

愛も目をつむった

そして、二人はギュッと抱きしめあった

素直な気持ちで

二人はカウンターの隅で、床に座りながら話をする。

『智哉はさ、落とせない女なんかいないって思ってるやろ?』

愛が智哉の肩にもたれて話す。

『あはは、思ってるかもしれん』

智哉は愛の髪を撫でながら答える。

『あたしもな、一緒。』

男なんか単純、簡単に落とせるわ、あたしは恋愛のプロや!って今まで思ってた。

何股もかけたり、飽きたら捨てたり。

性格悪いやろ?』

愛は少し笑いながら言う。

『めっちゃ最低やん。』

まあ、俺も人のことは言えんけどな』

智哉は笑いながら答え、愛に掛けてある自分の上着のポケットを探り、煙草を取り出す。

『……最初は、智哉に対してもそうやってん……
智哉、落としたるって……。』

愛が少し真顔で言う。

『え！？そうなん！？』

俺を忘れられなくて探したんちゃうん！？』

智哉は加えたタバコを一度手に取り、愛を見て聞く。

愛は少し俯いて笑い、答える。

『うん、探したには探したんやけども、智哉の事、何故かずっと覚えてた理由

きつとあたしに感じ悪かった智哉に仕返しする為やと、最初は思ってたから。』

愛は笑う。

智哉は

『なんやそれ、しばくぞー！』

と、笑う。

『でもあたし、それは違ってたってちゃんと気付いたやん。

最初は認めたくなくて苦しんだけど・・・』

愛は智哉の持っているジッポを奪い、智哉が加える煙草に火をつけた。

『・・・まあ、俺も最初は都合のいい女が、やってきおったって思ってたけどな』

智哉が笑いながら言うので、愛も笑いながら智哉の頭を軽く叩く。

『ほんまにうちら、素直やないよな……』

愛はまた智哉の肩にもたれかかり言う。

『……二人とも、めっちゃ恋愛下手なんやで、ホンマは。』

智哉が煙をフーツと深く吐く。

『あはは、ホンマやん、10年前にちゃんと素直に気付いてたらこんな風にならんかったのに』

もつごないも出来んようになった今に、やっと気付いて……

あの時素直に認めてたら今のこの未来、変わってたのかもしれないな』

愛は少し切ない声で言う。

智哉は考え込むように黙り込んだ。

しばらくの沈黙の後、智哉が口を開いた。

『なあ、俺、アメリカ行くねん』

愛は山本から聞いていたのでついにその話が来たか……と言う感じ
じで

『うん』

と、答えた。

『驚かへんの？』

と、智哉が聞くと、ハッと我に返り

『え！？あ、ゴメン、ボーっとしてた』

と、答えた。

また智哉は少し黙り、しばらくして愛を見た。

『素直になる努力する。』

だから思ってる事を一度だけ言う。』

智哉が愛をじっと見つめた。

『一緒にけーへんか？』

智哉の言葉に愛は驚き、智哉の顔を見た。

智哉は真顔で続けて愛に話す。

『もちろん、愛にはたくさん失うものがある。

だから、強制じゃない・・・

ホンマは強制したいけど・・・』

智哉が言葉につまり、頭を激しく掻いた。

『あゝも〜！』

素直になりすぎて俺らしさまで無くしてどうすんねん！』

智哉はそう言うのと、愛をまっすぐな目で見て、愛の両肩に手を置いて深く息を吸った。

『俺はドSやぞ！』

愛は真面目な顔で言う智哉に

『はあ！？』

と、言い、少し笑った。

智哉はそれに構わず愛にいい続けた。

『俺と一緒に来い！』

『これは強制や！』

最後の決断

愛は家で夕飯の支度をしていた。

一週間前、智哉と店で過ごし、最後に言われた言葉が24時間、頭に巡り愛をドキドキさせる。

『俺と一緒に来い』

愛は包丁を握り締めたまましゃがみこむ。

【智哉と一緒に行きたいよ……】

あの後、何も言えずに固まっている愛に智哉はこう言った。

『オヤジの仕事、一緒にしないかって言われて、4月の頭から、サンフランシスコに行くことになった。』

日本には次、いつ帰れるか今はまだわからへん……

今、3月の末だから、あと一ヶ月くらい……

三月の最終週の月曜日、昼の1時に大阪城のあの、広場に来い。

……わかるよな？

最低限の荷物だけでいい。

一ヶ月あるから……

……わかるやんな……？』

愛は智哉とサヨナラする事など、今は考えられなかった。
考えただけでとめどなく涙が出てくる。

【せっかくわかりあえたのに……
いきなりバイバイなんか絶対に嫌……】

愛の頭の中には、智哉と離れると言う選択は全くなかった。

愛は次の日、役所へ足を運んだ。

『悪いけど……沙織、別れてくれ』

智哉は店を閉めた後、沙織と二人で店のカウンターで話を切り出した。

『智哉、何言ってるの？』

少し震えた声で、笑いながら答える沙織。

『俺、アメリカにまた行く事になった。』

智哉は沙織の方を見ずに言った。

『……あたしも行く』

沙織は俯いて言う。

『ゴメン。それはできへん……』

智哉は静かに答えた。

『いやや、何でよ?!』

沙織は耐え切れず、涙を流し、智哉に聞く。

『連れて行きたい……女がおるねん』

智哉は相変わらず沙織の方を見ずに言う。

『……あの、人妻やろ……?』

沙織は智哉を睨むような目をして聞く。

智哉は黙り込む。

『智哉、何してんの!?!』

人の家庭壊して、アホちやう!?!』

あかん、絶対にあかん!』

沙織は感情をぶつけるように、怒り、涙して智哉の肩を激しく揺さぶり言う。

『……ゴメンな、沙織』

智哉はそれだけを言った。

『店は？店はどうすんの！？』

沙織はなんとか繋ぎとめようとするが、心の中ではもう、わかっていた。

だいぶ前からもう、智哉の気持ちは自分にはない事を。

『・・・閉めるしかないよな。

今は家族みんなアメリカやし・・・』

智哉が答えた瞬間、沙織はとうとうテーブルに平伏せて声を上げ号泣した。

『・・・ホンマごめん』

智哉は頭を下げ。店を出た。

外にでた智哉は煙草に火をつけて携帯を取り出した。

愛には一カ月後の約束の日まで連絡しない約束だ。

『もしもし・・・？オヤジ？

今そっちは昼・・・？

うん、うん、俺、行くわ。

うん、・・・でね』

智哉はアメリカ行きを決めたことを父親に伝えた。

そして喜ぶ父親にもう一つ伝えた。

『一緒に連れて行こうと思ってる女がいるんやけど・・・頼むわ。』

二人は、これからの二人の進む道を

それぞれ着実に進めていた。

そして

とうとう約束の日がやってきた。

二人の再出発の日。

二人の人生の再出発

【うわー、懐かしいなあ・・・】

愛は10年ぶりにこの大阪城公園に来た。

【10年ぶりなのに、この景色、覚えてるもんなあ・・・】

少し早めに公園に着いた愛は、しみじみ景色を眺めながらゆっくり歩く。

三月末、今日はとても暖かい。

公園には散歩をする人や、走り回る子供、仲良くベンチに座るカップルや、海外からの観光客。

幸せそうな人々が沢山いた。

【あたしもこれからいっぱい幸せになるんだ・・・】

愛は約束の広場に向かった。

キンツ・・・カシヨツ

キンツ・・・カシヨツ

ジツポを開け閉めしながら智哉は広場にあるベンチに座り、火のついていない煙草をくわえ、じつと足元を見つめ何かを考えていた。

『・・・・・・・・』

キンツ シュボツ・・・・・・・・カシヨン・・・

『フーーーーー・・・・・・・・』

智哉が煙草に火をつけ、深く煙を地面に向かい吐き出した。

サクツ サクツ サクツ サクツ

芝生を踏みつける足音がだんだん近づき、自分の前で止まった。

智哉はゆっくり顔を上げた。

するとそこには、智哉の1メートル程先に愛が立っていた。

『何、難しい顔してんねん!』

愛が笑いながら智哉に言った。

智哉はしばらくの間、愛をボーっと眺めた。

愛も笑顔でそんな智哉をじっと見つめた。

『愛、お前やつぱり、いい女だな。』

智哉の言葉に

『そやろ!?!』

と、愛は笑いながら答えた。

『ちよつと散歩でもしようか』

智哉がそう言い立ち上がる。

愛は笑顔で頷いた。

『なんか、飲む？』

しばらく歩き、自動販売機の前を通りかかるとき、智哉はポケットから小銭を出しながら愛に言う。

『ちょうど、喉渴いてた』

愛が言う。

『どれ飲む？』

智哉が聞くと、愛は【売れています】のPOPの付いたコーヒーを指差す。

智哉はそのコーヒーのボタンを押しながら

『売れてますって書いてたからこれ選んだんやろ？これ、マズイで』

と言う。

『前も同じこと言ってるやん。』

そんなん言いながら美味しいんやろ？

もう騙されへんで！』

愛はそう言うのと、コーヒーを差し出す智哉の手からコーヒーを奪い取り、勢い良く飲む。

『うっわ、甘っ！何これ！？』

愛が噴出しそうになってるのを見て、

『だから言ったやん、マズイって』

と、智哉は笑った。

ハンカチで噴出したコーヒーを拭いている愛に

『そついやさ、なんぼでもお茶出てくる自販機あったん、覚えてるやろ?』

と、智哉は言う。

『うん、あつた〜!』

愛が答えると、智哉が続けて

『あの自販機、なくなっててん、俺らのせいかな!?』

と、笑いながら言う。

『絶対そつやわ〜!』

と、愛も笑いながら答えた。

『……よく来たよなあ。この公園』

智哉がしみじみ言う。

『うん、めっちゃ懐かしい……』

愛もそれに答えた。

しばらく二人は無言で歩く。

ゆっくりと、時が流れる。

『・・・今日、広場で座って愛を待っている間・・・
大きな鞆、抱えてくる愛と、小さな鞆しか持っていない愛・・・
どっちの愛が来て欲しいのか、正直解らなくなった。』

智哉がポツリポツリと、話し出す。

『俺が顔を上げた時、小さな鞆を持っている愛が目に入って・・・
心からイイ女やな・・・って思った。』

智哉の言葉に愛は少し笑いながら

『うん、知ってる』

と、答えた。

『・・・俺は男一人の為に旦那や子供捨てるような非常な女なら、
好きになってへんわ。』

智哉が少し笑いながら言う。

愛も少し俯き笑った。

『・・・愛、今日は帰ったら、何のご飯作るん？』

智哉が笑顔で聞く。

『旦那の好きな八宝菜と、智哉の大好きなから揚げ！』

愛は満面の笑みで答えた。

約束の日の前日の夜

夕飯後、いつものようにリビングで寛ぐ夫と、楽しそうに遊ぶ子供の姿があった。

愛は前に役所からもらってきた離婚届を、キッチンの引き出しから取り出し、ポケットに入れた。

そして、夫の側に行き、ゆっくり話しかけた。

『あんな、あたし・・・話あんねん・・・』

夫はテレビに目を向けたまま

『何？』

と、聞いた。

『あんな、あたしな・・・ずっと隠してたこと・・・あるねん・・・あんな・・・』

なかなか言い出せない愛に、夫はテレビを見たまま言った。

『智哉君・・・やる？』

夫の言葉に愛は驚きを隠せず、声も出せなかった。

そんな愛をチラッと見て、夫は言った。

『気付いてへんと思ってた？』

旦那は淡淡と話す。

愛は言葉が出ない。

『ここ一年、楽しそうにメールして、今まで毎日真面目に主婦やってた愛が、オシャレして夜 家を出て行く、それで俺が気付かんとでも？』

夫はずっとテレビに目をやりながら話す。

愛はポケットの中の離婚届をギュッと握り締めた。

言葉を捜して黙りこくる愛。

その愛の方にやっと夫は目を向け言った。

『なんてのは、嘘、全く気付いてなかった』

夫が少し笑う。

愛はもう頭の中がパニック状態になり、目を白黒させていた。

『一週間前、俺の携帯にさ、電話があってん』

今まで横になっていた夫が起き上がり、愛と向き合う。

『・・・誰から・・・？』

愛が聞く。

『沙織ちゃん』

びっくりした顔をしたまま固まる愛に、夫は続けて話す。

『一回、一緒に店行った日あったやん？』

あの時、愛が電話しに外に出て、なかなか帰ってこないし、気付いたら智哉君もいなくて

その時に沙織ちゃんが俺に言ったんよ。

【あの二人、怪しいねん】

『・・・って。』

夫は優しい顔で話し続ける。

『最初、んなワケないやん！言うたんやけども、沙織ちゃんは絶対怪しいって。』

何か愛が怪しい動きしたら教えて欲しいって、電話番号だけ交換したんやん』

愛はあの日の夜を思い出す。

そうだ、10分か、15分・・・

結構な時間があったのに、夫も嫉妬深い沙織も見に来なかった。

今思えばそういう会話が夫と沙織にあっても変じゃない。

夫がまた話し出す。

『俺、それでもまだ、そんな事あるわけが無いって沙織ちゃんの話笑いながら聞いてた。』

だからその後愛が来て、家に帰っても愛には何も聞かんかった。』

夫はどうしてこんなに落ち着いて話してるんだろう・・・

愛はそんな事を考えながら話を聞く。

『結局あの後、沙織ちゃんに電話する事も、沙織ちゃんからの電話もなく、』

やっぱり何もなかったんやってホッとしてたらさ、

先週、沙織ちゃんから連絡あつて・・・』

夫は一旦言葉に詰まった。

『・・・智哉君に、愛とアメリカ力行くから別れて欲しい言われた・・・つて

泣きながら言われて・・・』

夫は少し、声が震えていた。

愛は下を向き、目をつむる。

『俺、嘘やる？』言つた。

最近会いはまた、出かけることもなくなつてたし、有り得ないと思つて・・・

でも、沙織ちゃんに俺、めっちゃ怒られてん』

夫はそう言つと、少し笑つた。

『アンタがそんな暢気なことばかり言つて、嫁をちゃんと捕まえてへんから

ちゃんと嫁を見てへんから、こんな事になつたんや！

・・・つてな、電話切られた。』

夫は一人で遊んでた子供を抱き上げ、膝に乗せた。

『俺、その後もしばらく信じられんかつたんやけど・・・ホンマなら・・・と思つたら、沸々怒りわいてきて・・・愛にすぐ電話して確認して、どついたるか・・・思つた。』

夫の声が少し強張る。

『でもな、沙織ちゃんの言う通り、俺気付かんとアホやなって……
ちゃんと愛見てへんかったし、会話も最近……
あまりしてへんかったな……って。』

夫が俯く。

『責めるだけの立場ちゃうやん……って。

優しいフリして……遊びに行っても文句言わん、優しい旦那や
って……

そう自分で思っ……

それだけで満足やる……って……

……夫婦の会話とか……なんもせんと……逃げ……』

俯く夫は声が完全に震えていた。

胡坐をかいた夫の足に、俯く夫の目から大粒の涙が落ちる。

愛の目にも涙がたまる。

『結局、今日愛から言われるまで……何も言えん……かった』

夫に抱かれた子供が夫の顔を覗き込む。

『ばば？』

愛も耐え切れず、俯いた瞬間、自分の手の甲に、涙が落ちた。

『ホンマやったんやな・・・俺、アホや・・・気付かんとアホや・・・情けない・・・』

夫はいきなり天井を見上げ、涙を手で拭いた。

そして、愛を見て

『今まで、愛情与えなくて、本間にゴメンな。

結婚してからプレゼント一つあげてへんかったな・・・

一緒にただいるだけやった・・・

愛想つかされてもしかたない・・・

ごめんな。』

愛は自分も今まで夫に対して愛情無く過ごしていた事実、結婚した理由、

そついった夫に対しての裏切り行為全てを思い、涙が止まらなかった。

こんなに夫は自分の事を想ってくれてたのに・・・

浮気した嫁に責めず自分の非を探し謝罪し・・・

昔の愛なら何一つ感じなかったであろう。

しかし、人を愛する気持ちを知り、悲しみを知り、痛みを知り、大切に思う気持ちを知った今では、今までの自分がしてきた夫への数々の裏切り、それに対し、夫の痛みがどれほどのものかが解り、胸が痛く、息すら出来ない苦しさを感じていた。

『で……行く……んか？』

夫は愛に優しく悲しい声で問いかける。

愛は黙ったまま俯いていた。

声が出せない。

『ままあ？』

その時、子供が立ち上がり、愛の顔を覗き込み、いきなり走り出す。

そして、手に持った一枚のティッシュを

『はい、おはな きれい きれい しまちよ』

と、愛に渡した。

愛はそれを受け取れず、俯いたまま。

すると、子供が、愛の顔を手で押し上げ、愛の顔をティッシュで一生懸命拭いた。

その瞬間、そんな我が子の動作に、愛は我慢できなくなり、声を上げ、子供の様に泣いた。

子供は愛の頭をヨシヨシしている。

【あたし、幸せの中に・・・いつもいたんだ・・・

恋愛じゃなくて、家族の幸せ・・・

人を好きな気持ちだけじゃなく、それにすらあたしは気付いていなかった大馬鹿者・・・】

愛は子供を強く強く抱きしめた。

そして、その後、夫に向かい、土下座をした。

『ごめんなさい・・・』

すいませんでした・・・

本当に・・・すいませんでした・・・』

出会って恋をしたふりをして、愛したふりをして

自分のワガママの為に結婚してしまった事実を

そして、更に家族を捨て、愛する智哉と生きて行こうと勝手に決めてしまった事を

その事実を口には出さなかったが、全ての意味を込め、愛は謝り続けた。

【私は 愛する智哉と一緒にいきたい。

でも、沢山の人を利用し 傷つけた 今までの私への罰

私は今から 沢山裏切った夫へ 沢山の償いをしなくてはならない

一度自分で捨てようとしてしまった

罪もない愛する子供の為に

いつの日か 必ず愛へと変わるであろう夫の為に

私は 智哉とは行けない】

愛は、夫と子供が寝静まった後、記入した離婚届をビリビリに破り捨てた。

そんな恋のカタチ

『から揚げかぁ！いいなぁ！』

俺、大好きやわ』

智哉が笑いながら言った。

『早く智哉も大好きなお嫁さん、見つけなさい！』

愛は智哉の肩をパンパンと叩く。

『俺、結婚できるんかなあ〜・・・』

智哉が無邪気な笑顔で言った。

この、愛しくてしかたない

無邪気な笑顔も

普段は鋭く冷たい目も

笑うと無くなる目も

キュッと上がる口角も

サラサラの黒髪も

綺麗な白い肌も

華奢なのに広い肩幅も

今日で最後。

『智哉、手、繋ごっか』

愛が手を差し出す。

『照れるやん』

智哉は笑いながら愛の手をギュッと握った。

愛も強く握り返した。

『智哉、今までの彼女と手を繋いで歩いた事ある？』

愛は笑いながら智哉に聞いた。

『……よく考えたら、無いな』

智哉は大きな声で笑う。

『そうやろうと思った！』

愛も笑う。

『やめろ、うっとおしい！言つて、振りほどいてたわ』

愛が上を見ながら小さな声で言う。

智哉は揺れる緑から、目線を愛に移す。

幸せそうな顔で、少し微笑みながら、揺れる緑を見つめる愛をみて

智哉は自然と優しい笑顔になる。

春の暖かい風が、智哉の黒髪を靡かせる。

そして、そんな愛しい愛をしばらく見つめ、智哉はしみじみと言った。

『アホみたいな顔、しゃがって』

……そう言うと、智哉は又、無邪気な笑顔で笑った……

今回の勝負

好きになった時期

同じ

隙と気付いた時期

同じ

駆け引き

同等

愛した時間

同じ

別れを決めた人

二人

従って この勝負

【文句なしの 引き分け】

）
E
N
D
）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0632e/>

そんな恋のカタチ

2010年10月23日13時57分発行